

京都府遺跡調査報告集

第140冊

1. 仲ノ段遺跡第2・3次
2. 天田内遺跡第2次
3. 丹波綾部道路関係遺跡
 - (1) 深志野古墳群
 - (2) 丁谷古墓
4. 長岡宮跡第473次・南垣内遺跡
5. 長岡京跡右京第986次・上里遺跡
6. 新田遺跡第7次
7. 八幡木津線関係遺跡
 - (1) 鞍岡山2号墳
 - (2) 片山遺跡
 - (3) 下馬遺跡

2010

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は「京都府遺跡調査報告集」として、平成20・21年度に京都府建設交通部の依頼を受けて実施した仲ノ段遺跡、天田内遺跡、長岡宮跡第473次・南垣内遺跡、長岡跡右京第986次・上里遺跡、新田遺跡、八幡木津線関係遺跡、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した丹波綾部道路関係遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された国土交通省近畿地方整備局、京都府建設交通部をはじめ、京都府教育委員会・福知山市教育委員会・京丹波町教育委員会・向日市教育委員会・長岡京市教育委員会・八幡市教育委員会・精華町教育委員会などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に取めた報告は下記のとおりである。

- ・ 仲ノ段遺跡第2・3次
- ・ 天田内遺跡第2次
- ・ 丹波綾部道路関係遺跡
- ・ 長岡宮跡第473次・南垣内遺跡
- ・ 長岡京跡右京第986次・上里遺跡
- ・ 新田遺跡第7次
- ・ 八幡木津線関係遺跡

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 仲ノ段遺跡第2・3次	福知山市大江町北有路地内	平20.11.12～平20.12.19 平21.6.23～平21.8.28	京都府建設交通部	黒坪一樹・柴晩彦
2. 天田内遺跡第2次	福知山市大江町天田内地内	平21.4.21～平21.6.12	京都府建設交通部	筒井崇史
3. 丹波綾部道路関係遺跡	船井郡京丹波町曾根・井脇	平21.5.8～平21.7.6、 平21.8.3～平21.9.18	国土交通省近畿地方整備局	黒坪一樹・石尾政信
4. 長岡宮跡第473次・南垣内遺跡	向日市寺戸町南垣内56-1	平21.7.7～平21.7.28	京都府建設交通部	竹井治雄
5. 長岡京跡右京第986次・上里遺跡	長岡京市井ノ内玉ノ上5-1	平21.10.20～平21.12.3	京都府建設交通部	石尾政信
6. 新田遺跡第7次	八幡市内里荒場・深田地内	平21.10.14～平21.12.15	京都府建設交通部	柴晩彦
7. 八幡木津線関係遺跡	相楽郡精華町大字下狛小字長芝・大福寺ほか	平20.11.11～平21.3.9	京都府建設交通部	竹原一彦・石崎善久

3. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。

4. 本書の編集は、調査第2課調査担当者の編集原案をもとに、調査第1課資料係が行った。

5. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査第1課資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 仲ノ段遺跡第2・3次発掘調査報告	1
2. 天田内遺跡第2次発掘調査報告	17
3. 丹波綾部道路関係遺跡発掘調査報告	27
4. 長岡宮跡第473次(7ANBMC-10地区)・南垣内遺跡発掘調査報告	37
5. 長岡京跡右京第986次(7ANGTE-4地区)・上里遺跡発掘調査報告	43
6. 新田遺跡第7次発掘調査報告	49
7. 八幡木津線関係遺跡発掘調査報告	55

挿図目次

1. 仲ノ段遺跡第2・3次

第1図	調査地および周辺の遺跡分布図	1
第2図	調査区・トレンチ配置図	2
第3図	A・Cトレンチ土層実測図	3
第4図	A～Cトレンチ遺構平面図	3
第5図	A-S X01実測図	4
第6図	出土遺物実測図	5
第7図	出土銭貨	5
第8図	1区中近世遺構実測図	6
第9図	1区土層実測図	7
第10図	中近世遺構実測図、溝土層図	8
第11図	1区下層土層実測図	8
第12図	1区下層遺構実測図	9
第13図	2区遺構・土層実測図	10
第14図	出土遺物実測図(1)	12
第15図	出土遺物実測図(2)	13
第16図	出土遺物実測図(3)	15
第17図	出土遺物実測図(4)	16

2. 天田内遺跡第2次

第1図	調査地位置図および周辺の遺跡分布図	17
-----	-------------------	----

第2図	トレンチ配置図及び周辺地形測量図	18
第3図	各調査トレンチ平面図	20
第4図	各調査トレンチ土層断面図	21
第5図	出土遺物実測図(1)	23
第6図	出土遺物実測図(2)	24
第7図	出土遺物実測図(3)	25

3. 丹波綾部道路関係遺跡

第1図	調査地位置図	27
第2図	調査地位置図	28
第3図	調査地区配置図	28
第4図	1～3地区土層断面図	29
第5図	1地区平面図	30
第6図	1地区出土遺物実測図	30
第7図	2地区平面図	31
第8図	2地区出土遺物実測図	32
第9図	3地区平面図	32
第10図	調査地位置図および周辺遺跡分布図	33
第11図	調査地地形測量図	34
第12図	調査地平面図	35
第13図	土層断面図	35
第14図	土坑S K02実測図	36

4. 長岡宮跡第473次(7ANBMC-10地区)・南垣内遺跡

第1図	調査地位置図	37
第2図	調査地位置図および周辺調査地	38
第3図	1トレンチ検出遺構配置図	39
第4図	2トレンチ検出遺構配置図	40
第5図	出土遺物実測図	41

5. 長岡京跡右京第986次(7ANGTE-4地区)・上里遺跡

第1図	調査地位置図および周辺遺跡	43
第2図	周辺調査地およびトレンチ配置図	44
第3図	調査地土層実測図(1)	45
第4図	調査地土層実測図(2)	46

第5図	調査地平面図	47
第6図	流路跡 S D01・02実測図	47
第7図	出土遺物実測図	48

6. 新田遺跡第7次

第1図	調査地および周辺の遺跡	49
第2図	調査トレンチ配置図	50
第3図	各トレンチ土層柱状図	51
第4図	調査地遠景	51
第5図	A地区検出遺構平面図	52
第6図	B-1地区掘削状況	52
第7図	C地区全景	53
第8図	D地区深掘り状況	53
第9図	出土遺物実測図	53

7. 八幡木津線関係遺跡

第1図	周辺遺跡分布図	56
第2図	鞍岡山古墳群位置図	57
第3図	2号墳調査前地形測量図	59
第4図	2号墳調査後地形測量図	60
第5図	2号墳埋葬施設 S X 03 実測図	62
第6図	埋葬施設 S X 03 東棺遺物出土状況図	63
第7図	埋葬施設 S X 03 東棺棺外遺物出土状況	64
第8図	土器棺墓実測図	66
第9図	墳丘南東裾平坦面土壌墓実測図	66
第10図	埋葬施設 S X 03 出土金属製品実測図	68
第11図	埋葬施設 S X 03 東棺出土玉類実測図	69
第12図	2号墳墳丘・土器棺・土壌墓出土遺物実測図	70
第13図	片山遺跡・下馬遺跡トレンチ配置図	71
第14図	片山遺跡トレンチ平面図	72
第15図	下馬遺跡トレンチ配置図	73
第16図	下馬遺跡トレンチ実測図1	74
第17図	下馬遺跡トレンチ実測図2	76
第18図	下馬遺跡トレンチ実測図3	77
第19図	下馬遺跡出土遺物実測図	79

図版目次

1. 仲ノ段遺跡第2・3次

- 図版第1 (1)調査地の状況(北東から)
(2)調査地の状況(南東から)
- 図版第2 (1)第2次Bトレンチ全景完掘状況(南から)
(2)第2次Cトレンチ全景完掘状況(南から)
(3)第2次Aトレンチ南半部完掘状況(南から)
- 図版第3 (1)第2次AトレンチS X01内出土土器(東から)
(2)第2次AトレンチS X01内出土銭貨など(東から)
(3)第2次Aトレンチ南壁断面(北から)
- 図版第4 (1)第3次調査前の状況(北西から)
(2)第3次調査前の状況(北東から)
(3)第3次1区設定状況(南西から)
- 図版第5 (1)第3次溝SD27完掘状況(北西から)
(2)第3次溝SD27完掘状況(南東から)
(3)第3次溝SD27堆積状況(南東から)
- 図版第6 (1)第3次土坑SK42堆積状況(東から)
(2)第3次土坑SK42完掘状況(南西から)
(3)第3次土坑SK29堆積状況(北東から)
- 図版第7 (1)第3次土坑SK29完掘状況(南東から)
(2)第3次土坑SK40堆積状況(北西から)
(3)第3次土坑SK36完掘状況(南東から)
- 図版第8 (1)第3次土坑SK36完掘状況(東から)
(2)第3次2区全景(北西から)
(3)第3次2区土坑SK03踏廃棄状況(南から)
- 図版第9 (1)第3次2区全景(北西から)
(2)第3次2区全景(南西から)
(3)第3次1区下層調査状況(北西から)
- 図版第10 (1)第3次作業状況(南西から)
(2)第3次下層谷部堆積状況(南東から)
(3)第3次谷部堆積状況近景(東から)
- 図版第11 (1)第3次1区下層谷部堆積状況(北西から)
(2)第3次1区下層谷部堆積状況(南西から)

(3) 第3次磨石出土状況(南西から)

図版第12 (1) 第3次出土遺物 1

(2) 第3次出土遺物 2

図版第13 (1) 第3次出土遺物 3

(2) 第3次出土遺物 4

図版第14 (1) 第3次出土遺物 5

(2) 第3次出土遺物 6

2. 天田内遺跡第2次

図版第1 (1) 1トレンチ南半全景(北東から)

(2) 1トレンチ北半全景(南西から)

(3) 1トレンチ土層断面(南西から)

図版第2 (1) 2区作業風景(南西から)

(2) 2-1トレンチ北端土層断面(南西から)

(3) 2-1トレンチ上層全景(北東から)

図版第3 (1) 2-1トレンチ全景(南西から)

(2) 2-2トレンチ南端土層断面(北東から)

(3) 2-2トレンチ中央部土層断面(南西から)

図版第4 (1) 2-2トレンチ中央部全景(南西から)

(2) 2-2トレンチ南半部全景(西から)

(3) 2-2トレンチ北半部全景(南西から)

図版第5 (1) 2-3トレンチ土層断面(南西から)

(2) 2-3トレンチ全景(北東から)

(3) 2-4トレンチ土層断面(南西から)

図版第6 (1) 2-4トレンチ下層全景(南西から)

(2) 2-4トレンチ下層北端部全景(北東から)

(3) 2-4トレンチ下層土坑S K21全景(南東から)

図版第7 (1) 2-4トレンチ下層 溝S D32全景(東から)

(2) 2-5トレンチ全景(南西から)

(3) 土坑S K36完掘状況(南東から)

図版第8 (1) 3-1トレンチ全景(北東から)

(2) 3-1トレンチ北半部全景(南西から)

(3) 3-1トレンチ土層断面(南西から)

図版第9 (1) 3-2トレンチ上層遺構面全景(北東から)

(2) 3-2トレンチ上層遺構面全景(南西から)

- (3) 3-2 トレンチ下層遺構面全景(南西から)
- 図版第10 (1) 3-2 トレンチ土坑 S K28 全景(北東から)
 (2) 3-2 トレンチ土坑 S K29 完掘状況(北から)
 (3) 4-1 トレンチ全景(北から)
- 図版第11 (1) 4-2 トレンチ全景(南西から)
 (2) 4-3 トレンチ全景(北東から)
 (2) 4-3 トレンチ全景(北東から)
- 図版第12 (1) 出土遺物 1
 (2) 出土遺物 2

3. 丹波綾部道路関係遺跡

- 図版第 1 (1) 調査地北側遠景(南西から)
 (2) 調査地全景(西から)
 (3) 調査地南側(北西から)
- 図版第 2 (1) 1 地区掘削状況(南から)
 (2) 1 地区全景(西から)
 (3) 1 地区北東部(西から)
- 図版第 3 (1) 2 地区掘削状況(西から)
 (2) 2 地区南壁断面(拡張前、北西から)
 (3) 2 地区溝 S D01 断面(北から)
- 図版第 4 (1) 2 地区溝 S D01 (南から)
 (2) 2 地区溝 S D01 (北から)
 (3) 2 地区溝 S D01 断面(拡張部西壁、北東から))
- 図版第 5 (1) 3 地区全景(西から)
 (2) 3 地区杭跡掘削状況(北西から)
 (3) 3 地区杭跡(北から)
- 図版第 6 (1) 調査前、右側に墓碑(南東から)
 (2) 調査前、手前に墓碑(北東から)
 (3) 南西部、溝 S D01 検出状況(北西から)
- 図版第 7 (1) 南西部、横断アゼ断面と北東部の掘削作業(南西から)
 (2) 南西部、縦断アゼ断面(西から)
 (3) 北東部、アゼ断面(南西から)
- 図版第 8 (1) 土坑 S K02(礫混入)検出状況(東から)
 (2) 土坑 S K02 完掘状況(東から)
 (3) 調査地全景、完掘状況(北東から)

4. 長岡宮跡第 473 次 (7ANBMC-10 地区)・南垣内遺跡

- 図版第 1 (1) 1 トレンチ調査前全景(東から)
(2) 1 トレンチ全体(西から)
(3) 1 トレンチ溝 S D03、土坑 S K01完掘状況(南から)
- 図版第 2 (1) 1 トレンチ溝 S D03土層堆積状況(西から)
(2) 1 トレンチ溝 S D03土器出土状況(南西から)
(3) 1 トレンチ土坑 S K01検出状況(南から)
- 図版第 3 (1) 1 トレンチ土坑 S K01石製品(題目塔、北から)
(2) 2 トレンチ調査前風景(西から)
(3) 2 トレンチ全体(東から)
- 図版第 4 (1) 2 トレンチ溝 S D07全体(東から)
(2) 2 トレンチ溝 S D07土層堆積状況(東から)
(3) 2 トレンチ井戸 S E05完掘状況(西から)
- 図版第 5 (1) 2 トレンチ井戸 S E05土層堆積状況(東から)
(2) 2 トレンチ P 3 検出状況(上が北)
(3) 2 トレンチ P 3 土層堆積状況(上が北)
- 図版第 6 (1) 出土遺物 1
(2) 出土遺物 2

5. 長岡京跡右京第 986 次 (7ANGTE-4 地区)・上里遺跡

- 図版第 1 (1) 調査前の状況(北から)
(2) 調査トレンチ全景(北から)
(3) 調査トレンチ中央部流路跡 S D02・04(北から)
- 図版第 2 (1) 流路跡 S D01(西から)
(2) 流路跡 S D01(北から)
(3) 流路跡 S D01東壁断面(西から)
- 図版第 3 (1) 流路跡 S D02(東から)
(2) 調査トレンチ北部東壁断面(南西から)
(3) 調査トレンチ南部東壁断面(西から)
- 図版第 4 (1) 調査トレンチ全景(南から)
(2) 南壁断面(北から)
(3) 出土遺物

6. 新田遺跡第7次

- 図版第1 (1) C地区調査前の状況(北東から)
(2) C地区1トレンチ全景(東から)
(3) C地区2トレンチ全景(東から)
- 図版第2 (1) C地区3トレンチ全景(西から)
(2) C地区2トレンチ南壁断面(北西から)
(3) C地区4トレンチ南壁断面(北から)
- 図版第3 (1) C地区2トレンチ西壁断面(北東から)
(2) C地区4トレンチ全景(北から)
(3) C地区4トレンチ深掘り状況(東から)
- 図版第4 (1) F地区全景(北から)
(2) F地区東壁断面(北西から)
(3) B2地区全景(北西から)
- 図版第5 (1) D地区全景(西から)
(2) D地区重機深掘り状況(北から)
(3) A地区全景(北西から)
- 図版第6 (1) A地区深掘り状況(南東から)
(2) A地区南壁断面(北東から)
(3) A地区東西調査区西半部(東から)
- 図版第7 (1) A地区東西調査区東半部(西から)
(2) 区画整理前、木桶出土状況(北から)
(3) A地区中央部断ち割り断面(南西から)
- 図版第8 (1) A地区重機断ち割り状況(南西から)
(2) G地区掘削状況(北西から)
(3) A地区作業状況(北東から)

7. 八幡木津線関係遺跡

- 図版第1 (1) 鞍岡山2号墳調査前全景(北西から)
(2) 2号墳表土除去後墳丘全景(北西から)
(3) 墳丘北斜面畦畔土層断面(北西から)
(4) 墳丘西裾周溝部畦畔土層断面(北から)
(5) 埋葬施設S X03検出状況(北東から)
(6) 埋葬施設S X03調査状況(南西から)
(7) 埋葬施設S X03木棺設置坑検出状況(南西から)
(8) 埋葬施設S X03畦畔b-b'土層断面(南西から)

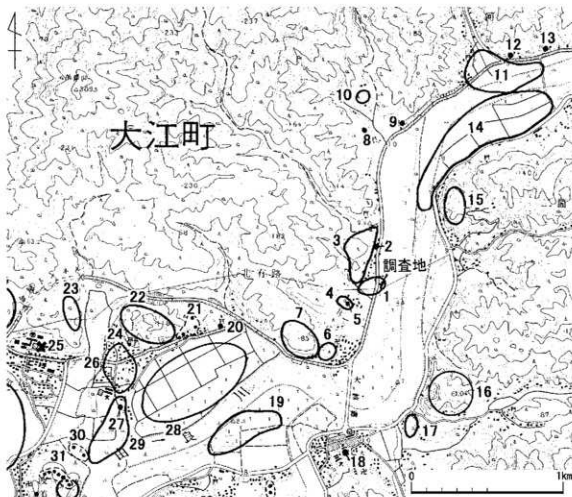
- 図版第2 (1) 鞍岡山2号墳全景(北西から)
(2) 鞍岡山2号墳全景(左上が北)
- 図版第3 鞍岡山2号墳埋葬施設S X03全景(南西から)
- 図版第4 (1) 埋葬施設S X03西棺棺外鉄製品出土状況(北西から)
(2) 埋葬施設S X03東棺棺内副葬品(四獣形鏡・玉類)出土状況(南西から)
(3) 四獣形鏡出土状況(北西から)
- 図版第5 (1) 東棺棺内玉類出土状況(北西から)
(2) 東棺棺外玉類(北群)出土状況(北から)
(3) 東棺棺外玉類(南群)出土状況(北西から)
- 図版第6 (1) 土器棺墓検出状況(北東から)
(2) 土器棺上部土器片除去後(北東から)
(3) 土墳墓S X01～02検出状況(北東から)
(4) 土墳墓S X01須恵器杯身出土状況(北西から)
(5) 土墳墓S X01～03全景(北から)
(6) 土墳墓S X01～03全景(北東から)
(7) 2号墳墳丘部土師器出土状況
(8) 2号墳墳丘部高杯出土状況
- 図版第7 埋葬施設S X03出土金属製品(槍・剣)
- 図版第8 埋葬施設S X03出土玉類および2号墳墳丘・周辺埋葬施設出土遺物
- 図版第9 (1) 片山遺跡・下馬遺跡遠望(南東から)
(2) 調査地遠景(北西から)
(3) 片山遺跡第1トレンチ全景(南東から)
(4) 片山遺跡第2トレンチ全景(北東から)
(5) 下馬遺跡第1トレンチ全景(西から)
(6) 下馬遺跡第2トレンチ全景(西から)
(7) 下馬遺跡第2トレンチ東部遺構検出状況(南東から)
(8) 下馬第3トレンチ全景(東から)
- 図版第10 (1) 第4トレンチ全景(北西から)
(2) 第5トレンチ全景(北西から)
(3) 第6トレンチ全景(北西から)
(4) 第7トレンチ全景(北西から)
(5) 第8トレンチ全景(北西から)
(6) 第9トレンチ全景(北西から)
(7) 第10トレンチ全景(西から)
(8) 第12トレンチ全景(西から)

- 図版第11 (1)第11トレンチ全景(西から)
(2)第11トレンチ溝S D28、土坑S K34(北から)
(3)第11トレンチS K34遺物出土状況(北西から)
- 図版第12 (1)第11トレンチ東部下層面(東から)
(2)第13トレンチ全景(南東から)
(3)第14トレンチ全景(北から)
(4)第15トレンチ全景(北西から)
(5)第18トレンチ全景調査状況(北東から)
(6)第18トレンチ自然流路S R16木製品出土状況(北から)
(7)第19トレンチ全景(北西から)
(8)第20トレンチ(北西から)
- 図版第13 (1)第16トレンチ全景(北西から)
(2)第16トレンチ柱穴S X57(北西から)
(3)第16トレンチ自然流路S R16遺物出土状況1(北西から)
- 図版第14 (1)第16トレンチ自然流路S R16遺物出土状況2(北西から)
(2)第17トレンチ全景(北西から)
(3)第17トレンチ柵S A58(北東から)
- 図版第15 (1)第21トレンチ全景(北西から)
(2)第21トレンチ土坑S K49(南東から)
(3)第21トレンチ柵S A18・59(南東から)
- 図版第16 出土遺物

1. 仲ノ段遺跡第2・3次発掘調査報告

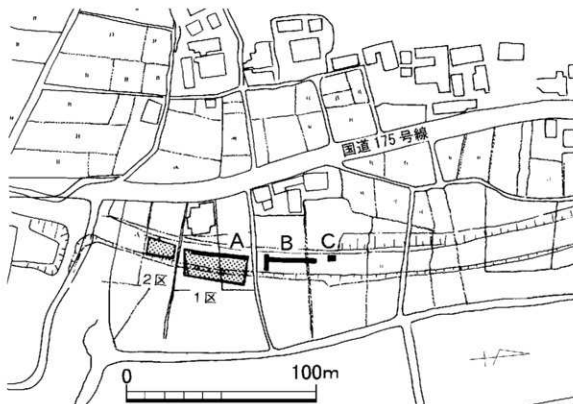
1. はじめに

仲ノ段遺跡は、京都府福知山市大江町北有路地内に所在する。由良川の左岸に位置し、由良川の流れが、南に張り出した丘陵にぶつかり、蛇行して大きく北側に進路を変える低位段丘面にある(第1図)。同遺跡は、京都府遺跡地図によると、土師器・土鍾などを出土する中世の集落遺跡とされている。



第1図 調査地および周辺の遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 河守)

- | | | | | |
|-------------|-----------|------------|-----------|---------------|
| 1. 仲ノ段遺跡 | 2. 五日市遺跡 | 3. 北有路別城跡 | 4. 大安寺遺跡 | 5. 大安寺古墓 |
| 6. 三ヶ村遺跡 | 7. 北有路城跡 | 8. 比丘尼屋敷遺跡 | 9. 赤穂谷口遺跡 | 10. 九郎屋敷遺跡 |
| 11. 三河宮の下遺跡 | 12. 三河古墳 | 13. 石プロ古墳 | 14. 二箇遺跡 | 15. 二箇村城跡 |
| 16. 南有路城跡 | 17. 引地城跡 | 18. 長橋寺遺跡 | 19. 高川原遺跡 | 20. 阿良須神社境内古墳 |
| 21. 阿良須古墳群 | 22. 阿良須城跡 | 23. 柏谷古墳群 | 24. 上野古墳 | 25. 芝居原遺跡 |
| 26. 上野遺跡 | 27. 大良古墳 | 28. 阿良須遺跡 | 29. 平道跡 | 30. 仙仲古墳群 |
| 31. 波美古墳群 | | | | |



第2図 調査区・トレンチ配置図

仲ノ段遺跡の第1次調査は、由良川の築堤工事に先立ち、京都府教育委員会によって実施された。この調査では中世の遺構・遺物が検出されている。当調査研究センターでは、京都府建設交通部が実施する歩道整備を目的とした一般国道175号交通安全施設等整備事業に伴い、同建設交通部の依頼を受けて、トレンチ調査として平成20年度に第2次調査を実施した。第2次調査の結果を受けて、遺構密度が高い地点を中心に、平成21年度に第3次調査を実施した。

第2次調査は、平成20年11月12日から同年12月19日まで実施した。現地調査は、調査第2課課長補佐兼第3係長石井清司、専門調査員黒坪一樹が担当した。調査面積は合計200㎡である。

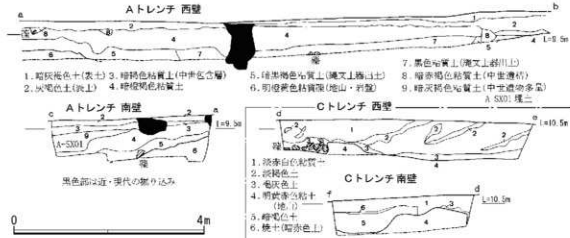
第3次調査は、平成21年6月23日～平成21年8月28日まで実施した。現地調査は、調査第2課課長補佐兼第1係長小池寛、主査調査員柴晩彦が担当した。調査面積は合計500㎡である。調査期間中は京都府教育委員会、福知山市教育委員会、地元有志の方々および調査補助員の協力を得た。記して感謝する。本報告は黒坪・柴が執筆し、文末に文責を記した。

(黒坪一樹・柴 晩彦)

2. 第2次調査

1) 調査経過

調査地は西側の丘陵から河川敷に向かう中間の低位段丘上にあっている。南北に長い調査範囲に、南からAトレンチで90㎡、Bトレンチで95㎡、Cトレンチで15㎡の3トレンチを設定した(第2・4図)。総調査面積は200㎡である。一帯の平均的な標高は10m前後を測る。

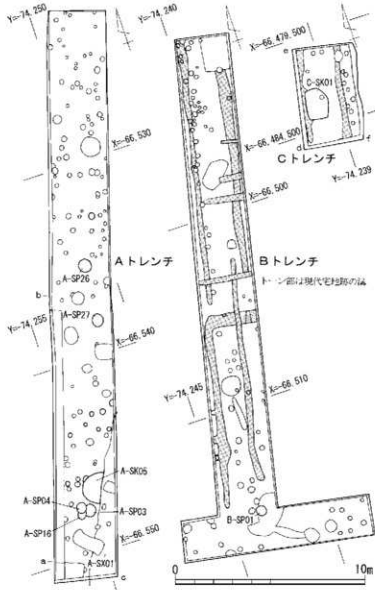


第3図 A・Cトレンチ土層実測図

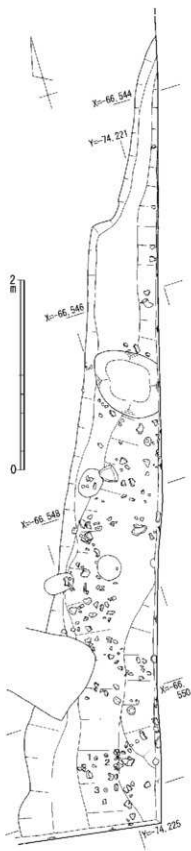
調査の結果、A地区の北半からB地区全体にかけては、厚さ10cm前後の表土直下で硬い地山面となり、検出した土坑から江戸時代の土瓶の破片が出土したが、そのほかは、現代の稲木痕が見つかったのみである。なお、中世以前の遺構面は完全に削平され、残存していなかった。C地区では、Bトレンチからの続きの溝状遺構や土坑が検出され、その上に現代の埋土・盛土である厚い粘質土(第1・4層)や褐色系の堆積土(第2・3・5層)の堆積が認められた(第3図)。

A地区の南側は南西方向に傾斜しており、そこに鎌倉時代の遺構や遺物包含層が認められた。中世の遺構には、土坑、柱穴、東の河川側に向かう落ち込み状遺構A-S X01がある。

2) 層序(第3図)



第4図 A～Cトレンチ遺構平面図



第5図 A-S X01実測図
1～3は銭貨(第7図に対応)

中世以前の包含層のあるA地区南で説明する(第3図)。1・2層は表土である。3層からは土師器などの中世の土器片や橙褐色の焼け土が包含され、北および西にいくほど薄くなる。4層上面で中世および奈良・平安時代の遺構を検出した。4層は奈良・平安時代の遺物包含層で、当期の土器が少量出土した。5層からは中世・奈良・平安時代の遺物はなく、縄文時代の土器が数点出土した。なお、西壁にある7層は、5層同様縄文土器を含んでいたため、遺構として東側の平面で精査したが、斜面に舌状に堆積した流土のまとまりと判断した。6層は明橙黄色粘質礫の地山となる。

3) 検出遺構(第4・5図)

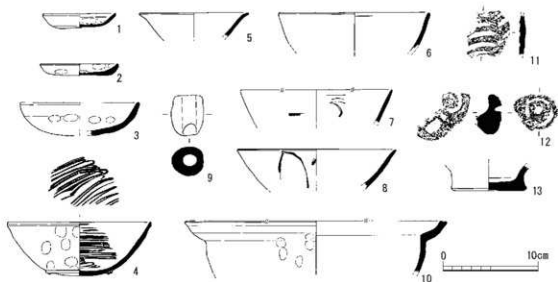
顕著な遺構・遺物が見つかったAトレンチ南半部について報告する。

中世の遺構として、鎌倉時代の落ち込み状遺構A-S X01、柱穴、土坑がある。A-S X01は調査区の南東端にかかり、長さ8.5m、幅1.5m、深さ0.4mの規模を測る(第5図)。埋土は暗灰褐色粘質土で、上層から底面にいたるまで全体的に遺物が出土した。出土遺物には、土師器皿、瓦器椀、白磁・青磁などの輸入陶磁器、須恵器甕、銭貨、土錘などがある。柱穴は土師器や石臼の断片が出土した直径20～30cmを測るA-S P16のほか、A-S P 3・4・26・27など数基検出した。

奈良・平安時代の遺構は土坑A-S K05のみで、中世のA-S X01に壊されている。須恵器杯の破片などが出土している。

4) 出土遺物(第6・7図)

第6図1～10、第7図銭貨は落ち込み状遺構A-S X01より出土した。1～3は土師器皿である。3がやや古く12世紀代、1・2は13世紀前半とみられる。4は瓦器椀である。内面には丁寧なミガキによる暗文があり、さらに外面も磨かれている。12世紀代の資料である。5は内縁に口ハゲが認められる中国製白磁皿の破片である。6～8は暗オリーブ色をした龍泉窯系の青磁椀の破片である。8は連弁文が表現されている。9は土錘である。粗い成型で大きく穿孔されている。10は瓦質の鍋である。13世紀前半のものであろう。銭貨は3点出土



第6図 出土遺物実測図

した(第7図)。左から天禧通宝(初鑄1057年)、紹聖通宝(初鑄1094年)、熙寧元宝(初鑄1068年)である。

11~13はAトレンチ西壁の第5層および第7層から出土した縄文土器である。11は幅広の沈線が施された小破片である。縄文は施されていない。12は波頂部または把手部分の破片で、刺突痕を中心に沈線が巡る。13はやや上げ底となっている底部である。時期は中期末から後期前半のものであろう。



第7図 出土銭貨 実大(番号は第5図に対応)

5)小結

Aトレンチ南半部から、鎌倉時代の落ち込み状遺構(A-SX01)、土坑、柱穴、奈良・平安時代の土坑、縄文時代の土器包含層などが確認された。縄文時代から奈良・平安時代さらに鎌倉時代における遺物が出土したことで、長い期間にわたる人々の営為の跡が考えられる。

ただ調査地点は、仲ノ段遺跡集落の中心部ではなく河川に向かってやや傾斜する外縁部である。今後の調査に注意していかなければならない。工事対象地内においては、遺構・遺物の集積がAトレンチ南半部にみられることから、Aトレンチ南半部を含めた東側と南側に発掘調査の主眼をおくべきであろう。

(黒坪一樹)

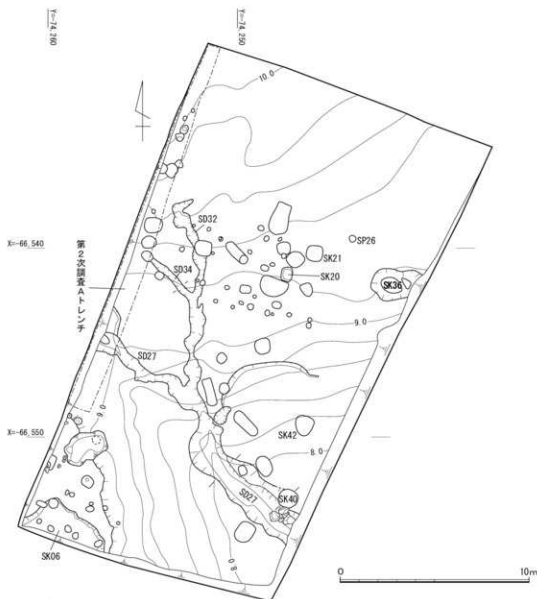
3. 第3次調査

1) 調査経過

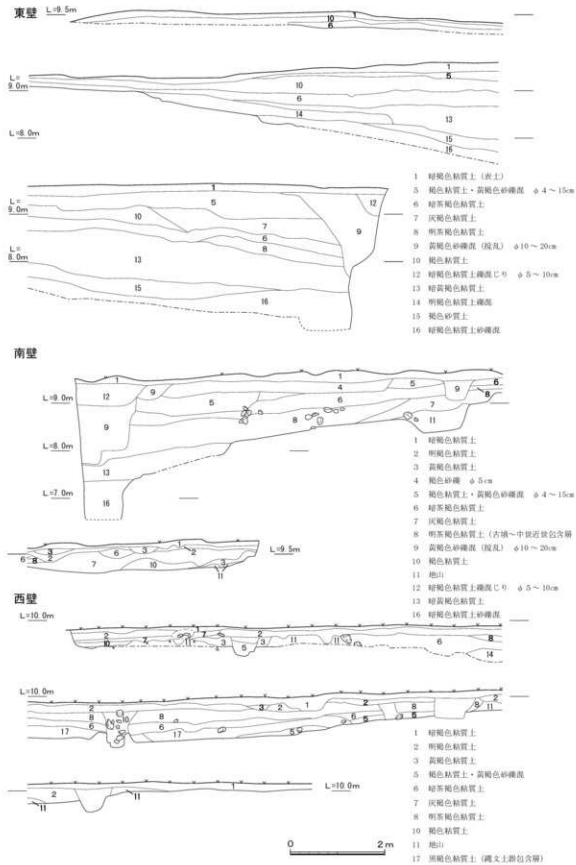
平成20年度の第2次調査のAトレンチ部分を重機により主に西に拡張し、実施した。調査地は現在の里道部分を除外し、調査区を2分して里道の北側を1区、南側を2区とした(第2図)。調査を進めたところ、Aトレンチ周辺は地表下0.2mで礫混じりの地山面に到達したが、東側の由良川寄りについては、丘陵部の張り出し部に、谷地形が埋没していることを確認した(第9図)。

2) 層序

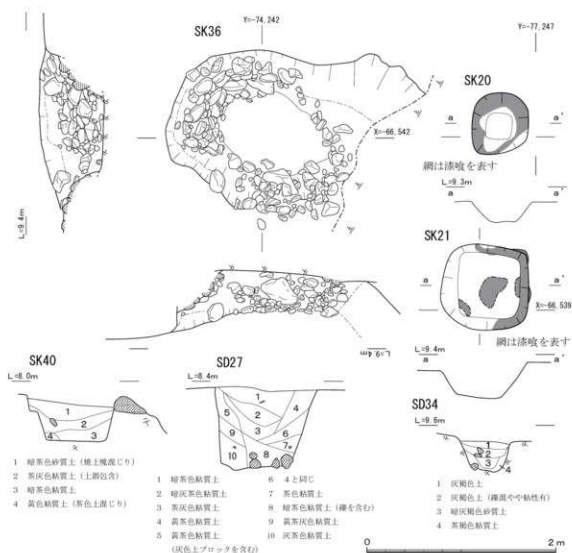
層序は、基本的に1・2区とも共通する。表土および耕作土下は地山の土を盛り土した礫混じりの黄褐色土層(第9図4層、第13図3層)が見られ、その下に暗茶褐色粘質土の遺物包含層(第



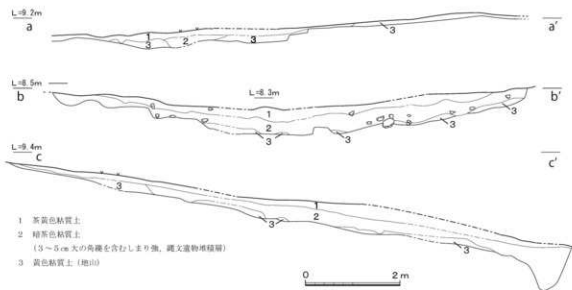
第8図 1区中近世遺構実測図



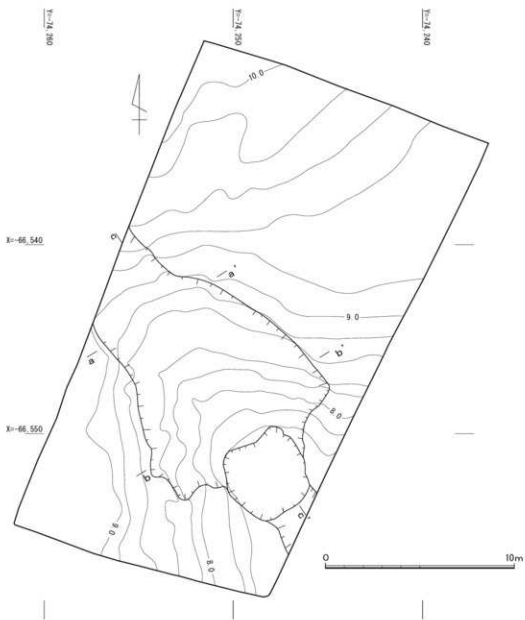
第9図 1区土層実測図



第10図 中近世遺構実測図、溝土層図



第11図 1区下層土層実測図(土層位置は第12図参照)



第12図 1区下層遺構実測図

9図7層、第13図6層)がある。2区および1区の西側(丘陵平坦部)では黄褐色の礫混じりの粘質土の地山となる部分は包含層が薄く、東側を流れる由良川に向かう傾斜に従って厚くなる。土層観察によると、調査で検出した谷地形は近世段階には埋没し、調査前の現地形でみられたような平坦面を形成していたと考えられる。

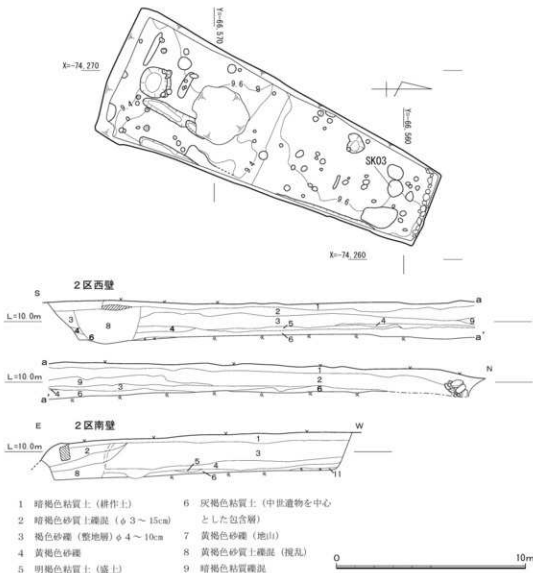
3) 検出遺構

(1) 1区

① 近世の遺構(第8図)

西側の丘陵寄りの地山面で検出した。検出した遺構はピット、土坑がある。

S K 20 土坑内を漆喰で固めた楕円形の土坑である。



第13図 2区遺構・土層実測図

SK21 平面形が方形をなしており、礫混じりの漆喰で固めていた。

SK36 土坑の壁周囲を拳大から人頭大の礫を積み上げた貯蔵穴である。東側は攪乱により、基底部の石組が残存していただけであった。石組の下部から肥前磁器の椀が出土した。

②中世の遺構(第8図)

SK06 浅い土坑で底面は平面をなす。埋土中から瓦器椀の破片が出土した。

SD27 第2次調査において落ち込み状遺構A-SX01とされており、西側の丘陵から東側の谷に向かって自然流路状に不規則に流れていた。埋土中には古墳時代~奈良・平安時代、中世の土器片とともに銭貨、焼礫、焼土、炭化物や灰が混じていた。溝の底面を抉って小礫が流れ込み、遺物の小片と混在していた。遺物は層位的に把握できるものではなく、異なった時期の遺物が混在する状況であった。下流部にあたる東側では、一抱えもある数個の角礫が流路の底部付近でみられた。SD32・34はSD27と合流するが、遺構の重複関係をみるとSD27が後から流れ込んでいた。

③縄文時代の包含層 中世の遺構面を重機により除去し、谷部斜面に堆積した黒色粘土を検出した(第11図2層)。堆積土中でもろくなった土器は、取り上げ段階で表裏面が剥落する個体が多数みられた。大半が後期のものであるが、一部前期の土器も出土した。包含層内では、土器のほか石鏃・石錘・磨石や石器の剥片などが出土した。

(2) 2区

表土および耕作土、盛土層を重機により除去した。その後人力により包含層をはずし、礫混じりの地山面で遺構精査を行い、土坑、溝、ピットを検出した。S K03は直径0.6mを測る円形の土坑で、土坑内に人頭大の礫約20石を投棄した状態であった。耕作に伴い不用な礫を集積したものと考えられる。2区で検出した遺構は、出土遺物から、近世の遺構と思われる。

4) 出土遺物

出土遺物には、縄文土器、石器、古墳時代の土器、奈良・平安時代の土器、鎌倉時代の土器、土製品、銭貨、近世陶磁器などがある。

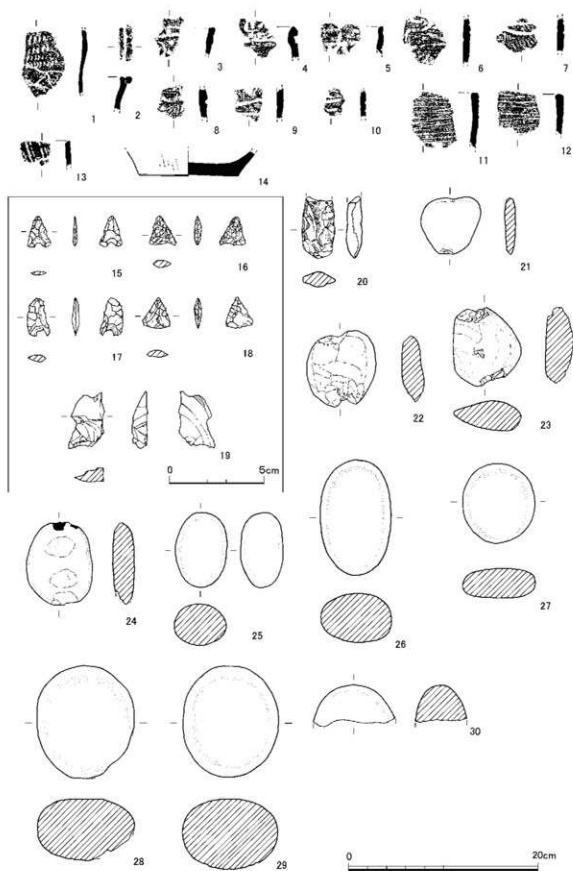
(1) 縄文土器(第14図)

縄文土器には、前期の爪形文土器、中期末の北白川C式に比定される土器、後期前半の中津式土器、条痕文土器、緑帯文土器口縁部片と平底の底部片などがある。

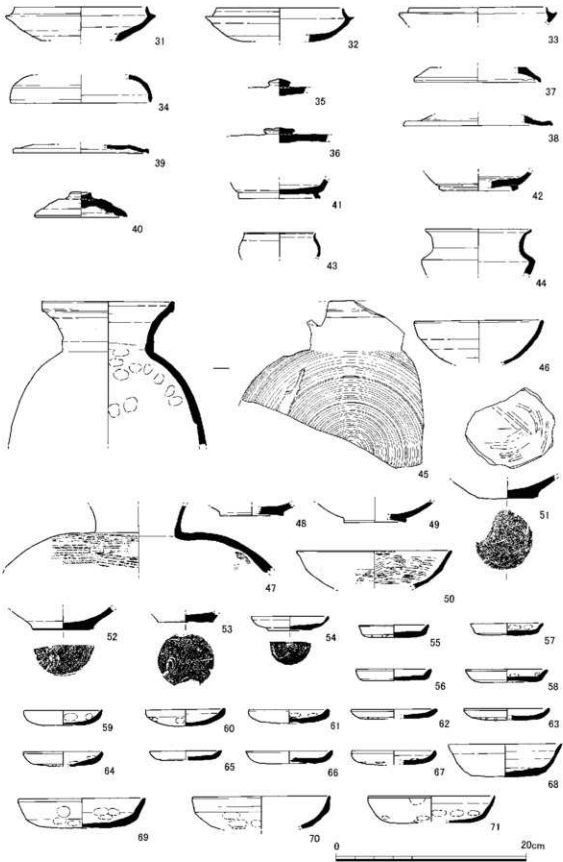
1は爪形文土器である。器壁の厚さは2mmを測る。体部外面に半截竹管状工具の先端部を押圧して「C」字状の文様を施している。2は口縁端部を肥厚させ、沈線を施す、緑帯文土器である。後期初頭のものと考えられる。4は口縁端部にへうで刻みを施し、口縁部外面に押圧を施している。5～10は磨消縄文土器の体部片である。外面にL Rの縄文を施文後、沈線を入れている。6は中津式の土器である。時期は後期前半である。11・12は条痕文土器である。いずれも口縁端部が残存し、横位の条痕の調整である。端部は内面に肥厚している。後期前半のものと考えられる。13は口縁端部が残る条痕文土器である。14は深鉢の底部である。底部は完存している。色調は内外面とも赤褐色をなし、胎土に砂粒を含んでいる。15～18は石鏃である。15～17は凹基無茎鏃である。18は平基の三角形鏃であるが、未製品の可能性もある。石材は15・17・18がサヌカイト(安山岩)、16は黒曜石である。19は黒曜石の剥片である。サヌカイトは奈良県の二上山の石材を産地とするものと、丹後半島で産出する安山岩がみられる。いずれの石材も剥片が出土しており、集落内で石器製作を行っていた可能性がある。20は打製石斧である。刃部は残存するが、先端部は折損している。21～24は礫石錘である。両端部を打欠き、紐かけ部を作出している。石材は21が砂岩、22は蛇紋岩、23・24は花崗岩質の岩石である。25～30は磨石である。いずれも表面が滑らかになっている。磨石は拳大の河川礫の平石を利用している。

(2) 古墳時代の土器(第15図)

須恵器には、古墳時代後期の杯蓋、提瓶、横瓶、壺、甕などがある。31～33は杯身である。34は杯蓋である。40は蓋で、欠損しているが、内面に返りがある。内面は回転ナデの痕跡を顕著に残す。45は提瓶である。体部上半の一部が残存する。体部には細かいカキ目が施されている。47



第14図 出土遺物実測図(1)



第15図 出土遺物実測図(2)

は横瓶片である。

(3) 奈良時代の土器(第15図)

須恵器杯、杯蓋などがある。35～39は蓋である。35は宝珠つまみ、36は扁平つまみである。41・42は杯B底部片である。43は壺C、44は壺Hである。46は椀である。

(4) 平安時代の土器(第15図)

黒色土器A類が出土している(51～53)。48・49は緑釉陶器である。糸切り痕を底部に有する椀である。釉の発色は淡緑色、黄緑色のものが見られる。48・49は底部片である。このほか、須恵器杯B・杯B蓋および内面に印刻のある土師器皿が出土しているが図示できなかった。

(5) 鎌倉時代の土器(第15～17図)

54～77は土師器皿である。54は削り出し高台底部に糸切り痕をもつ。口径8cm、器高1.5cmを測る。その他の皿は口径が8cm程度、器高1.2cm前後のもの(55～67)、口径が12～13cm前後、器高3cm前後のもの(69～77)がある。いずれも内外面に指頭圧痕が残る。

78～85は瓦器椀である。78は内面に密なヘラミガキが見られる。口径15.7cm、器高5.3cmを測る。高台は外方にやや広がり、断面方形をなす。79は口径15.7cm、器高5.3cmを測る。見込み部分にヘラミガキによる暗文が見られる。高台は断面逆三角形の貼り付け高台である。

86～91は白磁・青磁椀、青白磁皿である。86は白磁椀の口縁部片である。釉調は淡緑灰色である。87・88は白磁皿である。87は印刻による文様が見られる。器壁は0.2cmと薄い。88は見込み部分に花卉状のヘラ描き文様が見られる。89・90は青磁椀である。内面にヘラ描き文様が見られる。91は青白磁皿である。復原口径は11.7cm、器高2.2cm、器壁0.3cmを測る。底部は上げ底状に盛り上がり、見込み部分は印刻による文様が見られる。口縁端部内外面は重ね焼きによる露胎部分がある。

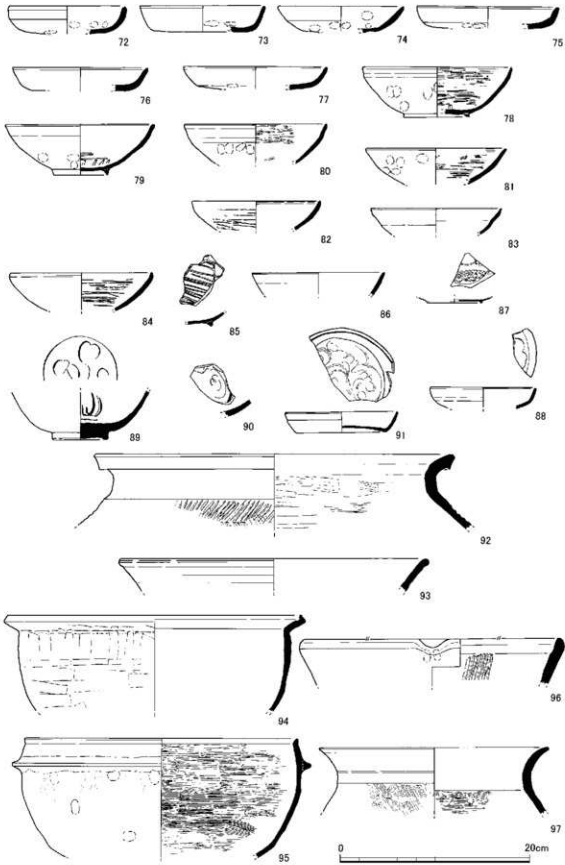
瓦質甕(92)は体部外面に綾杉状のタタキ目を施している。内面はケズリ調整である。東播磨系の土器と思われる。94は瓦質鍋で頸部で外反し、口縁端部を折り返して丸くおさめている。外面の調整は頸部直下を縦位のヘラケズリ、下半部は横位のヘラケズリである。復原口径は31cmを測る。瓦質羽釜(95)は復原口径29.7cmを測る。丸みを帯びる体部に鈎が貼り付けられている。96は瓦質すり鉢である。片口で口縁端部内面に段をもち、それ以下を櫛状工具によりすり目が施されている。土師器甕(97)は丸みを帯びながら外反する頸部に横方向の一条の沈線が巡る。体部外面の調整は斜め方向の板状工具によるハケ目、内面は横方向のハケ調整がある。

(6) その他の遺物(第17図)

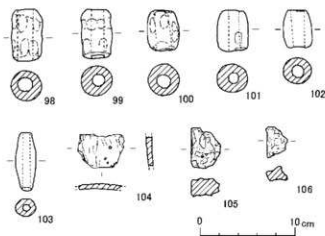
98～103は土錘である。98は長さ5.5cm、99は長さ5.2cm、孔の径1.5cmを測る。直径は98・99ともに3.3cmである。100～102は俵形に成形された土錘である。長さは4.0～4.5cm、直径は3.3cm、孔の径は1.5cmを測る。3cmを超える大型のものが多数を占める。103は長さ6.2cm、最大幅2.3cmを測る紡錘形をなす。紐通し穴は0.8cmである。

銭貨は、天禧通寶(初鑄1017年)、洪武通寶(初鑄1368年)がある。

104は不明銅製品である。断面はやや丸みをもつ。105・106は鍛冶滓である。集落内で小鍛冶



第16図 出土遺物実測図(3)



第17図 出土遺物実測図(4)

を行っていたことが推定される。

このほか、図化していないが、肥前磁器がS K36から出土した。網目文が施されている。

5) 小結

今回の調査では、集落に伴う遺構は検出できなかったが、集落内で廃棄されたと思われる遺物が谷部から出土した。集落本体は丘陵裾部の平坦面にあることは間違いない。

予想できる集落には、出土した緑軸陶器や白磁・青白磁からみて、官衛的施設の要素もみられるが、由良川に近いという遺跡の立地から、由良川の水運を利用した物資の集積地および中継地点としての機能をもった集落の可能性も考えられる。

縄文時代は、土器や石器、石器製作に伴う剥片が出土していることから、西側の丘陵から続く平坦面に集落が存在するものと思われる。集落の立地は、遺跡より1.5kmほど由良川下流の左岸に位置する三河宮の下遺跡と同様である。

(柴 晩彦)

4. まとめ

仲ノ段遺跡第2・3次調査の結果、縄文時代前期・中期・後期の土器や石器、古墳時代後期の須恵器、奈良・平安時代の須恵器、土師器、黒色土器などの遺物が出土し、中世の土坑・溝、近世の土坑などの遺構が検出された。もっとも量的に多い中世における仲ノ段遺跡の性格は、3次調査の小結でもふれたように、由良川の水運を利用した物資の集積地点であった可能性がある。今後の調査により中世をはじめとする仲ノ段集落の範囲や内実が次第に明らかとなることを期待したい。

(黒坪一樹)

調査参加者(敬称略) 調査補助員：奥田栄吉、真下春美、小島健之介
整理員：丸谷はま子

参考文献

- 八瀬正雄「I 土遺跡(第3、4次)」(『福知山市文化財調査報告書』第54集 福知山市教育委員会) 2007
八瀬正雄「I 土遺跡」(『福知山市文化財調査報告書』第56集 福知山市教育委員会) 2008

2. 天田内遺跡第2次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、主要地方道綾部大江宮津線(以下府道と呼称)の歩道設置工事に先立ち、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。改良工事に伴って調査対象となった天田内遺跡は、京都府福知山市大江町天田内に所在する。天田内遺跡の調査としては、旧大江町教育委員会による遺跡の範囲確認調査(第1次調査)^(R1)が実施され、今回が第2次調査となる。なお、今回の調査に先立って京都府教委員会が対象地内の立会調査を行っており、その際には弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺物が出土した。また、現在の府道の新設工事の際にも、多数の遺物が出土しており、今回の調査でも遺構・遺物の検出が予想された。^(R2)

発掘調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長小池寛、同課調査第3係調査員筒井崇史が担当した。調査期間は、平成21年4月21日から6月12日までである。調査面積は、当初250㎡の予定であったが、当該工事を円滑に進める必要から事業者から依頼を受け拡張を行ったため、最終的な調査面積は350㎡となった。また、発掘調査と整理作業には多くの調査補助員・整理員の参加・協力をいただいた。本報告の執筆は筒井が行った。^(R3)

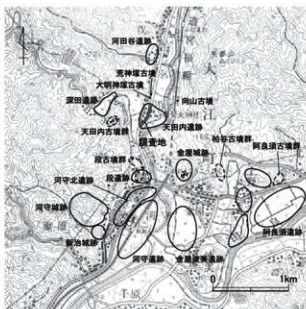
なお、本報告で用いた国土座標系は世界測地系を使用した。調査期間中は、京都府教育庁指導部文化財保護課・福知山市教育委員会などの関係諸機関からご教示・ご協力をいただいた。

今回の発掘調査にかかる経費は、全額、京都府建設交通部が負担した。

2. 遺跡の位置と歴史的環境

天田内遺跡は、由良川の支流である宮川の右岸に位置する(第1図)。由良川との合流点からは約2km上流の宮川の右岸に位置し、遺跡の東半部には元伊勢外宮として知られる豊受大神社が鎮座する船岡山がある。船岡山の標高は約42m、今回の調査地の標高がおおむね16~20mで、比高は20m以上を測る。

天田内遺跡周辺の遺跡としては、すぐ北側に荒神塚古墳や大明神塚古墳がある。また、西方には、宮川に流れ込む雲原川に面して深田遺跡や丘陵上に天田内古墳群があ



第1図 調査地位置図および周辺の遺跡分布図
(国土地理院 大江Jili 1/50,000)

る。遺跡の南約1kmには段古墳群や段遺跡がある。段遺跡では、12世紀末から13世紀にかけての鍛冶生産遺構が検出されている。調査地周辺での調査事例は少ないが、天田内遺跡については、府道建設や第1次調査に際して、弥生時代から古墳時代の遺物が出土しており、上記古墳群との関係や集落遺跡の一端を明らかにできる可能性が期待された。

3. 調査の経過

府道の改良工事は、現在の府道の歩道新設を目的としていたため、調査区の幅は、限られた幅にならざるを得なかった(第2図)。今回の調査では、調査区を大きく4地区に分けたが、宅地や畑地との関係上、小規模なトレンチを畑地ごとに設けることとなった。

発掘調査は、平成21年4月21日から2区を対象として開始した。2区の調査は、対象となる範囲が狭いので、当初から人力による調査を行った。5月8・11日には1区・3区・4区の重機による表土掘削を行い、その後、人力による調査を行った。2区を中心に多数の遺物が確認されたため、5月14日に現地協議を行い、当初排土置き場としていたか所も含めて、可能な限り調査を実施することとなった。拡張部のうち、2・3区については人力で拡張を行い、1・4区については6月1日に重機による表土掘削を行い、その後、人力による調査を行った。

調査の結果、1・4区については若干の遺物が出土したものの、大きく削平もしくは攪乱されており、顕著な遺構は検出できなかった。3区では北半部が4区と同じような状況であったが、



第2図 トレンチ配置図及び周辺地形測量図

南半部については若干の遺構と少量の遺物が出土した。2区では包含層から大量の遺物が出土したが、これらはいずれも2次堆積であった。遺構としては地山上で土坑や柱穴などを検出した。

調査にかかる作業はおおむね6月初旬には終え、1区・3区北半部については6月11日に重機による埋め戻しを行った。2区・3区南半部・4区については6月5日から12日にかけて順次人力による埋め戻しを行った。また、6月12日の調査終了後、地元向けの発掘調査説明会を天田内公民館で実施した。これらをもってすべての調査を終了し、機材を撤収した。

なお、調査期間中の6月4日には福知山市立美鈴・有仁両小学校の児童が現地見学に訪れた。

4. 調査の概要

1) 検出遺構

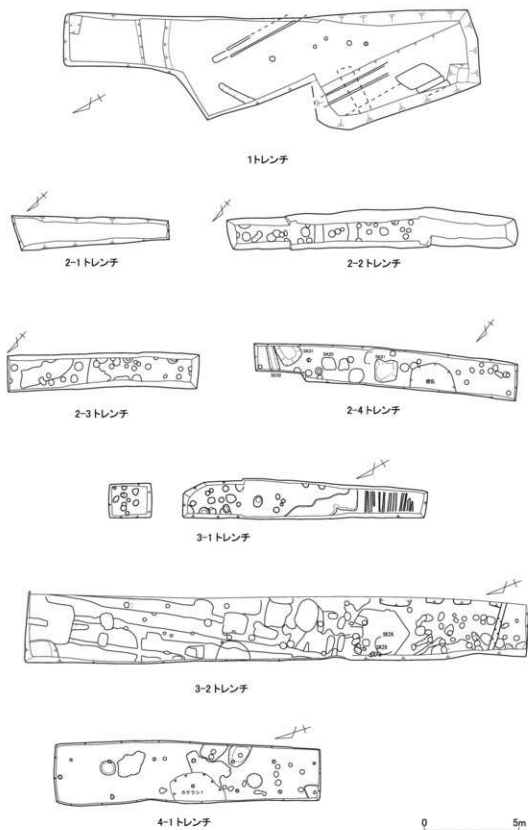
1区 長さ22m、幅3～6mの不整形な形状を呈するトレンチである(第3図)。トレンチの大半は現在の府道が新設される以前の道路や宅地等の攪乱により、顕著な遺構は検出されなかった。出土遺物としては、土師器や須恵器などの土器片がごく少量出土した。また、1区のすぐ北側に、今回の調査に先立って京都府教育委員会が実施した立会調査地がある。その調査成果の内容は、おおむね2区の調査成果と一致する。

2区 合わせて5か所のトレンチを設定した(2-1～2-5トレンチ)。このうち、2-5トレンチについては攪乱が著しく顕著な遺構・遺物は検出されなかった。しかし、2-1～2-4トレンチでは、柱穴等構を検出する(第3図)とともに、包含層から大量の遺物が出土した。このため、当初、排土置き場としていた地点についても、トレンチを拡張し、調査を進めた結果、大量の遺物が出土した。

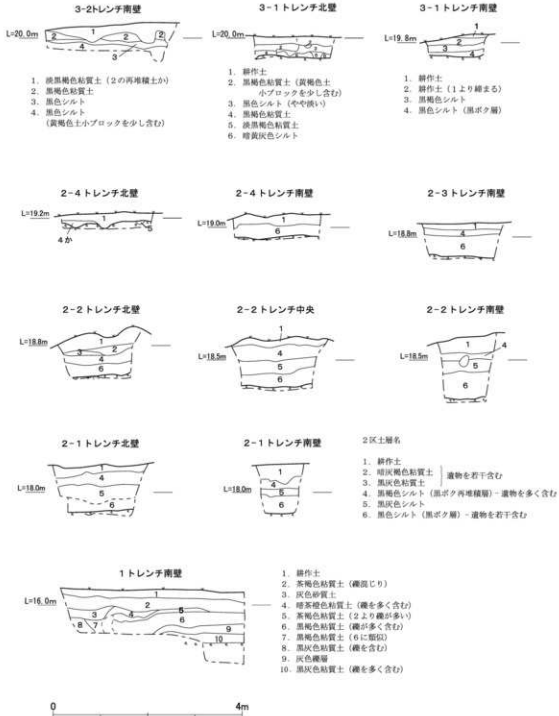
2区の基本的な層序(第4図)は、上から耕作土(1層)・黒褐色シルト(4層)・黒灰色シルト(5層)・黒色シルト(6層)・地山となる。遺物は、主に黒褐色シルト層から出土し、黒灰色シルトや黒色シルトからの出土はわずかである。黒褐色～黒色シルトは2-1トレンチ南端で厚さ約0.8mあり、北に薄く堆積していることが判明するとともに、2-4トレンチ北端では厚さは約0.15mであることが判明した。

一部の遺構は、各包含層の上面で検出できたが、大半は地山上で確認したものである。検出遺構としては、土坑や柱穴などがあるが、調査範囲が狭いため、建物に復原することはできなかった。土層の状況などから、古墳時代などに遡り得る遺構は、2-4トレンチで検出した土坑SK25・31、溝SD32などに限られる。また、多数の遺物が出土したものの、竪穴式住居跡等の居住施設を検出することはできなかった。

3区 合わせて2か所のトレンチを設定した(3-1・3-2トレンチ)。3-1トレンチから3-2トレンチの南半部にかけて2区から続く黒褐色シルト層などを確認したが、出土遺物の量は少なかった。顕著な遺構として、3-2トレンチで土坑SK28とその下層で土坑SK29を検出した。SK28からは中世の土師器皿が出土しており(第7図98・99)、その時期に位置づけられる。3-2トレンチの北半部は宅地の建設に伴い大きく削平されたようで、攪乱が著しく、顕著な遺構・



第3図 各調査トレンチ平面図



第4図 各調査トレンチ土層断面図

遺物は検出されなかった。

4区 大小合わせて4か所のトレンチを設定した(4-1～4-4トレンチ)。しかし、昭和30年代の府道建設や宅地建設などによって地山そのものが大きく削平されたような状況であることが確認でき、ごく少量の遺物を除いて顕著な遺構は検出されなかった。

2) 出土遺物

今回出土した遺物は遺構に伴うものは少なく、大部分は2区を中心に堆積した黒褐色シルト・

黒灰色シルト・黒色シルトから出土した。出土遺物は、器表面の残存状況が良好なものが多いものの、破片化したものが多く、全容を知ることができるものは少ない。今回の報告では、できるだけ器種構成や器形の違いなどを示すものを取り上げ、可能な限り図化に努めた。なお、4区出土遺物で、図示できるものはなかった。なお、出土遺物の総量は整理箱にして10箱である。

1区出土遺物は量的に非常に少なく、土師器甕・高杯の破片を図示できたに過ぎない(1・2)。

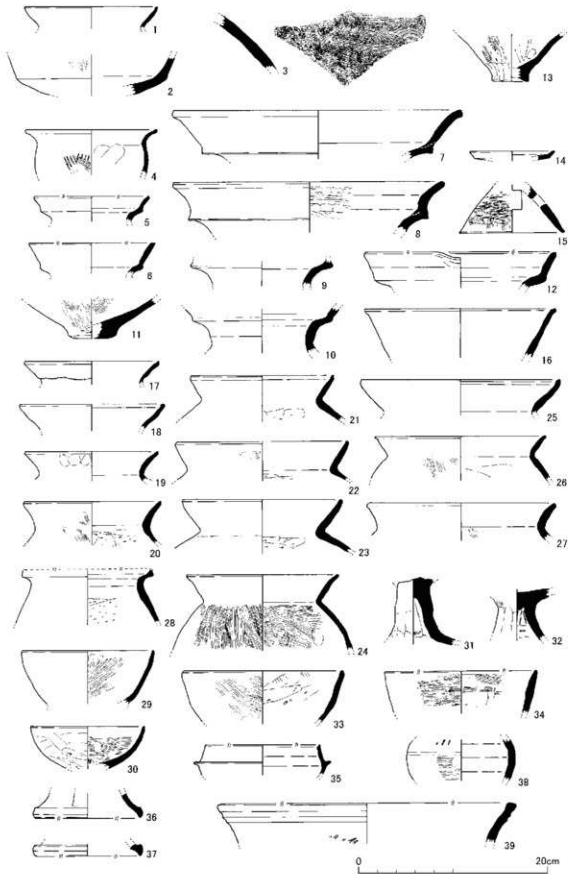
2区出土遺物としては弥生土器壺・甕、土師器壺・甕・鉢・高杯、須恵器杯・蓋・高杯など多種多様で、量的にも多い。

3～33は2-1トレンチで出土した。3・4は弥生土器である。3は大型の壺の肩部で、飾描きによる波状文と直線文を施す。4は外面にタタキ調整を有する甕である。5～32は土師器である。5～10・12は二重口縁壺で、器壁の厚さなどから大型品と小型品があると考えられる。12は口縁端部が押し凹められており、片口であった可能性がある。11は壺の底部である。16は直口壺である。14・15は小型の器台である。17～28は甕である。17・21・22は口縁端部をつまみ上げるもの、18・25は口縁端部内面が肥厚するもの、19・20・23・24・26・27は口縁端部を丸く収める個体と面をなす個体に分けることができる。28は口縁端部を欠損するが、受け口状を呈する。29・30は椀状の高杯の杯部である。31・32は高杯の脚部である。33・34は鉢である。35～39は須恵器である。35は杯である。36・37は高杯の脚部である。38は壺または甕の体部である。39は甕の口縁部である。

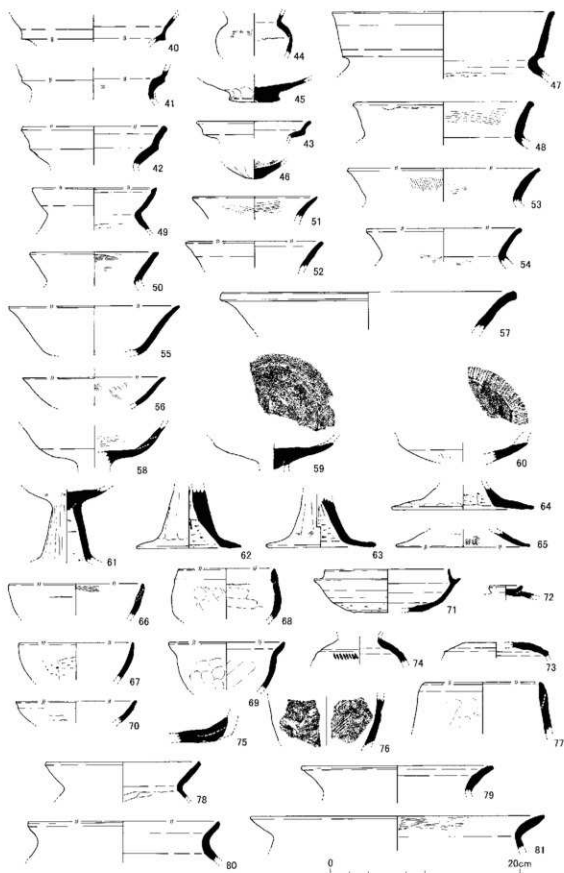
40～77は2-2トレンチで出土した。40～70は土師器である。40～43は二重口縁壺である。44は小型丸底土器である。45は壺の、46は甕の底部と考えられる。47～54は甕である。47は複合口縁を呈する山陰系の甕である。49は口縁端部内面が肥厚する布留式甕である。48・50～54は口縁端部を丸く収める、もしくは面をなすものである。55～65は高杯である。55～57は高杯杯部である。55は破片なので詳細は不明であるが、58～60は高杯杯底部である。59・60は杯底部と杯口縁部の接合面の調整痕跡が明瞭に分かる資料である。59はハケ調整で、60はヘラ状工具で刻み目を施す。61～64は高杯脚部である。いずれも裾部で屈曲して大きく開く形態を呈する。65も高杯脚部で、緩やかに「ハ」字状に開くものである。66～69は鉢であるが、66・67は椀形の高杯の杯部の可能性もある。68は内傾気味の口縁部を有する。69は弥生土器の可能性もある。70は杯であろうか。71～73は須恵器である。71は全体の形態を知ることができる杯である。72は高杯の蓋のつまみである。73は杯か高杯の蓋であろう。74は壺か甕の体部であろう。肩部に列点文と沈線を1条施す。75～77は製塩土器である。75はいわゆる「船岡式」製塩土器の底部片に類似する⁽⁸⁴⁾。

78～88は2-3トレンチで出土した。78～84は土師器である。78～82は甕である。79は内面に強くナデを施した痕跡が3条ほどみられることから、いわゆる「青野型」甕⁽⁸⁵⁾と思われる。83は大型の鉢である。84は器台の脚柱部である。85は土錘である。86～88は須恵器である。86・87は高杯や椀の口縁部の破片と考えられる。88は器台と考えられ、外面にタタキ調整の後カキメを施す。内面にはタタキ調整に伴う当て具痕が残る。

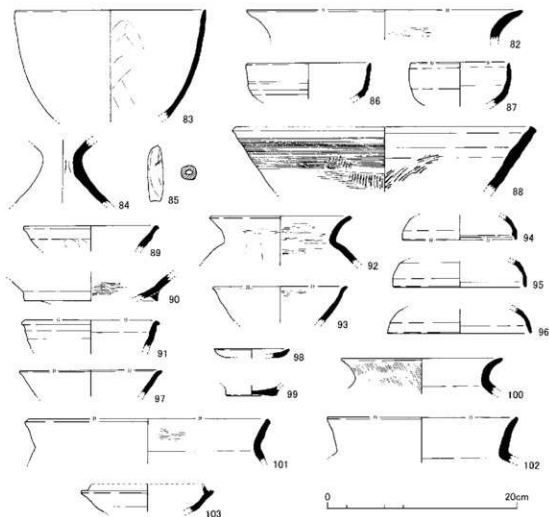
89～96は2-4トレンチで出土した。89は壺か甕と思われる。90は二重口縁壺であろうか。91



第5図 出土遺物実測図(1)



第6図 出土遺物実測図(2)



第7図 出土遺物実測図(3)

は鉢である。92は甕である。93は高杯の杯部あるいは高杯の杯部である。94～96は須恵器蓋である。

3区出土遺物には土師器壺・甕・高杯、須恵器杯・蓋などがあるが、2区にくらべ、量的に少ない。

97は3-1トレンチで出土した須恵器である。高杯の口縁であろうか。98～103は3-2トレンチで出土した。98～102は土師器である。98・99は土坑SK28から出土した。98は土師器皿である。99は碗もしくは杯の底部で、外面に糸切り痕が残る。100～102は甕である。103は須恵器杯である。上述の71よりも形式的に後出する資料である。

5. まとめ

調査範囲が限られていたため、顕著な遺構は検出されなかったが、2区を中心に多数の遺物が出土した。これらの遺物は上述のように弥生時代後期から古墳時代後期にかけてのものであり、昭和30年代に現府道が新設された際にも多くの遺物が出土したといわれており、今回の調査地周

辺に当該期の集落が広がっていると考えられた。ただ、今回の調査では竪穴式住居跡等の遺構を検出することはできなかったため、今後の周辺の調査に期待される。

(筒井崇史)

- 注1 松本学博「天田内遺跡発掘調査概要」(『大江町文化財調査報告書』第9集 大江町教育委員会) 2001
- 注2 村上政市ほか「大江町の古代遺跡」(『高川原遺跡発掘調査報告書』(『大江町文化財調査報告』第1集 大江町教育委員会) 1975)
- 注3 調査補助員：真下晴美・奥田栄吉・小島健之介
整理員：川村真由美・清水友佳子・村岡弥生・羽根舞
- 注4 石部正志編「若狭大飯～福井県大飯郡大飯町考古学調査報告～」福井県大飯町 1966
森浩一・石部正志他「福井県田島湾における誇大漁業遺跡調査報告」(『稚鮎・近江・讃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』同志社大学文学部文化学科) 1971
田代弘・筒井崇史ほか「浦入遺跡群 京都府遺跡調査報告書」第29冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001
- 注5 石崎善久「『青野型甕』について」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注6 注2文献と同じの器種構成を考えたい。

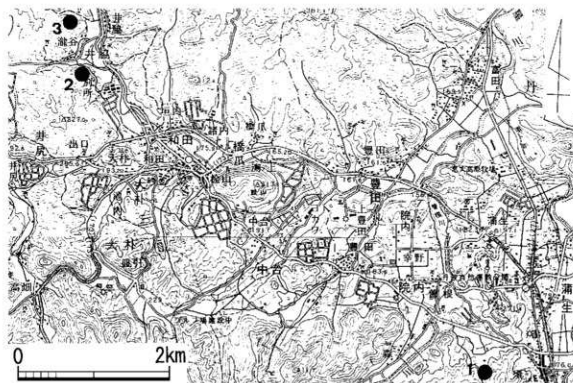
3. 丹波綾部道路関係遺跡発掘調査報告

はじめに

本書は国土交通省近畿地方整備局の委託により、同局が計画・建設する一般国道478号京都縦貫自動車道(丹波綾部道路)の建設工事に先立ち実施した発掘調査の報告である。平成21年度に調査着手した遺跡は、深志野古墳群(京都府船井郡京丹波町曾根)、丁谷古墓(同井脇)、および井脇城跡(同井脇)の3遺跡である(第1図)。このうち井脇城跡は来年度も引き続き調査を実施する予定であるので、来年度調査分とあわせて報告する。今回は調査を終了している深志野古墳群と丁谷古墓について報告する。

現地の調査期間および面積は、深志野古墳群が平成21年5月8日から同年7月6日で500㎡、丁谷古墓が平成21年8月3日から同年9月18日で200㎡である。

調査担当は、調査第2課課長補佐兼調査第1係長小池寛、同専門調査員黒坪一樹、第3係専門調査員石尾政信が担当した。調査にあたっては、京丹波町教育委員会・京都府教育委員会にご協力を得たほか、地元の方をはじめ多くの方々に作業員および調査補助員・整理員として調査に参加していただいた。^(R1)心より御礼申し上げたい。



第1図 調査地位置図(国土地理院 1/50,000 綾部・園部)

1. 深志野古墳群 2. 丁谷古墓 3. 井脇城跡

(1) 深志野古墳群

1. 遺跡の現況

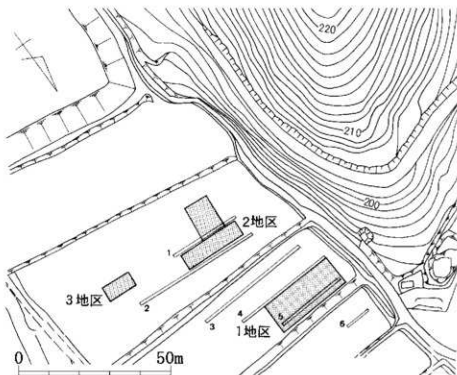
深志野古墳群は、府指定文化財巫女形埴輪が出土したことで著名な塩谷古墳群の南東部に展開する古墳群である。付近には塩谷古墳群のほか、深志野古墳群と同様の横穴式石室墳が点在する宮の浦古墳群などの古墳がある。昭和44年に深志野古墳群は、宮の浦古墳群とともに古墳の残存状況などが踏査され、合計8基の横穴式石室の存在が明らかにされた。当時すでに古墳石材の露出もみられ、墳丘を含めた残存状況はかなりよくない状況であった。その後、耕地整理などで墳丘や横穴式石室の石材は消失してしまった。調査時には、扇状地性の緩斜面に水田・畑・栗林が広がり、昭和40年代に記録された古墳石材の点在した場所は明らかではなかった。



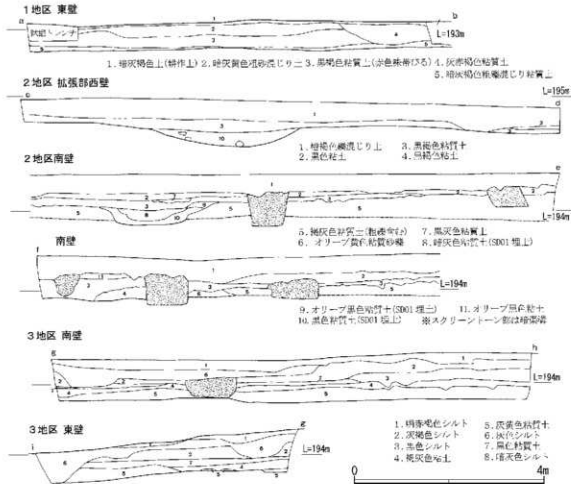
第2図 調査地位位置図(国土地理院1/25,000 図部)
1. 深志野古墳群 2. 塩谷古墳群 3. 宮の浦古墳群

2. 調査経過

京都府教育委員会による古墳の範囲確認調査が、合計6本のトレンチ掘削により実施され、暗黒褐色粘質土の溝状の広がり複数確認された。その結果を受けて当センターでは、遺構の存在が想定されるそれらの地点を中心に、合計3つの調査区を設定し、重機に



第3図 調査地区配置図



第4図 1～3地区土層断面図

よる掘削と作業員による人力掘削を行った。調査区および掘削面積は、北から1地区が250㎡、2地区が200㎡、3地区が50㎡の合計500㎡である。1地区から順に精査を重ねた結果、1地区では北東部を除いては耕地整理による掘削により古い遺構面はまったく確認できなかった。出土遺物には、当地が削平されたり付近から流入したことによる遺物がわずかに出土した。

2地区では時期不明の多くの小杭跡や、鎌倉時代の土坑SK02が見つかった。さらに鎌倉時代から縄文時代の土器包含層や、その下層で溝SD01を確認した。このSD01の性格をはっきりさせるため、南側を100m拡張した。

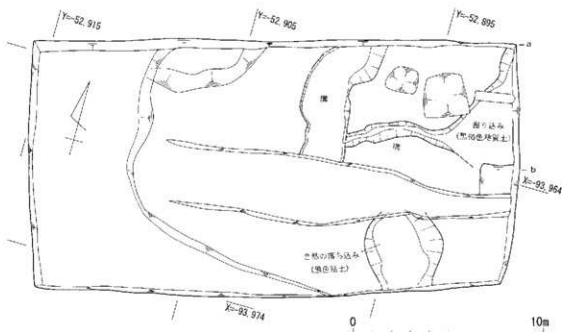
3地区では、耕作土の良好な水平堆積が認められた。南西端の中間層で、2地区と同様の小さな杭跡が3基見つかった。杭跡内やこの面からの出土遺物はなく、時期は不明である。

これら3地区の測量や土層・遺構の実測作業および写真撮影を行い、関係機関に状況説明を行った後、すべての地区を埋め戻して現地作業を終了した。

3. 1地区の遺構と遺物

1) 検出遺構

1地区は深志野古墳群の最南に位置する古墳がかかる可能性もあったが、重機掘削の結果、北



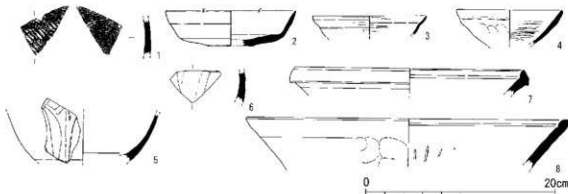
第5図 1地区平面図

東隅部を除き近年の耕地整理に伴う掘削が段丘礫面を削り込み、古い遺構の存在は皆無であった。北東隅部で黒色粘土層の掘り込みを検出した(第5図)。この掘り込みの埋土を東壁の断面で見ると、表土である暗灰褐色土(1層)以下、暗灰黄色粗砂混じり土(2層)、黒褐色粘質土(3層)、暗灰褐色粗礫混じり粘質土(5層)の順に堆積していた(第4図)。3層が掘り込みの埋め土である。出土遺物はないが、北東側の古墳の築造にともなう地形改変の可能性もある。5層は粗い礫を多量に含む粘質土の地山層である。

2) 出土遺物

出土した土器は第6図に示した。

1は須恵器甕の体部片である。表面はタタキ目、裏面は調整をナデ消しているのが観察される。古墳時代のものであろう。2は焼成が甘く灰白色を呈する平安時代(9世紀)の須恵器杯である。底部はヘラ切り未整形である。3・4は瓦器椀片である。4は口縁部の内面を強い横ナデにより



第6図 1地区出土遺物実測図

整形している。外面は横ナデと指押さえ痕がみられる。3・4とも鎌倉時代に入る13世紀代の資料である。

5・6は龍泉窯系の青磁碗の破片で連弁文が表現されている。いずれも色調は灰緑色で、連弁部分は緑色である。7は東播系の須恵器鉢の口縁部片である。13世紀代である。8は丹波焼播鉢である。明橙褐色で内面の播り面には1本引きの沈線が施されている。16世紀後半の資料である。

4.2地区の遺構と遺物

1) 検出遺構

検出された遺構には溝S D01と土坑S K02がある(第7図)。

溝S D01は鎌倉時代以前に谷筋を流れていた自然流路とみられる。拡張部分では、現在の谷に流れている西側の小河川の方に向かう。中間部でやや蛇行する。検出された長さは20m、幅は広いところで2.5m、狭い部分で2.0m、深さは0.3~0.4mを測る。

溝内から出土遺物はなく、掘削時期の特定はできない。ただ、この溝を覆う第3層から縄文時代から鎌倉時代にかけての土器が出土したことから、鎌倉時代以前の溝といえる。

土坑S K02は、いびつな円形で長軸2.2m、短軸1.5m、深さ15cmを測る。黒色粘質土を埋土とし、

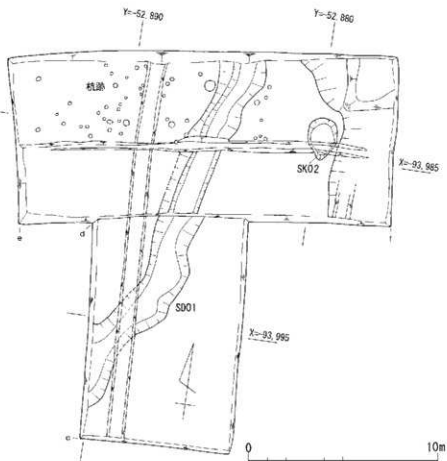
土坑中から平安時代の須恵器杯・碗の小断片が1点ずつ出土した。

2) 出土遺物

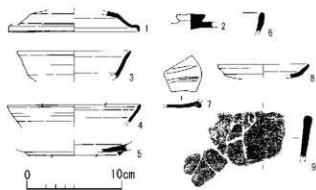
土坑S K02および第3層から土器が出土している(第8図)。

土坑S K02から出土したのは須恵器杯(3)と須恵器碗(4)である。いずれも平安時代にはいる9世紀の資料である。

黒色粘質土である第3層から出土したもの(第8図1・2・5~9)



第7図 2地区平面図



第8図 2地区出土遺物実測図

には、縄文時代から奈良・平安時代さらに鎌倉時代までの土器がある。1・2は須恵器蓋の断片である。やや高さのある1は9世紀、扁平な形態のつまみ部である。2は8世紀末に入るものである。5は須恵器杯Bの底部片で9世紀代のものである。6・7は瓦器碗の破片で、7は内外銀黒灰色を呈する底部で、見込み部に暗文が明瞭にみられる。ともに13世紀に入

るものである。8は銀黒色を呈する瓦器皿で復原口縁部径は9.5cm、器高1.5cmを測る。12世紀末から13世紀はじめのものである。9は縄文土器の深鉢形土器である。1～1.5mmの砂粒を多く含む淡茶褐色の表面に、条痕が施されている。縄文時代後期～晩期にはいるものであろう。

5. 3地区の遺構と遺物

1) 検出遺構(第9図)

時期不明の小さな杭跡が3基検出されただけである。直径は0.1～0.15mの小さなもので、黒褐色粘質土の埋土をもつ。

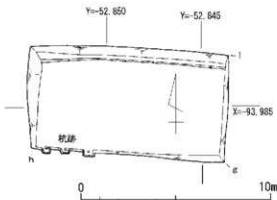
2) 出土遺物

掘削排土から採集した瓦器碗の小破片1点のみである。13世紀代である。

6. 小結

深志野古墳群は、合計8基の横穴式石室で構成される古墳群である。今回の調査地は深志野古墳群の最南端にあって、古墳の主体部や周壕などの遺構が検出できる可能性があった。しかし、3か所の調査区のいずれからも、古墳の形跡とみられる遺構・遺物は検出されなかった。

今回の成果は、2地区において中世以前の溝S D01と平安時代の土坑S K02、さらに包含層中から縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器などの土器の出土をみたことであろう。洪水などの影響を受け、自然流路を介してこうした遺物が周辺地からもたらされたと思われる。土器の表面はそれほど磨滅していないものが多く、当調査地周辺の谷部や丘陵裾部には長い期間にわたる集落や墓域が存在している可能性もある。今後とも周辺の調査に注意していかなければならない。



第9図 3地区平面図

(黒坪一樹)

(2) 丁谷古墳

1. はじめに

調査地は国道27号線と国道173号線が交差する船井郡京丹波町和田の交差点から国道173号線を右折して北へ約1km北上した高谷川右岸に所在し、北東方向に延びる丘陵斜面に位置している。

現地調査は平成21年8月3日から9月18日を要し、調査面積は200㎡である。調査担当は調査第2課課長補佐兼調査第1係長小池寛、同専門調査員黒坪一樹、第3係専門調査員石尾政信が担当した。

2. 調査の概要

調査対象地は、北東方向に延びる丘陵斜面の小さな尾根筋の先端付近にあり、直径約70m、比高差約0.8mの円墳状を呈する。この部分が古墳とされている。その南西部に比高差約1.0m、幅約10mの方墳状の高まりが見られ、北東部の古墳との間に堀切状の窪みが見られる。古墳の頂点付近に方形の台石の上に高さ45cm、幅19.2cm、厚さ12cmを測る石碑が置かれていた。石碑の正面に「空田主妙靈禪尼之靈」、左側面に「元禄十六年四月廿一日 滝谷□百」、右側面に「施主 西村亦治 松村善藏」とある。また、調査地北西側の樹木の間には畝と推定される凹凸があり、かつて畑地とされていた様相が観察できた。南西部には狭い平坦地が2段あり、開削の痕跡を確認できる。

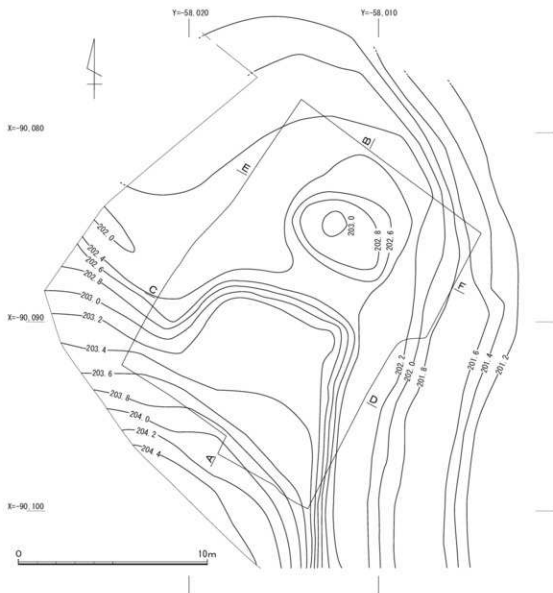
現地調査は、古墳とその南西の方形状の高まりを対象に行った。まず、樹木伐採の後に地形測量を行った。その後、丘陵の傾斜に沿って南西から北東に縦断する土層観察用のアゼと、これに直交する横断アゼを設定した後、南西部から人力による掘削作業を行った。西南部は第13図のように第1層淡褐色腐植土、第2層淡黒褐色土、第3層黒色土、第5層淡黄褐色土、第6層黄褐色土と堆積し、地山が黄色土となる。中央付近で第3



第10図 調査地位置図および周辺遺跡分布図

(京都府遺跡地図より転載)

- | | | |
|----------|----------|-----------|
| 3. 丁谷古墳 | 2. 別所古墳群 | 9. コハケ谷古墳 |
| 17. 井尻城跡 | 18. 和田城跡 | 19. 井脇城跡 |



第11図 調査地地形測量図

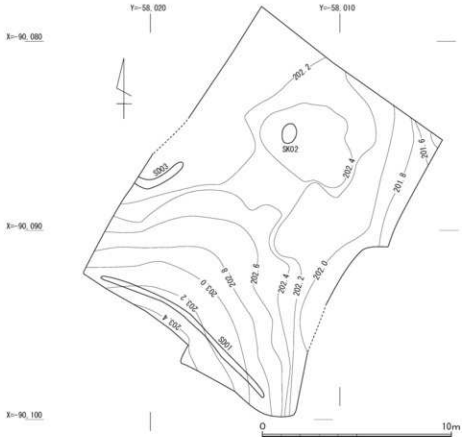
層黒色土に埋まるように直径0.2~0.4mの礫が確認できたが、並んだ様子でなく地山面から浮いているので、周辺の礫を集めたものと判断した。遺跡に関連する遺物は出土していない。

古墓は第1層淡褐色腐植土と第2層淡黒褐色土の下が地山面である黄色土となる。頂上付近で第2層に礫が確認できた。礫は地山面から浮いたものと地山面に置かれたものがある。ここでも遺物は出土していない。地山面に礫が埋まった土坑を検出した。

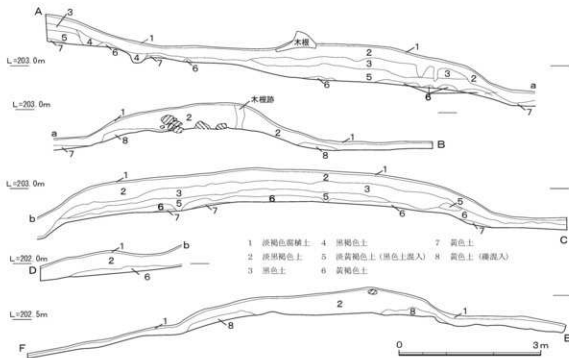
3. 検出遺構

検出した遺構には、南西部で検出した素掘り溝 S D01と、西部で検出した畝溝と推定される浅い溝 S D03、北東部の石碑が据えられていた位置の下層で検出した土坑 S K02がある。以下に、検出した遺構について記述する。

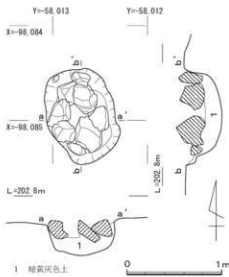
溝 S D01 調査地の南西部で検出した、幅約0.4m、深さ0.2m前後を測る素掘り溝である。長



第12図 調査地平面図



第13図 土層断面図



第14図 土坑 S K 02実測図

さ約10.5mを検出した。丘陵の尾根筋と直交する様に設定されていた。溝の埋土は黒褐色土で上層の黒色土が落ち込んだものと思われる。埋土からは少量の石が出土したのみである。周辺に類似した溝がないので、樹木や竹の根が進入するのを防ぐ目的かと思われる。

土坑 S K 02 東部の石碑が設置されていた場所の下層で検出した。長径約1.0m、短径約0.7m、深さ約0.4mを測る隅丸方形の土坑である。土坑内には長さ0.2～0.3m、厚さ0.1～0.2mの石が土坑の底部から約0.2m浮いた状態で秩序なく置かれていた。出土遺物はなかった。

溝 S D 03 トレンチ西部で検出した幅約0.4m、深さ5cmを測る溝である。遺物は出土していない。調査地外の現地表面に、畝溝状の凹凸が見られるので、この溝もそれらと同じく、畝溝の可能性はある。

4. 小結

今回の調査で、北東部の石碑が置かれていた地点では、頂上付近で礫が詰まった隅丸方形を呈する土坑 S K 02を検出したが、置かれていた礫に規則性がなく、出土遺物がないので墓穴とするには根拠が乏しい。

南西部の方墳状地形では、第3層に埋まるように礫が検出されたが、地山面から浮いた状態で据え付けられたものではなく周辺から集めたもので、調査地周辺の地形改変に伴い集積されたものと思われる。

(石尾政信)

まとめ

今回の2か所の遺跡の発掘調査で、まず深志野古墳群からは古墳の形跡はなかったが、縄文時代から中世にいたる遺構・遺物が見つかり、周辺に幅広い年代の集落や古墳の存在が予想された。

丁谷古墓では、今回の発掘調査により、古墓である確証は得られなかった。

(黒坪一樹)

注1 調査補助員：松井大祐、岡本秀平、小島健之助

整理員：茶園矢壽子、長尾美恵子

注2 地元の方のお話によると、今回調査した丁谷古墓のような石碑が、この周辺に3か所所在しており、丁谷古墓では、「旅の途中に行き倒れた人を葬ったものである」との伝承が残っているとのことである。

4.長岡宮跡第473次(7ANBMC-10地区)

・南垣内遺跡発掘調査報告

1. はじめに

この調査は、府道上久世石見上里線道路緊急安全確保小規模改良業務に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。現地調査は、物集女街道沿いで、長岡宮の区画溝の検出を想定して設定した第1トレンチ(12m)、石見上里線に平行して設定した第2トレンチ(48m)の合計60mを行った。現地調査期間は、平成21年7月7日から平成21年7月28日である。

調査地は、向日市寺戸町南垣内56-1ほかに所在し、向日丘陵の東側斜面、標高24m前後の低位段丘にむけて発達する扇状地の扇頂部付近に立地する。

調査範囲は、長岡京の条坊推定復原によると、長岡宮の北側の北辺官街域の北部にあたり、西一坊坊間大路の西側溝の延長部にあたる地点である。調査地の西方の北一条大路・西一坊大路角には、方四町あるいは六町とも推定されている宝菩提院廃寺があり、調査地は寺域内に含まれる可能性もある。また、物集女街道沿いに栄えた中世集落南垣内遺跡に含まれている。現地調査は、当調査研究センター調査第2課主幹調査第3係長事務取扱石井清司、同専門調査員竹井治雄が担当した。なお、調査に係る経費は全額、京都府建設交通部が負担した。国土座標は日本測地系第VI座標系を用いている。本報告は竹井が執筆した。

2. 周辺地域でのこれまでの調査(第2図)

当該地は長岡宮の北辺官街域の北部に位置する。周辺の発掘調査例では、調査地の南約50mの宮内第106次調査で、鎌倉時代後半から室町時代の建物跡・土坑を検出している。東約10mの長岡宮跡第126次調査では、幅1.2~1.5m、深さ0.1~0.2m、検出全長6m以上の平安時代前期の東西溝を検出している。調査地の北側、府道石見上里線を挟んで北10mに位置する宮内第319次調査では、鎌倉時代の掘立柱建物跡・柵を含むピット群や井戸などを検出している。調査地の南側の宮内第358次調査では、長岡京期・平安時代前期の遺構・遺物の検



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 京都西南部)



第2図 調査地位置図および周辺調査地

出はなかったが、中世から近世にかけてのピット群、近世溝などを検出している。

3. 調査概要

1) 検出遺構

これまでの周辺地域での調査例から、長岡京期・平安時代前期、中世以降の建物群を想定して発掘調査を実施した。調査は、物集女街道と府道石見上里線との交差点に近い部分に、南北2m、東西6mの1トレンチ、石見上里線に沿いに南北2m、東西24mの2トレンチを設定した。調査にあたっては、周辺の調査事例から、長岡京期・平安時代前期、中世以降の建物群を想定して慎重に進めた。

① 1トレンチ(第3図)

古墳時代後期の東西方向溝SD03、中世の円形の土坑SK01、近世以降の井戸跡を検出した。

土坑SK01 直径1.2m、深さ0.8mを測り、平面は円形、断面は逆台形を呈する。上層では灰褐色粘砂質土、粘質土、下層では暗灰褐色粘性土、青灰色粘質土が堆積する。遺物は大半が上層からのもので、中世の土師器、瓦器、白磁のほか、石塔の上部が出土した。これには、「南無妙」の文字が刻まれていた。下層からは瓦器椀、曲物の破片が僅かに出土した。

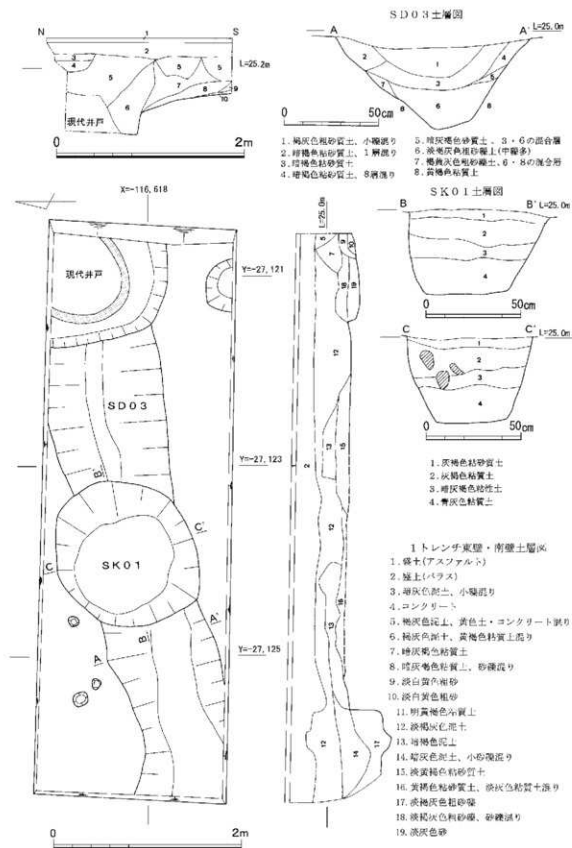
溝SD03 北に対して西に約8°振れ、東西方向に蛇行する。溝幅1.2m、深さ0.5mを測り、断面は「V」字状を呈する。上層では主に暗褐色粘砂質土、下層では褐灰色粗砂礫、砂質土の互層が堆積する。下層の状況は、流水による自然堆積と思われる。上層から、古墳時代の土師器高杯、須恵器高杯等が出土した。

② 2トレンチ(第4図)

1トレンチの西側はブロック塀などが増設されており、2トレンチは1トレンチから約4m離れた位置にある。この東西のトレンチからは溝状遺構SD07、SD07を切る土坑SK09、井戸SE05、土坑SK06と柱穴数か所を検出したが、東端は現在の攪乱によって大きく削平されていた。

井戸SE05 直径3m以上、深さ1.2mを測り、平面は円形、断面は漏斗状を呈する。上層では漆喰が混在する灰褐色泥砂、中層は泥土が厚く堆積する。底面付近では暗青灰色粘質土が堆積する。土師器、瓦器、磁器(染付け)が出土した。近世以降の井戸跡と思われる。

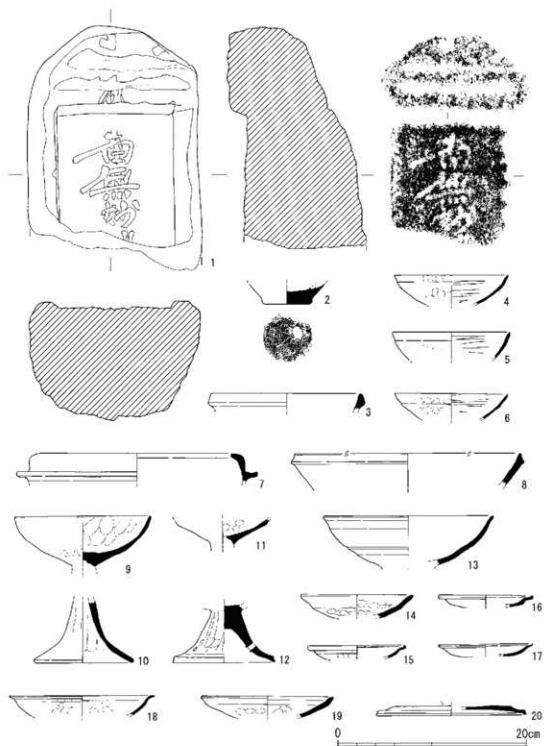
溝SD07 北に対して東に約5°振れる東西方向の溝である。溝幅は北側がトレンチ外であるため不明であるが、断面の「U」字形を呈し、幅0.5m以上、深さ0.4mと推定する。平安時代の土師器、須恵器、古瓦、磚等が出土した。



第3図 1トレンチ検出遺構配置図

土坑S K09 S D07を切り込んで検出した円形土坑である。断面は椀状を呈し、堆積土は、灰褐色を呈する泥土・砂泥・粘質土の互層である。S D07の堆積土に類似する。出土遺物は、須恵器、土師器、古瓦等がある。

土坑S K06 直径22m、残存する深さ0.2mを測り、平面円形、断面は筒状を呈する。底面、側面には厚さ5～7cmの漆喰が残る。近世の「野壺」であると思われる。



第5図 出土遺物実測図

柱穴群 トレンチ西側寄りで検出した柱穴は、平面形は円形を呈し、直径0.3～0.4m、深さ0.1mを測る。土師器の細片が出土したが、時期は、中世に属するものと思われる。

2) 出土遺物(第5図)

土坑SK01(1～8) 1は下半部欠損のため全容が不明であるが、石塔であると思われる。花崗岩製で、幅18.0cm、厚さ18.0cmを測る。上部は家形を呈し、下部の中央部に「南無妙□□」が刻されている。2は須恵質の陶器底部である。底部外面に糸きり痕がある。3は口径16cmを測る玉縁状口縁部を持つ白磁碗である。4～6は口径12cm前後を測る瓦器碗である。内面は粗い暗文(磨き)が施され、外面は指押さえの後、ナデによる調整がみられる。7は口径22.0cmを測る瓦質羽釜である。鐔はほぼ水平に取り付く。外面の全面に煤が付着する。8は口径およそ25cmを測る須恵器鉢で、体部から口縁部まで直線的に斜め上方へ立ち上がり、端部を断面三角形におさめる。SK01から出土した土器類の時期は、概ね14世紀前半代である。

溝SD03(9～12) 9は口径14.2cm、器高5.3cmを測る土師器高杯である。杯部は碗形を呈し、端部を丸くおさめる。内外面とも指押さえ後ナデを施す。10は底径10.2cm、脚高6.6cmを測る土師器高杯の脚部で、裾開きのものである。内面は縦方向のナデ、外面は縦方向のヘラによるナデ磨きが施される。9との接点は見出せないが、胎土、色調等が似ていることから同一個体と思われる。11は土師器高杯である。12は須恵器高杯の脚部である。底径10.6cm、脚高6.1cmを測る。脚部に等間隔に円形の孔が3個穿れる。9～12の時期は5世紀後半代である。

土坑SK09 13は口径18.0cm、器高5.3cmを測る須恵器碗である。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。時期は10世紀後半代である。このほか、土師器皿がある。

溝SD07(14～20) 14～19は土師器皿である。14・18・19は口径12～14cm前後、器高2.5cm、器壁の厚さ3～4mmを測る土師器皿である。口縁部は外反気味に斜め上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。内外面ともナデ調整で口縁部を除く内外面には指押さえの痕跡が多く残る。15～17は土師器皿で、口径10cm前後、器高1.2～1.5cmを測る。口縁端部を内側に巻き込んだ、所謂「て」字口縁と呼ばれる器壁が薄いのを特徴とする皿である。20は須恵器杯蓋で、口径16.0cm、器高1.2cmを測る。天井部は平坦で宝珠ツマミが取り付くものと思われる。SD07の時期は、概ね10世紀第4四半期～11世紀第1四半期である。

4. まとめ

今回の調査は、府道の拡幅工事に伴う狭い範囲での調査であり、各遺構ともその一部を確認したのみであり、遺構の全容については不明な点が多い。ただ、周辺の調査地との関連から類推すると、平安時代前期の溝SD07は宝菩提院廃寺の寺域を示す遺構の可能性も考えられる。同時期の平安時代前期の遺構としては、その性格は明らかでないが、素掘りの井戸の可能性も考えられる土坑SK09がある。この平安時代前期の遺構には平瓦片が含まれ、宝菩提院廃寺との関連も考えられる。土坑・柱穴などは中世以降の可能性が高く、物集女街道沿いの集落の一端を表したものと思われる。

(竹井治雄)

5.長岡京跡右京第986次(7ANGTE-4地区)

・上里遺跡発掘調査報告

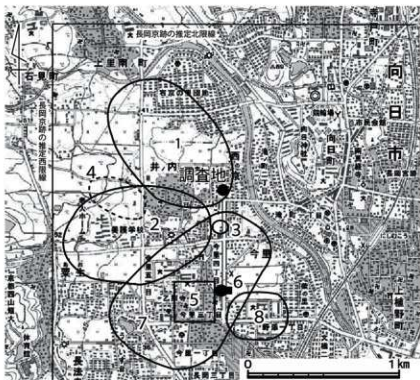
1. はじめに

今回の調査は、京都府建設交通部の依頼を受けて、都市計画道路外環状線の整備事業に伴い実施したものである。調査地は、長岡京市井ノ内玉ノ上5-1に所在する。

今回の調査対象地は、長岡京条坊復原図(新条坊)によれば、右京二条二坊十五町にあたり、縄文時代から中世にかけての遺跡である上里遺跡の範囲に含まれる。

これまでの周辺の調査では、長岡京市立第十小学校建設に伴う右京第22・25次調査で、四町規模の宅地の中心から長岡京跡の右京域では最大級の掘立柱建物跡が検出させている。隣接する長岡京跡右京第547次調査で弥生時代の溝・自然流路、奈良時代の柱列、中世の溝・柱列が検出されている。また、近年、調査地の北300mで実施された京都市上里遺跡の調査では、縄文時代晩期の集落跡、弥生時代前期の集落跡と、長岡京の道路側溝や掘立柱建物跡が検出されている。

現地調査は、調査第2課主幹調査第3係長事務取扱石井清司、専門調査員石尾政信が担当した。調査期間は平成21年10月20日から12月3日である。調査面積は360㎡である。



第1図 調査地位置図および周辺遺跡(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

1. 上里遺跡
2. 井ノ内遺跡
3. 更ノ町遺跡
4. 井ノ内古墳群
5. 乙訓寺
6. 今里塚古墳
7. 今里遺跡
8. 今里北ノ町遺跡

現地調査および整理作業にあたっては、多くの方々への参加を得た。また、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、地元自治会をはじめ多くの方々にご指導、ご協力をいただいた。厚くお礼申し上げたい。なお、国土座標の表示は日本測地系の第Ⅵ座標系を用いている。本書は石尾が執筆した。

2. 調査の概要

調査対象地内に南北に長い4m×90mのトレン

チを設定し、表土等を重機により除去した後、人力で掘削・精査を行った。

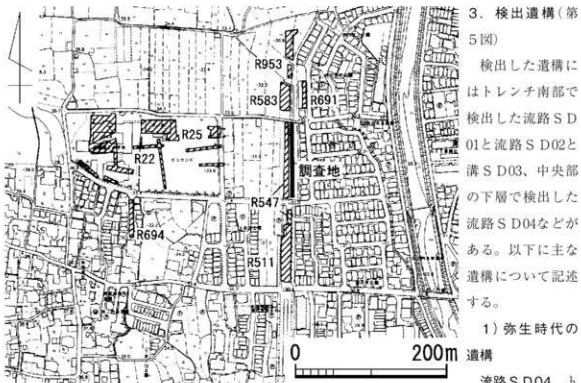
トレンチ南部では地表下0.4～0.5mで暗紫褐色土のベース面を検出したが、暗紫褐色土のベース面は南に傾斜しており、南部分では暗紫褐色土のベース面の上に砂礫・砂が堆積していた(第3・4図65～74層)。トレンチ南端の砂礫・砂層(81・82・89・90層)からは、縄文時代晩期・弥生時代前期の土器と栗などの種子・堅果類を含む土層を確認したが、この時期の明確な遺構は検出できなかった。

遺構は暗紫褐色土のベース面から掘り込まれ、北西～南東方向の流路跡2か所(S D01・S D02)と溝(S D03)を検出した。2か所の流路は砂礫・砂が堆積しており、これは流路S D01が第3・4図54～61層、流路S D02が第3・4図36～42層に相当する。埋土内から弥生時代～古墳時代の土器が少量出土した。溝S D03は砂(第3・4図49層)を埋土とするもので、遺物は出土していない。

暗紫褐色土のベース面上層には、平安時代から中世の土器を含む包含層がある(62・63層)。流路跡S D02の北側のトレンチ中央部では、遺物包含層がなく、下層で砂礫・砂が堆積した北西～南東方向の溝を確認した(第3・4図15・16・21・25層)。

トレンチ北部は、北東方向に傾斜する地形で、耕作土の下に客土層があり、その下層の灰色土(第3・4図5層)から、少量の瓦器・土師器の細片が採集できた。

今回の調査地では、トレンチ南部が長岡京跡の二条条間大路が推定される地点ではあったが、後世に削平されたためか、長岡京跡に関連する遺構は確認されなかった。



第2図 周辺調査地およびトレンチ配置図

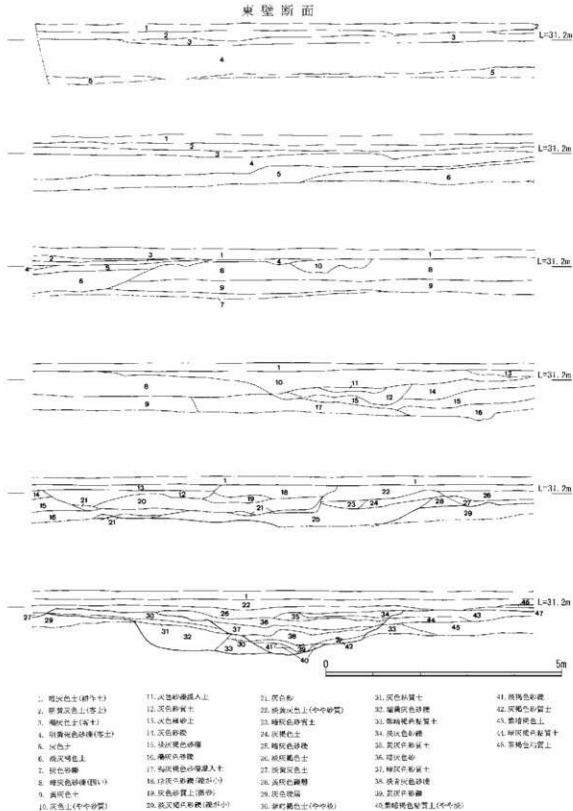
3. 検出遺構(第5図)

検出した遺構にはトレンチ南部で検出した流路S D01と流路S D02と溝S D03、中央部の下層で検出した流路S D04などがある。以下に主な遺構について記述する。

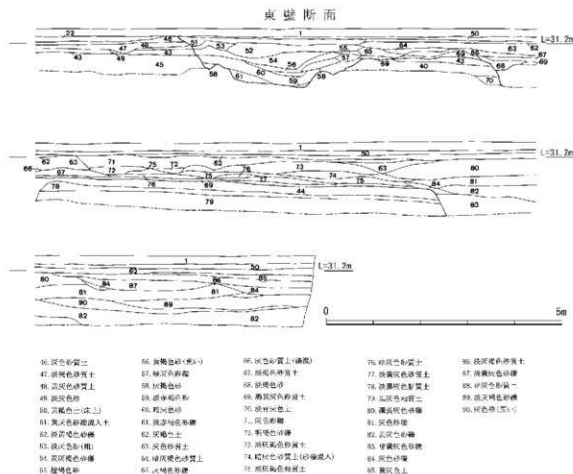
1) 弥生時代の遺構

流路S D04 トレンチ中央部の下

層で検出した北西～南東方向の砂礫・砂が堆積した流路で、幅4.0m前後を測る。トレンチ内で北東方向にも分岐している様子である。堆積層から弥生時代中期の土器片が出土した。



第3図 調査地土層実測図(1)



第4図 調査地土層実測図(2)

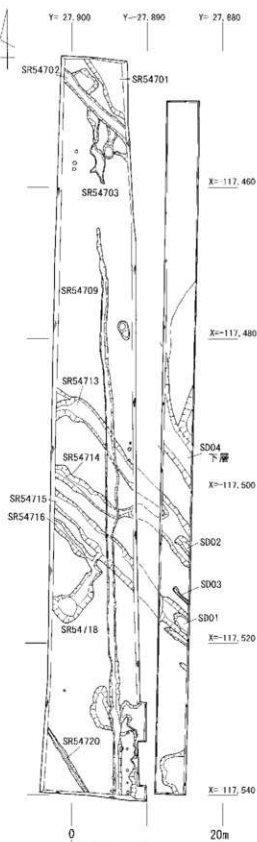
2) 弥生時代～古墳時代の遺構(第6図)

流路SD01 トレンチ南部で検出した幅約3.0m、深さ約0.7mを測る北西～南東方向の流路跡で、流路SD01内には砂礫・砂が堆積していた。流路の底部は抉られて凹凸が見られる。流路内からは少量の弥生時代～古墳時代の土器が出土した。流路SD01は右京第547次調査で検出したSD54715の延長にあたる。

流路SD02 SD01の北側5mで、これと軸を揃えて並行する流路跡である。幅約3.5m、深さ約0.8mを測る。流路内には砂礫・砂が堆積していた。流路の底部は抉られて凹凸が見られる。流路内からは少量の弥生時代～古墳時代の土器が出土した。SD02は右京第547次調査で検出したSD54713・SD54714の延長にあたる。

4. 出土遺物(第7図)

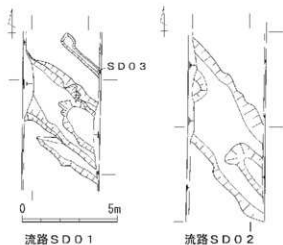
出土遺物は、SD01・SD02・SD04の流路のほか、暗紫褐色土のベース面の上面にある遺物包含層、トレンチ南端の砂礫・砂堆積土から出土した。なお、流路跡SD01・SD02出土の土器は細片で図化できるものがなかった。図化できた主な遺物は、5が流路SD04から出土したほかは、すべてトレンチ南部の砂礫・砂堆積層から出土した。



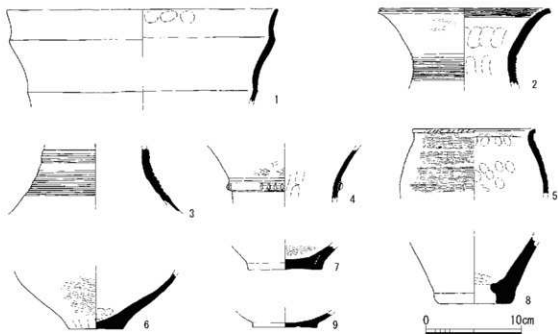
第5図 調査地平面図

右側：今回調査地、左側：右京第547次調査

1は口縁部が屈曲する深鉢である。復原口径28.4cm、残存高9.8cmを測る。焼成は良く、胎土に0.2~0.5mmの石英・角閃石・雲母・チャートなどを多く含み、暗茶褐色を呈す。搬入品と思われる。縄文時代晩期(滋賀里Ⅲ期)の所産である。2は口縁部が外反して開く弥生時代前期の広口壺で、口縁端面に沈線、口縁部内面と頸部外面にヘラ描き沈線がめぐる。復原口径17.8cmを測る。胎土に0.5~1.5mmの石英・長石・角閃石などを含み、暗茶灰褐色を呈す。搬入品か。3は広口壺の頸部で、外面にヘラ描きの沈線がめぐる。復原頸部径11.2cmを測る。焼成が良く、胎土に石英・チャートを含み淡褐色を呈す。4は広口壺の頸部で、外面に刻目が施された凸帯がめぐる。焼成が良く、胎土に0.5~1.5mmの石英・チャートを含み暗茶灰褐色を呈す。5は無頸壺の口縁部で、口縁端面に刻目を施し、体部外面にヘラ描きの麻状文を施す。復原口径13.0mmを測る。焼成が良く、胎土は密で、1mm以下の石英・チャートを含み淡褐色を呈す。6は壺の底部で、外面にヘラミガキが施される。復原底部径5.6cmを測る。焼成が良く、胎土に1~5mmの石英・チャート・褐色粒子を含み、淡褐色を呈す。7は壺の底部で、内面にヘラミガキが施される。復原底径7.8cmを測る。焼成が良く、胎



第6図 流路跡SD01・02実測図



第7図 出土遺物実測図

土に0.5~1.0mmのチャート・褐色粒子を含み外面が明淡褐色、内面が黒褐色を呈す。8は甕の底部で、調整は不明である。復原底径7.8cmを測る。焼成が良く、やや粗い胎土で0.5~2.0mmの石英・チャート・褐色粒子を多く含む淡灰褐色を呈す。9は、須恵器の削り出し高台である。復原体部径6.8cmを測る。胎土は密で焼成が良く灰色を呈す。10世紀前半のものである。

2~4、6~8は弥生時代前期(第I様式新段階)、5は弥生時代中期初頭(第II様式)の所産である。

5. まとめ

今回の調査では、トレンチ南部で弥生時代~古墳時代の遺物が出土する流路跡2か所を検出し、その北側で弥生時代の土器が混入する流路跡を確認したが、これら以外に顕著な遺構は見られなかった。調査地が小畑川に向かって傾斜する扇状地の先端部にあたることから、長岡京跡に関連する遺構は削平されたか流失した可能性が高い。また、砂礫・砂堆積層から縄文時代晩期の深鉢と弥生時代前期の壺類が出土したが、遺構は確認できなかった。この地点では遺構はなく、遺跡中心の北西部から遺物が流失し堆積したものと推測される。

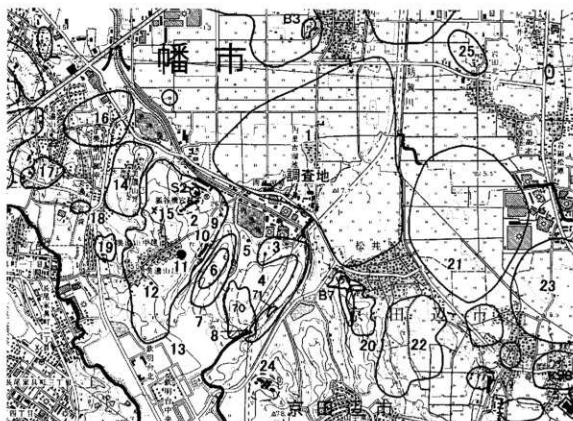
調査参加者 調査補助員：武本典子
整理員：清水友佳子・小関宏美

6.新田遺跡第7次発掘調査報告

1. はじめに

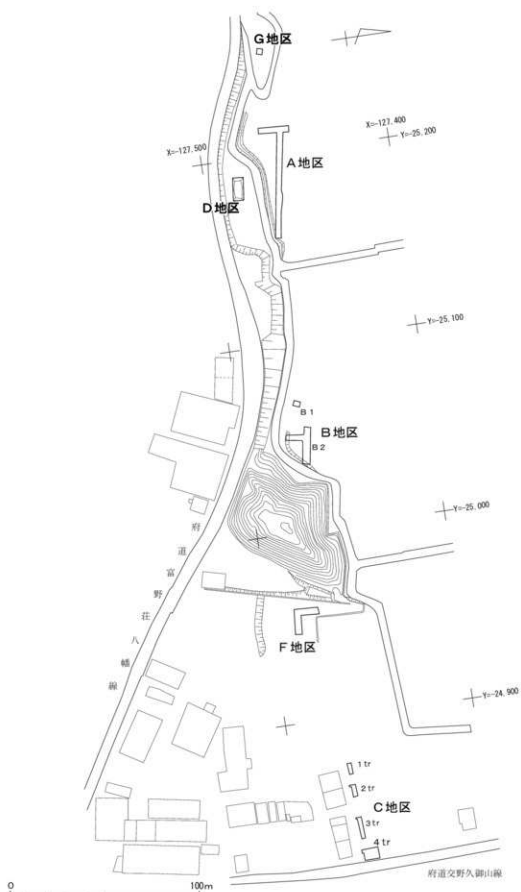
今回の調査は、都市計画道路内里高野道線街路整備促進事業に伴う事前調査である。新田遺跡は八幡市と京田辺市にまたがる遺跡である(第1図)。京田辺市域では古墳時代をはじめとする遺構および遺物が確認されているが、八幡市域においては昭和56年度から昭和59年度に遺跡範囲の北東隅で調査が実施されている。昭和58年度の調査では、5世紀代の竪穴式住居跡と旧河道が確認された。昭和63年度の調査では木津川か虚空蔵谷川の旧河道を検出している。このように、八幡市域では、当該遺跡の実態は不明な点が多い。

当遺跡南側および南東側背後の丘陵斜面には、狐谷横穴群(2)、女谷・荒坂横穴群(3)、美濃

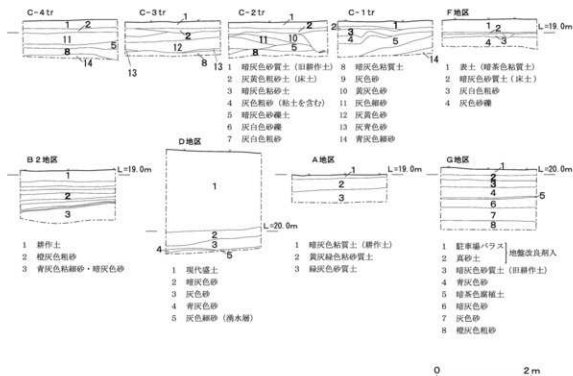


第1図 調査地および周辺の遺跡(国土地理院 1/25,000 淀)

- | | | | |
|-----------|--------------|--------------|------------|
| 1. 新田遺跡 | 2. 狐谷横穴群 | 3. 女谷・荒坂横穴群 | 4. 荒坂遺跡 |
| 5. 内里池南古墳 | 6. 美濃山廃寺 | 7. 美濃山廃寺下層遺跡 | 8. 御毛通古墳 |
| 9. 柿谷古墳 | 10. 美濃山横穴群 | 11. 王塚古墳 | 12. 小塚古墳 |
| 13. 美濃山遺跡 | 14. 金右衛門埴内遺跡 | 15. 野神遺跡 | 16. 幸水遺跡 |
| 17. 西ノ口遺跡 | 18. 宮ノ背遺跡 | 19. 宮ノ背西遺跡 | 20. 松井横穴群 |
| 21. 魚田遺跡 | 22. 向谷遺跡 | 23. 門田遺跡 | 24. 口仲谷古墳群 |
| 25. 西岩田遺跡 | | | |



第2図 調査トレンチ配置図



第3図 各トレンチ土層柱状図

山横穴群(10)や、松井横穴群(20)などの古墳時代後期末の横穴群が多数存在するため、沖積地に集落の存在が予想される。

現地調査は、京都府建設交通部の依頼を受けて、八幡市内里荒場・深田地で、平成21年10月14日～平成21年12月15日まで実施した。調査は調査第2課課長補佐兼調査第1係長小池寛、同課主査調査員柴暁彦が行った。調査面積は500m²である。調査期間中は京都府教育委員会、八幡市教育委員会、地元有志の方々のお世話になった。記して感謝の意を表する。本報告は柴が執筆した。

2. 調査概要(第2～8図)

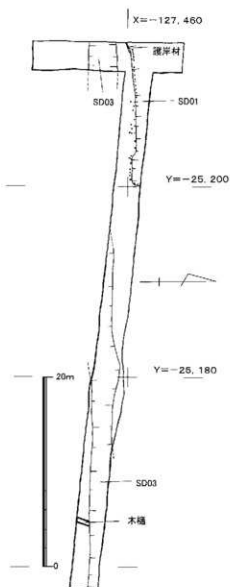
1) トレンチの概要

道路計画路線内にA、B、C、D、F、G地区の計6か所の調査区を設定した。まず表土および耕作土を重機により除去し、その後、人力掘削に切り替えて遺構検出作業を行った。

A地区(第5図) 近世後期段階(18世紀後半)に属する東西方向の溝跡SD01を検出した。溝の構造は溝肩部に竹を打ち込み護岸していた。灌漑



第4図 調査地遠景(南西から)



第5図 A地区検出遺構平面図



第6図 B-1地区掘削状況(南西から)

用水路と考える。埋土は暗灰色粘質土である。その下層には0.3~0.4mの厚さで腐植土が堆積しており、腐植土中には植物遺体が含まれていた。溝の底部には拳大の円礫が多数見られた。

そのほか周辺の区画整理直前に水路として利用されていたと考えられる東西方向の水路SD03も確認した。埋土の下層には多量の腐植土が堆積していた。最終段階で近世面以下2mを重機により深掘りしたが、遺構・遺物とも確認できなかった。

B地区(第6図) B1地区およびB2地区の2か所を調査した。B1地区は3m四方を重機により掘削したが、耕作土以下、砂層と灰緑色の薄い粘質土の互層堆積が続き、湧水が激しく、遺構・遺物とも確認できなかった。B2地区は「T」字型の調査区を設定し、重機により掘削を行った。耕作土直下で橙灰色粗砂が現れ、灰緑色の薄い粘質土の互層堆積が0.6~0.8m続き、その下層で灰緑色粘細砂層を確認した。さらに掘り下げると暗灰色砂に変化し、多量の湧水が見られた。遺構・遺物とも確認できなかった。

C地区(第7図) 道路計画路線の東側に4か所のトレンチを設定した。重機により表土および耕作土を除去し、人力掘削により遺構精査を行った。2・3トレンチには安定した面があり、近世後期の落ち込みを確認した。

腐植土が堆積しており、漆器碗の破片、肥前陶器片などが出土した。出土遺物から18世紀後半に埋没したと思われる。最終段階で重機により深掘りを行ったが、砂層の水平堆積が続くのみであった。

D地区(第8図) 府道富野荘八幡線の隣接地で調査を行った。調査前の現況では、南側から派生した美濃山丘陵の先端部に立地するよう思われたが、調査の結果、現地表下約3mが現代の盛土層、その直下で耕作面

が確認された。調査の最終段階でさらに現地表下5mまで掘削したが、基盤層には到達せず、灰色細砂層に変化した湧水が見られたのみであった。基盤層はさらに深いものと思われる。

F地区 「L」字型に調査区を設定し、重機により表土および耕作土を除去した。その後人力掘削により遺構精査を行った。耕作土直下で竹を利用した現代の暗渠排水を確認し、その下層で近世段階の水路を確認した。多量の湧水が見られた。最終段階で重機によりさらに下層の深掘りを行ったが、砂層の連続であり、遺構・遺物とも確認できなかった。

G地区 道路計画路線帯の西端で、4m四方の調査区を設定し、重機と人力による掘削を行った。調査前の状況は、耕作地を駐車場として利用したものであり、土壤改良がなされ、表土は固く締まっていた。現地表下約15mまで掘削したが、多量の湧水が見られたほかは、遺構・遺物とも確認できなかった。



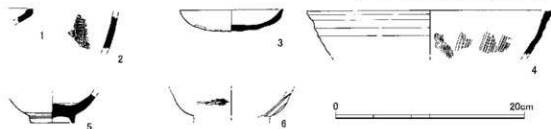
第7図 C地区全景（東から、写真奥から1～3トレンチ）



第8図 D地区深掘り状況（北から）

3. 出土遺物

1は布留式甕の口縁部片である。端部は内面に折り曲げ、肥厚している。色調は淡褐色をなす。2は須恵器甕の体部片である。外面はタタキ目が残るが、内面は平滑に仕上げられている。器壁の厚さは0.4cmである。色調は淡灰色をなす。3は土師器皿である。復原口径は11.0cm、器高23cmを測る。4は信楽焼のすり鉢である。色調は、外面が明褐色、内面が黒灰色である。17世紀後半のものである。5は「くらわんか茶碗」の底部片である。18世紀後半のものである。6は漆器椀片で、外面は黒漆



第9図 出土遺物実測図

が塗られ、文様が描かれている。内面は朱漆が塗られている。

4. まとめ

今回の発掘調査では顕著な遺構・遺物ともに確認できなかった。調査地は土層の堆積状況から見て、河川堆積による砂層が堆積しており、旧地形は河川の氾濫原と考えられた。A地区・C地区・F地区で18世紀後半の水路が確認できた。

現在の調査地周辺の耕作地は、地下水位が高く湧水量が多いため、湿地状をなしている。また当遺跡の所在地には、小字名として荒場、河原、深田といった名称が残っていることから、河川の氾濫原、湿地状をなす環境の名残と考えられる。今回の調査では、明確な遺構は検出できなかったが、段丘直下の状況を把握できたことは、新田遺跡の南端部を復原する際の基本資料として重要である。

調査参加者(敬称略) 整理員：丸谷はま子

参考文献

- 奥村清一郎ほか「八幡地区圃場整備事業関係遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1984)』京都府教育委員会) 1984
- 荒川史「5. 第二京阪道路関係遺跡(2)新田遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第38冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

7. 八幡木津線関係遺跡発掘調査報告

(鞍岡山2号墳・片山遺跡・下馬遺跡)

はじめに

今回の発掘調査は、京都府建設交通部が実施する主要地方道八幡木津線道路整備促進事業に伴う事前調査である。鞍岡山2号墳は、京都府相楽郡精華町大字下粕小字長芝・大福寺ほかに所在する古墳時代前期～中期の4基の円墳で構成される鞍岡山古墳群の中の1基である。2号墳は、路線帯内に位置するため全面発掘調査を行った。一方、片山遺跡と下馬遺跡は、遺構・遺物の分布状況や遺跡の範囲・性格等の把握を目的として、小規模な調査を実施した。下馬遺跡と片山遺跡は同町大字下粕小字下馬・片山に所在する遺物散布地であり、これまでに土師器・須恵器・瓦器などが採集されているが、遺跡の実態は不明であった。

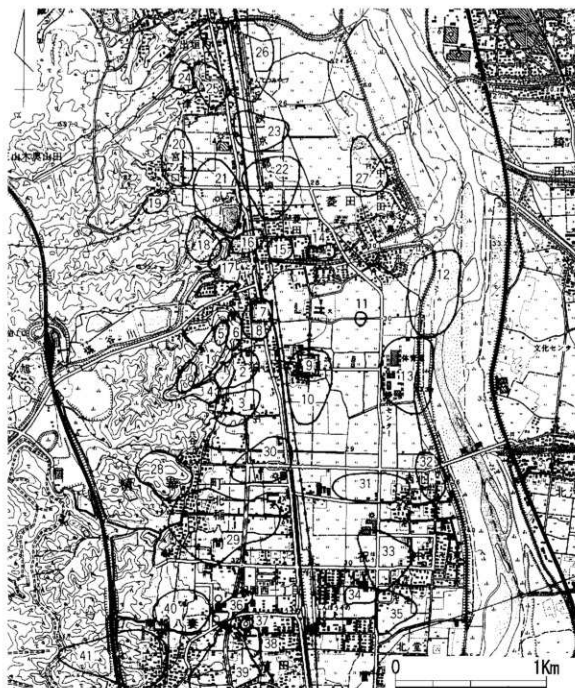
現地調査は、平成20年11月11日から平成21年3月9日までの期間を要し、鞍岡山2号墳については平成21年3月9日に現地説明会を実施し、250名の参加者があった。調査面積は、鞍岡山2号墳とその周辺域が1,000㎡、下馬遺跡が880㎡、片山遺跡が120㎡である。現地の発掘調査は当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長小池寛、同主任調査員竹原一彦、同調査員石崎善久(当時)、同主査調査員柴 暁彦、調査第3係主任調査員岩松保が担当した。整理報告作業は平成21年度事業として実施し、本文は調査第1係主任調査員竹原一彦及び京都府教育委員会指導部文化財保護課主査石崎善久が執筆した。

調査期間中は、山城南土木事務所・精華町教育委員会など多くの関係諸機関の協力を得た。下馬遺跡の調査では、顕著な遺構・遺物が出土したトレンチは平成21年度に引き続き調査を実施しているために概略の報告にとどめ、詳細については本調査の成果と併せて次年度報告としたい。なお、挿図に使用した座標は世界測地系である。

位置と環境(第1図)

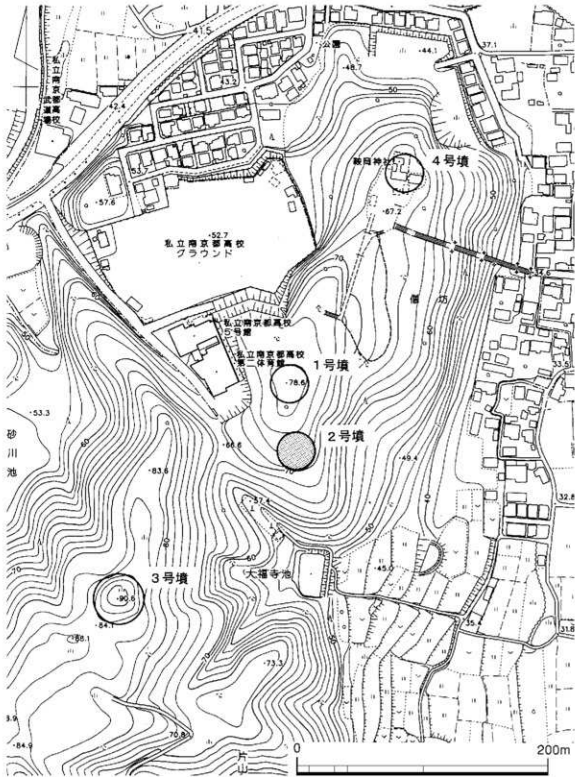
相楽郡精華町は京都府南部の南山城地域にあって、町域の東部は木津川左岸の沖積平野が広がり、中央部以西には奈良県と行政界を接する丘陵が存在する。木津川左岸の沖積平野部は、ほぼJR片町線と近鉄京都線付近を境に、東方の平野部と西方の扇状地に二分される。平野部ではかつての木津川の蛇行を示す旧河道の跡や自然堤防が認められ、特に古い集落は、自然堤防・扇状地・段丘など、それぞれに木津川の氾濫を回避し得る地形条件を求めて立地している状況が窺える。

鞍岡山古墳群・片山遺跡・下馬遺跡は、町域北西部の丘陵上と裾部扇状地に所在する。また、周辺部には縄文時代から中世の各時期の遺跡が数多く分布している。鞍岡山古墳群の南部には弥生時代後期の台状墓や土壇墓、古墳時代後期の土坑を検出した大福寺遺跡があり、縄文時代の石



第1図 周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000 田辺)

- | | | | | | |
|-----------------|-----------|------------------|------------|-----------------|------------|
| 1. 鞍岡山古墳群 | 2. 下馬遺跡 | 3. 片山遺跡 | 4. 大福寺遺跡 | 5. 鞍岡神社遺跡 | 6. 鞍岡山遺跡 |
| 7. 下泊庵寺 | 8. 拝殿遺跡 | 9. 里庵寺 | 10. 里遺跡 | 11. 石ヶ町遺跡 | |
| 12. 百久保地先遺跡 | | 13. 椋ノ木遺跡 | 14. 春日神社遺跡 | 15. 前川原遺跡(大北城跡) | |
| 16. 西ノ口遺跡 | 17. 薬師山遺跡 | 18. 平谷古墳群 | 19. 白山遺跡 | 20. 屋敷田遺跡 | 21. 宮の口遺跡 |
| 22. 山路遺跡 | 23. 桑町遺跡 | 24. 三山木庵寺 | 25. 佐牙垣内遺跡 | 26. 宮ノ下遺跡 | 27. 元屋敷遺跡 |
| 28. 城山遺跡(稲屋妻城跡) | | 29. 北稲遺跡 | 30. 柿添遺跡 | 31. 西垣内遺跡 | 32. 祝園神社遺跡 |
| 33. 中垣内遺跡 | 34. 城ノ内遺跡 | 35. 古屋敷遺跡 | 36. 北尻遺跡 | 37. 丸山古墳 | 38. 祝園遺跡 |
| 39. 森垣外遺跡 | 40. 南稲遺跡 | 41. 政ヶ谷遺跡(稲屋妻城跡) | | | |



第2図 鞍岡山古墳群位置図

匙も出土している。

周辺の遺跡を概観すると、縄文時代では、中世の代表的な遺跡である椋ノ木遺跡で縄文式土器の出土をみているほか、百久保地先遺跡が知られる。弥生時代では、散布地であるが下馬遺跡北側の扇状地に山路遺跡(前期)と西ノ口遺跡(後期)、丘陵上の薬師山遺跡(後期)が存在する。

古墳時代では、調査地の北西の丘陵上に4基の円墳(前期末～中期)からなる鞍岡山古墳群がある。盟主墳である3号墳(中期前半)は直径約40m×高さ約8mを測り、墳丘には葺石と埴輪が伴う。埋葬施設は粘土槨で、盗掘を受けていた。石製模造品や玉類、鉄製品が出土している。大福寺出土とされる甕籠鏡は3号墳出土と言われている。1号墳(前期)は未調査であるが、過去に墳丘裾から埴輪棺が出土している。また、同丘陵では大福寺採集と記された陶棺(大福寺古墳)の存在が伝えられるが、大福寺古墳については位置不明である。近隣での古墳時代集落としては柿添遺跡が知られ、前期の竪穴式住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑が検出されている。

飛鳥時代以降では、平野部に飛鳥時代後期から奈良時代の里廃寺、JR下柏駅の南側丘陵裾部に平安時代後期から中世の下柏廃寺が知られる。下柏廃寺含む一帯は古墳時代後期から奈良時代の押飯遺跡でもある。丘陵上の鞍岡神社遺跡では磨製石鏃と瓦が採取されている。

中世には遺跡数も増加するが、特に椋ノ木遺跡では掘立柱建物跡・柵・井戸・土墳墓・溝等が検出されている。また、平野部には条里の規制を受けた畦畔・水路・道路の景観が良く残る。

(竹原一彦)

(1) 鞍岡山2号墳

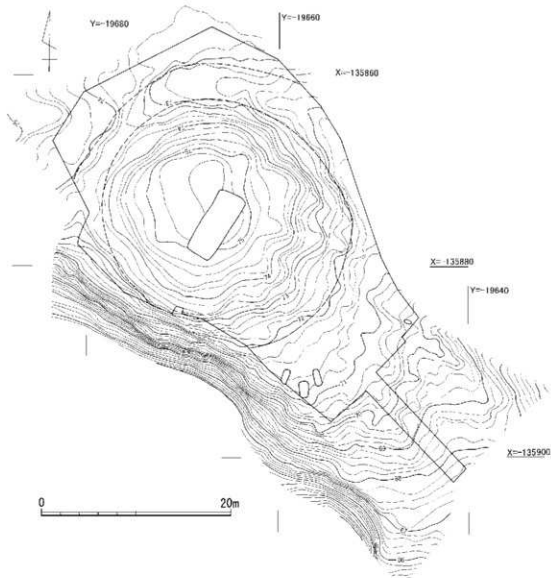
1. 立地(第2図)

鞍岡山古墳群は4基から構成される古墳群である。鞍岡山古墳群は生駒山系の東に展開する通称甘南備丘陵と呼ばれる丘陵上に分布している。北の丘陵稜線上端部には遺存状況は悪いものの、鞍岡山4号墳が立地し、その南約200mの丘陵稜線上最高所には、鞍岡山1号墳が立地する。鞍岡山2号墳は、この1号墳の立地する主尾根から南に派生する支尾根稜線上に立地している。なお、鞍岡山3号墳は主尾根を1号墳からさらに南へ約220m離れた丘陵の頂部に位置している。

2. 墳丘(第3・4図)

鞍岡山2号墳は、調査前の地表観察によっても、墳丘北側に明確な周溝がみられ、北東および、南西側にも明瞭な基底部と考えられる傾斜変換線が確認された。一方、南側の丘陵斜面は崖状の急峻な地形を呈している。これは、約30年前の豪雨により、丘陵斜面が地滑りにより崩落したためであることを地元の方から伺うことができた。なお、この南斜面側に関しては、調査時の安全上の理由から掘削を断念せざるを得なかった。墳丘北東側でもわずかに基底部とみられる平坦面を介して急峻な丘陵斜面へと至る。また、墳丘の南東斜面を中心に里道とみられる地形の改変が行われている。

調査は、墳丘南東側の稜線上に位置する平坦面に狭小なトレンチを設定し、遺構の有無を確認し、調査区の設定を実施することから開始した。その結果、墳丘南東部の平坦面からは、遺構・遺物等を検出するには至らず、京都府教育委員会と協議の上、全面的な拡張の必要はないものと



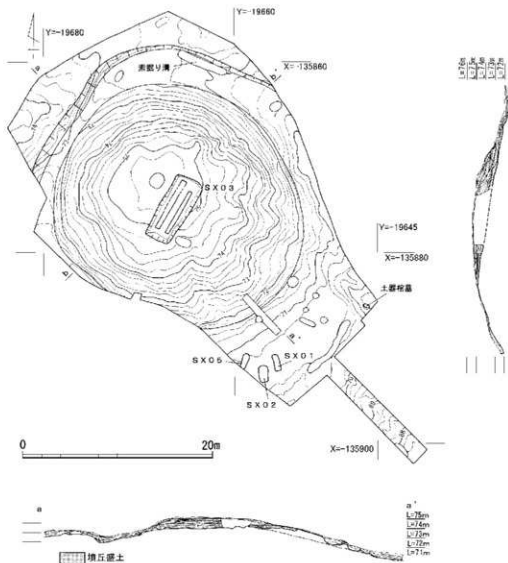
第3図 2号墳調査前地形測量図(S=1/400)

判断され、墳丘裾部を中心に拡張を実施することと決定された。

墳丘の掘削作業は、丘陵主軸方向に沿う形で土層観察用のセクションを設定し、墳頂部平坦面中央でこのセクションに直交する形で、さらに土層観察用のセクションを丘陵主軸に直交するように設定し、表土等の掘削作業を実施した。

調査の結果、鞍岡山2号墳の墳丘は、基底部を地山整形により削り出し、その上に盛土を施すことで築造された円墳であることが明らかとなった。墳丘の造成に際しては、地山面上に旧表土とみられる腐食土層が全く形成されていないことから、旧地形を一定程度改変していることが予測される。おそらく、樹木の伐採、表土の掘削等をまず実施していることが想定される。地山の整形は丘陵稜線方向はほぼ平坦に整形しているが、丘陵直交方向では、当初の自然地形に即した傾斜面が残されている。

基底部となる地山整形は、墳丘北西から南にかけてと、墳丘南東側で行われている。一方、墳



第4図 2号墳調査後地形測量図 (S=1/400)

丘北側は、基底部の整形を地山整形によることなく、盛土を施すことにより実施している状況が明らかとなった。後述する周溝の形状が不整形な点は、基底部削り出しを実施する作業工程が場所によって異なり、丘陵主軸方向の周溝の掘削は、地山整形の段階に実施されている可能性を示唆するものとみられる。

墳丘の造成は、盛土をほぼ水平の単位で積み上げることにより実施している。しかし、丘陵直交方向では水平に墳丘中心部を積み上げた後に、外周側にさらに盛土を水平方向に積み足して、墳丘を完成させているものとみられる。

墳丘北西の後背部には周溝が巡る。周溝の平面形はやや不整な方形を呈している。周溝の断面形は丘陵稜線上に相当する北西側では底がやや丸みを帯びた「U」字形に近い形状を呈するのに対し、墳丘北から北東側では周溝の幅を増し、底面はほぼ平坦に整形されている。また、周溝底面のレベルは墳丘後背部北西側が標高約73mと最も高く、そこから墳丘北東および墳丘南側に向

かい、緩やかに傾斜する。周溝の規模は墳丘裾から計測して、最も幅の狭い北西部で幅約2.5m、深さ約1.0m、最も幅の広い北側で幅約4.0m、深さ約0.4mを測る。

なお、周溝底面の北側で素掘り溝を検出した。規模は長さ5.5m、幅0.8m、深さ0.4mを測る。断面形状は壁面がほぼ垂直に立ち、底面は平坦である。なお、埋土の状況からは自然に埋没したものであると判断された。この溝の性格については明確にすることはできなかったが、掘り込み面が地山直上から掘削されていることと、この溝が周溝の北壁に沿って掘削されていることから、墳丘築造時に掘削された溝である可能性が高いものと判断される。

墳丘の形状は、丘陵主軸方向に主軸をもつやや不整形な円墳である。前述のように、丘陵稜線を最大限利用した形であり、直交方向ではわずかに基底を示す平坦面が作られている。その規模は、稜線方向に約27m、短軸方向は約24m、墳丘の高さは、南東側基底から約3.8m、北西周溝底からの高さは約2.4mをそれぞれ測る。後述する埋葬施設のあり方からみて、墳頂部南東側は盛土が流失しているものとみられる。埋葬施設を中心に復原される墳頂部平坦面の規模は、丘陵主軸方向が10m、直交方向が12mである。なお、段築や埴輪、葺石などの墳丘外部表飾は認められなかった。

なお、周溝内からは円筒埴輪小片数点や二重口縁壺、高杯などの土師器片が出土している。いずれも周溝底面から遊離し、細片化しており原位置を留めているものとは判断できない。特に埴輪片については器壁が著しく摩滅していることと、出土点数が少ないこと、そして埴輪の型式が1号墳のものと同型式であることなどから考えて、1号墳の埴輪が後世に持ち込まれたものであると判断される。一方、土師器については墳頂部から転落した遺物である可能性が高い。

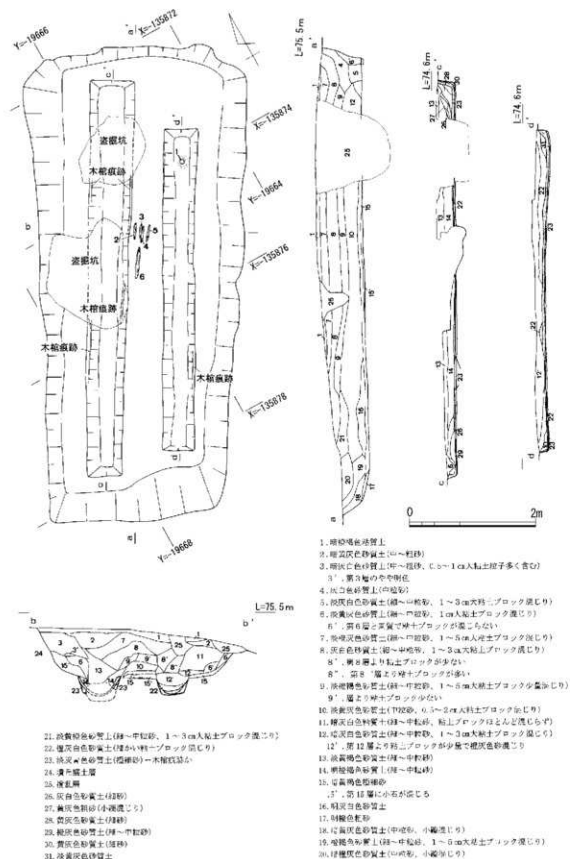
また、墳丘東側裾部分からは、表土掘削中に石銅片(第12図76)が出土した。この石銅片については後述する盗掘により、2号墳から掘り出され遺棄されたものである可能性も否定できないが、他の古墳の副葬品である可能性も否定しきれないため、現段階では元位置不明の遺物と考えざるを得ない。

3. 埋葬施設(第5図)

2号墳墳頂部では、丘陵稜線直交方向に主軸(N-30°-E)をもつ、木棺直葬形態の埋葬施設SX03を検出した。調査最終段階の断ち割り作業や、周辺部での精査においてもこの埋葬施設以外には検出されていないため、単独埋葬であると判断される。

墓壙は当初想定された墳頂部平坦面中央ではなく、やや傾斜する南東部分で検出された。この点からみて、墳頂部南東側は削平、流失しているものとみられる。墓壙は表土および薄く形成された腐植土層を除去した段階で、その輪郭を検出した。この状況からは、墓壙埋戻し後にさらに墓壙を覆うための覆土がなされたか否かを判断することはできなかった。

墓壙を検出した段階で墓壙周辺に4基の土坑の輪郭を確認した。その内の2基は墓壙を切り込む形で検出された。当初は近世墓などの可能性を考えたが、掘削を進めるうちにちょうど木棺底と同レベルまで掘削していることなどから、盗掘坑である確証を得た。盗掘坑は当初垂直に掘り



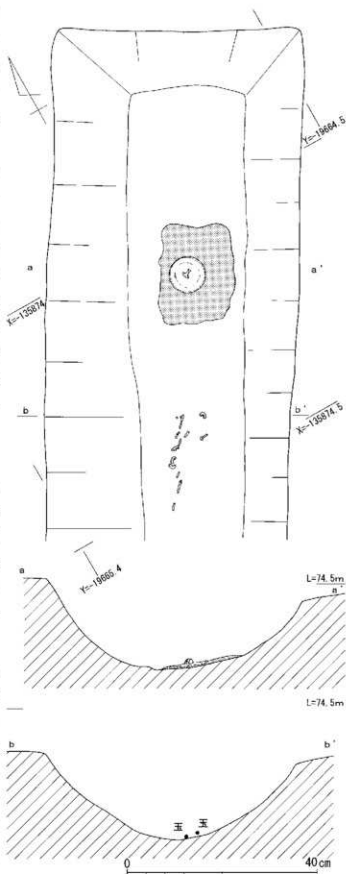
第5図 2号墳埋葬施設S X03実測図(S=1/60)

込まれた後、棺底面とはほぼ同レベルに至った段階で横方向に拡張が行われている。この状況から副葬品が出土した段階で、さらに副葬品を求め、周辺部分を掘削したものと判断された。

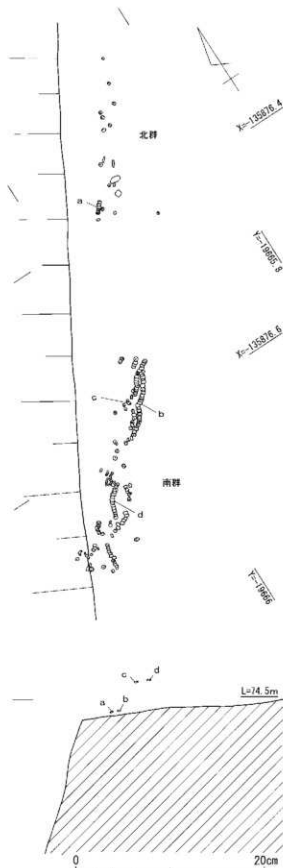
墓壇は平面長方形プランを呈する。北側がやや幅広となる形状を呈する。周辺部分が削平を受けているものの、本来、北側が幅広の形状を呈していたものと判断される。墓壇の掘削は盛土上から行われており、墳丘の造成後に墓壇の掘削が行われたことは確実である。検出時の墓壇の平面規模は、長軸7.5m、北側小口部分幅3.5m、南側小口部分幅2.7mをそれぞれ測る。

墓壇の掘削開始直後に土師器片1点が墓壇南東部分から検出された。他に同一個体とみられる個体や、墳丘各所で出土した土師器との接合関係もみられないため、墓壇上に供献あるいは祭祀行為に伴い遺棄された遺物であるとの確証を得ることはできなかった。

盗掘坑および墓壇の掘削を進めた段階で、盗掘坑側断面に木棺痕跡が存在することが明らかとなった。この段階では、1墓壇1棺の木棺直葬形態の埋葬施設と考えて調査を進めていたため、あまりに木棺が墓壇から偏ることを疑問に思い、切り合い関係の有無があるか、墓壇単軸方向の断面を再精査し観察を行ったが、やはり墓壇は単独であり、切り合い



第6図 埋葬施設S X03東棺遺物出土状況図(S=1/8)



第7図 埋葬施設S X03東棺外
遺物出土状況(S=1/4)

はないものと判断した。

墓壇の掘削を進めた結果、墓壇は墓壇底面に棺を納める部分だけさらに掘削した、いわゆる二段墓壇であることが明らかとなった。二段目を検出した段階で東西の側壁に沿う形で2基の木棺痕跡を確認した。上述のとおり、墓壇は単独であるため、1墓壇2棺埋葬であることが明らかとなった。以下、東の木棺を東棺、西の木棺を西棺として概略を述べる。なお、東棺側の墓壇南小口部分が、西棺に比して傾斜が緩く削り残された二段目の平坦面が短いことから、棺に合わせた形で墓壇の掘削がなされたものと判断される。

1) 東棺

墓壇内東側に位置する木棺である。部分的に棺材の腐食痕跡を確認することはできたが、全面的に木棺腐食痕を確認することはできなかった。そのため、木棺痕跡の掘削に際しては、棺の外法に相当する部分を掘削したものと考えられる。

木棺痕跡は短軸側断面が「U」字状を呈する。また、小口は垂直に立ち上がる。以上の点から割竹形木棺であると判断した。なお、小口板の組み方については、棺身を挟み込む形状であるのか、棺内にはめ込まれたものであるのかの確認を得ることはできなかった。

棺の規模は全長5.1m、北小口で幅0.55m、南小口で幅0.5mを測る。平面的に確認した段階から棺底までの深さは約0.25mである。棺底のレベルは北から南にわずかに傾斜する。

東棺に伴うとみられる遺物は、棺内北小口、棺外中央東側からそれぞれ検出した。棺内北小口部分で棺底に接した形で鏡、玉類の副葬品を検出した(第6図)。鏡周辺は黒変している。また、この部分を中心に赤色顔料が比較

的多く検出された。

鏡は鏡背を上にした状態で、棺中軸より東に寄ったところで検出された。ほぼ棺底に接しており、後述する玉類との位置関係から被葬者の頭位上方に副葬されたものとみられる。

玉類は鏡より南側の位置で、勾玉・管玉等が検出された。やや点数は少ないものの連をなすような状態で検出されていることから、被葬者に装着された首飾りであると判断された。

棺外の遺物として、棺中央東側から玉類が検出された(第7図)。玉類は大きく北群と南群に別れており、それぞれの構成や、出土レベルに差がみられる。北群は勾玉4点、ガラス小玉2点、滑石裂白玉17点から構成される。各玉はやや離れた位置から出土しているが、玉の構成からみて、北群で一連のものであったとみられる。一方、南群は滑石裂白玉195点のみで構成され、出土レベルは北群よりも高い。玉類の検出状況から、この滑石裂白玉のみで構成された一連のものであると判断される。

これら、棺外の遺物は、東棺が掘え付けられ、周辺に一定の埋土がなされた段階で副葬されたものと判断されるが、棺蓋を施す行程との前後関係については明確ではない。

2) 西棺

墓壇内西側で検出した木棺である。部分的に棺材の腐食痕跡を確認することはできたが、全面的に木棺腐食痕を確認することはできなかった。そのため、木棺痕跡の掘削に際しては、棺の外法に相当する部分を掘削したものと考えられる。西棺は盗掘により、棺の北側を中心に大きく破壊を受けている。盗掘の状況から何らかの副葬品を盗掘者が発見したものと推測される。

木棺痕跡は短軸側断面が「U」字状を呈する。また、小口は垂直に立ち上がる。以上の点から割竹形木棺であると判断した。なお、小口板の組み方については、棺身を挟み込む形状であるのか、棺内にはめ込まれたものであるのかの確認を得ることはできなかった。特に南小口部分では、小口板が棺内に倒れ込んでいる状況を確認した。

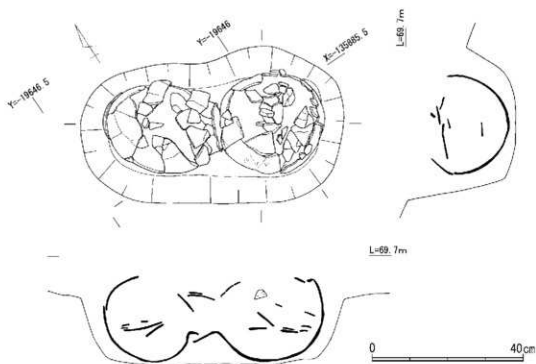
棺の規模は全長6.25m、北小口で幅0.7m、南小口で幅0.55mを測り、北小口が幅広い形状を呈する。平面的に確認した段階から棺底までの深さは約0.3mである。棺底のレベルは北から南にわずかに傾斜する。木棺の規模が東棺に比べ大形であることや、墓壇の規模はこの棺を基準に決定されているとみられることから、この古墳の中心的な被葬者が埋葬されたものとする。

西棺に伴うとみられる遺物は、棺外北東側から鉄製品が検出された。棺内からは棺北小口付近および、南小口付近でわずかに赤色顔料が検出されたにとどまる。

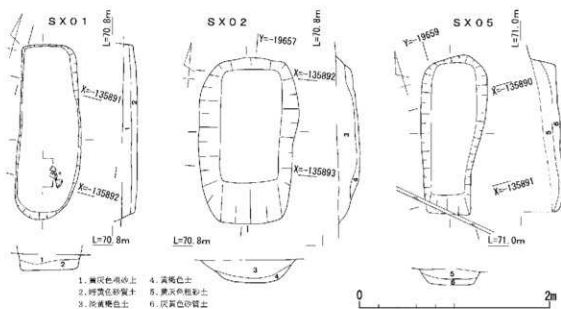
鉄製品は北に切先を向けた小型の鉄剣3点と、南に切先を向けた大型の鉄剣1点が検出された。これら鉄製品は削り残された二段目の墓壇のほぼ直上から検出されており、西棺安置後に副葬されたものと考えられる。また、北側の鉄剣はその出土状況と小型品であることから槍である可能性が高い。

4. その他の遺構

鞍岡山2号墳では、上記の古墳に伴う埋葬施設の他に、直接この古墳に伴わない遺構を検出し



第8図 土器棺墓実測図 (S=1/10)



第9図 墳丘南東裾平坦面土壘墓実測図 (S=1/40)

ている。以下、概要について述べる。

1) 土器棺墓 (第8図)

鞍岡山2号墳の墳丘裾から南東に位置するテラス状の平坦面から検出された。この部分には山道が後世に造られているため、このテラス状の平坦面が土器棺墓造墓時に存在したか否かは不明である。墓壙は不整形な長楕円形を呈する素掘りである。東西方向に主軸をとる (N-55°-W)。

2個体の直口壺を合わせ口に棺身として用いたものである。西側に用いた直口壺(第12図80)は口縁を大きく打ち欠いている。この直口壺を東の直口壺(第12図79)に差し込むようにして、棺としている。土器の形状から、2号墳の築造時期と同時期の所産と考えることができる。しかしながら、2号墳の被葬者との関係については、その埋葬位置関係などから直接的な縁故関係があるのかどうかについては、検討を要する。

2) 墳丘南東裾平坦面上の土壌墓群(第9図)

2号墳墳丘裾南東部の平坦面では、3基の土壌墓とみられる遺構を検出した。後述するように飛鳥時代の須恵器が墓壙上面から検出されていることから、飛鳥時代の土壌墓群と考えられる。

土壌墓S X01(第9図左)

2号墳墳丘裾南東部の平坦面丘陵稜線主軸からやや南西側で検出した土壌墓である。墓壙は素掘りであり、南小口が丸みをもつ隅丸長方形の平面プランを呈する。規模は長軸1.85m、短軸0.65m、深さ0.17mを測る。主軸は南北方向にとる(N-14°-W)。平・断面の観察からも木棺痕跡を確認することはできず、土壌墓であると判断される。遺物は土壌墓検出段階に南小口部分で須恵器杯1点(第12図76)を検出した。

土壌墓S X02(第9図中央)

土壌墓S X01の南西で検出した土壌墓である。墓壙は素掘りであり、隅丸長方形の平面プランを呈する。規模は長軸1.75m、短軸1.05m、深さ0.25mを測る。主軸は南北方向にとる(N-5°-W)。平・断面の観察からも木棺痕跡を確認することはできず、土壌墓S X01と類似した埋土であることから、土壌墓であると判断される。

土壌墓S X05(第9図右)

土壌墓S X02の北西で検出した土壌墓である。墓壙は素掘りであり、北小口幅がやや広い隅丸長方形の平面プランを呈する。規模は長軸1.70m、短軸0.70m、深さ0.15mを測る。主軸は南北方向にとる(N-16°-E)。平・断面の観察からも木棺痕跡を確認することはできず、土壌墓S X01と類似した埋土であることから、土壌墓であると判断される。

(石崎善久)

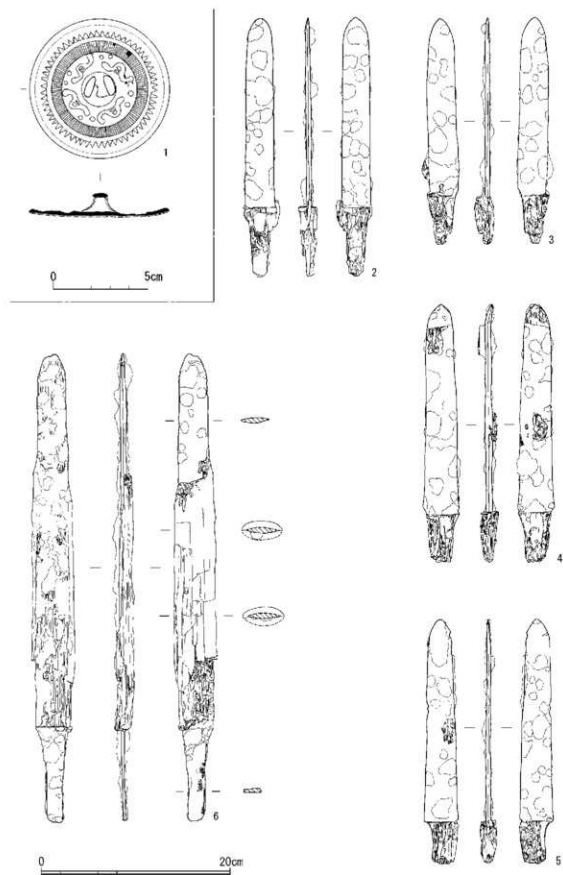
5. 出土遺物(第10・11図)

鞍岡山2号墳出土遺物は総数でコンテナ2箱である。残念ながら、墳丘各所より出土した土師器類については、小片で磨滅しており図示することができなかった。以下、遺構出土遺物ごとに概観する。

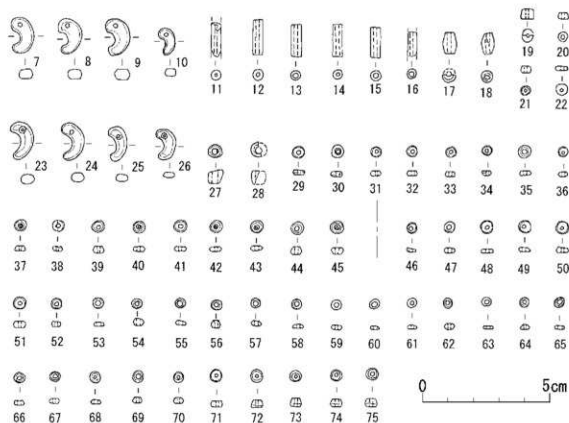
1) 鞍岡山2号墳埋葬施設S X03出土遺物(第10図)

埋葬施設S X03出土遺物には、鉄製品、玉類、鏡、土師器小片がある。土師器小片については図示することはできなかった。また、玉類については代表的なものを図示するに留めている。

第10図1はS X03東棺内から出土した青銅製の仿製四獣形鏡である。この鏡の直径は7.4cmを測る。鏡背部の中央にやや大きめの紐座をもち、紐座の周囲の内区には半円彫りの4体の獣が



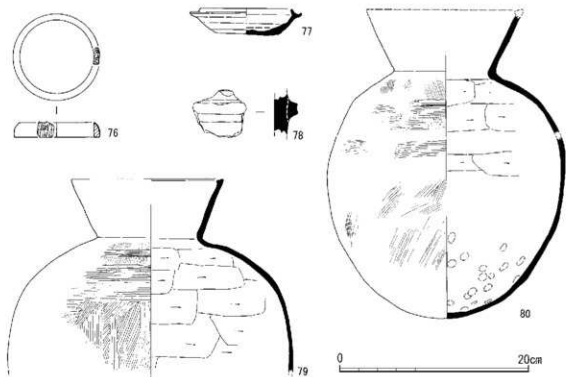
第10図 埋葬施設 S X03出土金属製品実測図



第11図 埋葬施設S X03東棺出土玉類実測図

鋳出される。獣は簡略化されているが、うろこ状の文様もかろうじて確認できる。内区外周には櫛歯文帯を巡らし、平緑部には鋸歯文を配している。鏡背の櫛歯文帯の一部に僅かに水銀朱の付着がみられる。2～6は西棺の東側棺外から出土した鉄製の楯(2～5)と鉄剣(6)である。楯2～5は、形態は剣と何ら変わらず、柄頭は直線的な小口面をもつ。切先が西棺被葬者の頭部方向に向く副葬状況から、2～5は楯と判断した。2は全長27.4cm、刃部長20.2cm、幅3.1cm、厚さ0.5cmを測る。3は全長23.5cm、刃部長18.2cm、幅2.9cm、厚さ0.5cmを測る。4は全長27.4cm、刃部長22.5cm、幅3.8cm、厚さ0.6cmを測る。5は全長25.9cm、刃部長21.3cm、幅3.5cm、厚さ0.5cmを測る。いずれも身部の断面形は凸レンズ状で、鑄は明瞭ではない。剣6は全長48.5cm、刃部長39.6cm、幅3.2cm、厚さ0.6cmを測る。剣身の中央部を中心に木製鞘が残っている。棺底側の鞘は失われているが、残る鞘の状況から断面形は楕円であったとみられる。柄部の一部に布目痕が存在することから、柄の鉄地に布を巻き、木柄に装着していたとみられる。

第11図はS X03東棺棺内と棺側部から出土した装身具である。棺内出土の玉類18点の内訳は勾玉4点(7～10)・管玉10点(11～16)・霰玉2点(17・18)・白玉4点(19～22)である。勾玉と白玉は滑石製であり、管玉と霰玉は緑色凝灰岩製である。白玉は体部中央からやや一方に偏って稜を作り出すものが多数を占める。棺外出土の玉類のうち北群は、総数23点(23～45)で、勾玉4点(23～26)、ガラス小玉2点(27・28)・白玉17点(29～45)である。棺外出土の玉類のうち南群は、すべて白玉で構成され、玉類計195点である。うち30点(46～75)を図化した。



第12図 2号墳墳丘・土器棺・土壙墓出土遺物実測図

第12図76は、墳丘北側斜面下部から出土した緑色凝灰岩製の石銅の破片である。破片が小さく、当初の直径は不明である。幅は1.6cm、下端の厚さは5mmを測る。石銅の斜面と側面はともに細刻線を有している。

杯身77は周辺埋葬施設S X01から出土した。円筒埴輪片78は墳丘斜面から出土した。埴輪の出土は僅かであり2号墳に伴うものとはみられない。79と80は土器棺に使用された布留式の直口壺である。器壁の劣化が著しく、特に薄い体部下半は小破片に別れ、復元が不可能であった。79の口径は16.4cmである。80は概ね口径が16.6cm、器高は32.8cmと推定される。

(竹原一彦)

6. まとめ

鞍岡山2号墳は、調査の結果やや不整形ながら盛土により構築された直径約25m、高さ約4mの中型円墳であることが明らかとなった。築造時期は、滑石製玉類の存在や仿製鏡からみて、古墳時代中期前半と考える。また、槍や鉄剣の複数副葬のあり方から、中期前半でも古相を示しているものと考えられる。鞍岡山古墳群の存在する丘陵上には、4基の中型円墳から構成される前・中期古墳が存在しており、2号墳もその規模からみて、これらの系譜に連なる古墳と考える。これらの古墳の編年的な位置づけについては、前期末とみられる3号墳、中期初頭とみられる1号墳、そして中期前半とみられる2号墳に連なる首長系譜を構成する。4号墳については現在のところ情報が乏しく、築造時期を示すことはできない。

また、埋葬施設の特徴として、単一墓域内に2棺を埋葬することが明らかとなった。このような1墓域内に複数の棺を埋葬する形態をとるものは、奈良県桜井市磐余池ノ内古墳群のような中規模古墳をはじめ、岐阜県大垣市昼飯大塚古墳や、三重県上野市石山古墳のような大型首長墓にもみられる。また、形態は違うものの、複室構造の棺に複数埋葬を行うものとして木津川市内田山B2号墳のような例も存在する。これらは、形態こそ異なるものの、同一墓域内に複数の被葬者を埋葬するという原理自体は共通しており、1墓域に複数の被葬者を埋葬するという事例が決して特殊とはいえないことを示していると思われる。今後、こうした埋葬方法が何に起因しているのかを考察していく必要があると考える。(石崎善久)

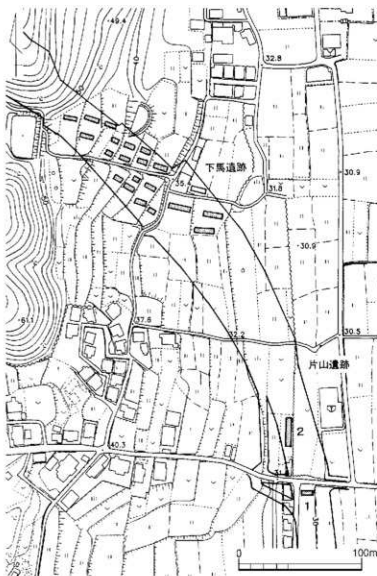
(2)片山遺跡

1. 調査の概要

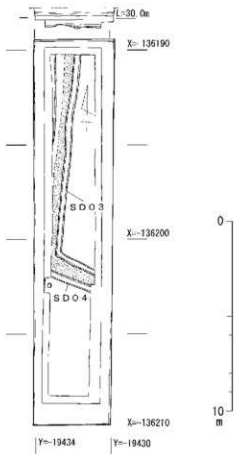
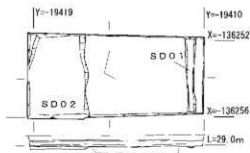
調査対象地の水田2か所にそれぞれ1か所のトレンチを設定した。遺跡の南端に位置する地点を第1トレンチ、道路を挟んだ北側を第2トレンチとした。調査に際して表土の除去には重機を使用し、その後は人力による掘削及び精査を行い遺構と遺物の検出に努めた。

1) 第1トレンチ 東西9.5m×南北4mの東西トレンチである。標高29mにあり、地表下0.6m付近に中世頃の遺構面を検出し、東端部と西端部からそれぞれ1条の溝を検出した。

溝S D01 トレンチ東端部で検出した南北方向の素掘り溝である。溝幅約0.5m、深さ約0.1mを測る。溝内から土師器の破片が少量出土した。



第13図 片山遺跡・下馬遺跡トレンチ配置図



第14図 片山遺跡トレンチ平面図

溝SD02 トレンチ西端部で検出した南北方向の素掘り溝である。溝幅は北端で約2.6mを測るが、南に向かって幅が広がる。深さは約0.2mと浅く、溝底部にはなだらかな凹凸がみられた。埋土は暗灰色砂質土である。溝内から土師器の破片が少量出土した。遺構面の直上に堆積する遺物包含層(淡灰色砂質土)では、古墳時代中期から近世までの土師器・須恵器・陶磁器等の出土をみたが、いずれも摩滅が著しい状態である。

2) 第2トレンチ 東西4m×南北20.5mを測る南北トレンチである。標高約29.6mにあり、地表下約1.2m付近で水田畦畔の痕跡と2条の溝SD03・SD04を検出した。北壁面で確認した水田畦畔は、幅約0.6m、高さ約0.2mを測り、南南西方向に約11m直線的に延びた後、東南東方向に折れる。調査面では明瞭な畦畔の盛り上がりはみられなかったが、畦畔相当部分の土壤に酸化鉄粒子が集中して確認された。

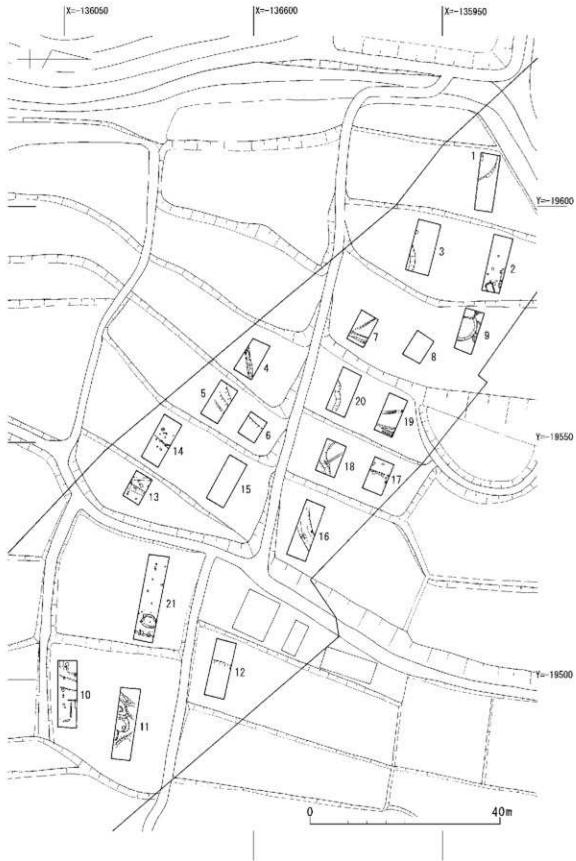
また、畦畔の両側で検出した浅い素掘り溝SD03・SD04はいずれも幅約0.3m、深さ約0.1mを測り、灌漑水路とみられる。水田土壤は黒灰色粘質土であり、遺物の出土はみられない。水田の時期は不明である。ただし、上層の淡灰色砂質土には中世頃の土師器の破片が出土している。

2. まとめ

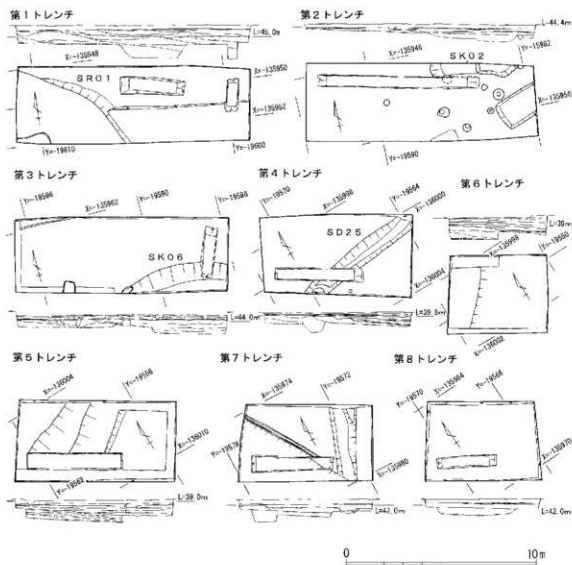
片山遺跡では遺跡南部の2か所で調査を行ったが、時期不明の水田跡と中世の条里関連溝SD01・SD02を検出した。条里関連溝は座標軸に揃うが、水田畦畔は北から東に約7°振っている。第2トレンチ検出の水田跡はその方向性から、第1トレンチ検出の条里溝との関連性は薄いと判断される。

(3) 下馬遺跡

1. 調査の経過及び各トレンチの検出遺構



第15図 下馬遺跡トレンチ配置図



第16図 下馬遺跡トレンチ実測図1

調査対象地は西側丘陵の裾部に広がる扇状地に位置し、東に下る階段状の棚田が広がる。今回は調査対象地の水田と畑地に21か所のトレンチを設定した。トレンチ番号は、調査準備の整った地点から調査を開始した都合上、任意な配置状況となった。調査開始に当たっては表土層の掘削に重機を使用した、その後は人力による掘削及び精査を行い遺構と遺物の検出に努めた。なお、周辺の道路事情から、重機はミニ・バックホーを使用した。また、トレンチは東に向かって下る地形に対し、主として直交方向(東西方向)に主軸に向けたトレンチ設定を行った。トレンチの幅は4mを基本とした。

1) 第1トレンチ 調査対象地の西端部、丘陵裾部の水田に設定したトレンチで、全長は12.5mを測る。トレンチ西端部では地表下約0.3mで淡黄灰色砂質土が広がり、この層は東に向かって緩やかに下る。精査によって自然な流路と判断する流路SR01の南西岸を検出した。流路幅に関しては、北東岸がトレンチ外となることから確認できない。検出範囲では幅約8mを超える規模

である。部分的な断ち割りを含め標高約44mにあたる地表下1.8mまで掘削したが、底面まで到達に至らなかった。流路S R01の上層部分は黄灰色系砂質土層、下層では淡緑灰色砂質土の堆積がみられた。遺物の出土はみられない。

2) 第2トレンチ 第1トレンチの東側下段の水田に設定した。トレンチの全長は約12mである。遺構面はトレンチ西端で標高44.4mにあたる地表下0.3mにあり、東に向かってやや下る。トレンチの東半部分から、柱穴・瓦溜りS K02・土坑等を検出した。瓦溜りS K02は部分的な検出であることから全容は不明であるが、土坑状の落ち込み部分から、平瓦・丸瓦に混じって瓦質播鉢の破片が出土した。瓦には布目・縄目タタキの平瓦を含むが、多くは14～15世紀の中世瓦であり、播鉢も同時代とみてよからう。柱穴の検出状況から、周辺部に建物跡が存在する可能性が高い。

3) 第3トレンチ 第2トレンチの南に設定したトレンチである。西南部壁面付近で柱穴と判断する方形掘形1基と、南東部から大形土坑の一部かと判断する土坑S K06を検出した。土坑S K06は約5.5mの検出長を測り、深さは約0.3mで底面は平坦である。土坑S K06に伴う遺物の出土はみられない。

4) 第4トレンチ 第3トレンチから南東方向に約40m離れて設けたトレンチであり、全長は約8mを測る。遺構面は東半分が階段状に約0.3m程度下がる状況と遺物出土状況から、中世頃には、さらに小幅の棚田地形が存在していたとみられる。検出遺構としてトレンチを西から東方向に斜めに横断する素掘り溝S D25がある。溝S D25は幅約1m、深さ0.8mで、断面形は「U」字形を呈する。埋土は灰色粗砂であり、遺物の出土はみられない。遺物包含層から中世土器の出土をみている。

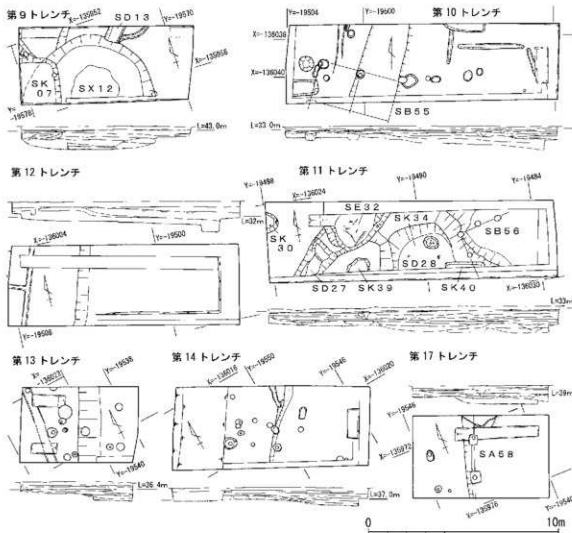
5) 第5トレンチ 第4トレンチの東側下段に設けたトレンチである。全長は8.5mを測る。南東方向に下る安定地面を検出したが、遺構の存在は確認できない。上層では中世土器に混じって平瓦の出土もみえた。

6) 第6トレンチ 第5トレンチの北東にやや離れて設けたトレンチで、全長は5mを測る。第5トレンチと同様に遺構の検出はみられないが、中世遺物の包含層が存在した。

7) 第7トレンチ 第4トレンチの東側下段に位置し、第3・第4トレンチのほぼ中間に設定したトレンチである。標高41.8mにあたる地表下約0.3m付近で遺構面を検出した。自然流路とみるS R16の北東岸がトレンチの中央部を斜めに横断する。また、トレンチ東部から耕作に伴う素掘り溝を検出した。耕作溝が自然流路S R16に切り勝つ。自然流路S R16は断ち割り調査を行ったが灰色系の砂が厚く堆積し、検出面下約0.8mでも底面に達しなかった。自然流路S R16では遺物は出土していない。遺物包含層中から平瓦・丸瓦の破片が10数点出土した。

8) 第8トレンチ 第7トレンチの北側に設けた全長約6mのトレンチである。標高42m付近に安定面を検出したが、遺構と遺物は確認できなかった。

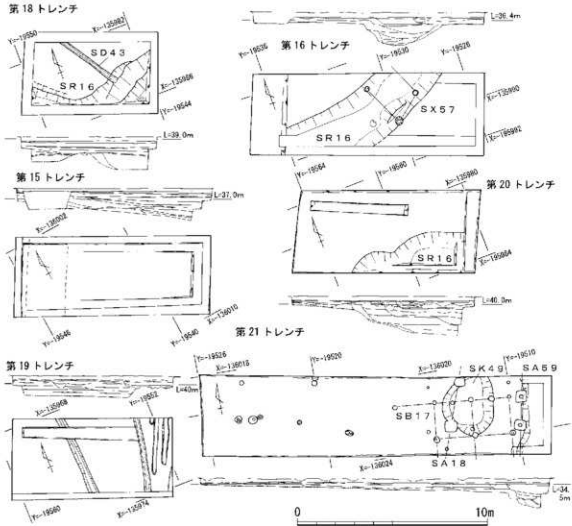
9) 第9トレンチ 第2トレンチの東側下段に設けたトレンチであり、第8トレンチからは北西側1段上部に位置する。トレンチの全長は9mを測る。トレンチ内では緩やかに東に下る標高



第17図 下馬遺跡トレンチ実測図2

427~43mの遺構面から、性格不明の土坑SK07・土坑SX12及び素掘り溝を検出した。土坑SK07・土坑SX12は切合い関係があり、土坑SX12が土坑SK07に先行する。土坑SK07は方形土坑の一部とみられるが、深さは約0.3mで溝底は平坦である。埋土中から中世瓦の出土をみている。土坑SX12はトレンチのほぼ中央にあって、直径約7mの半円形相当部分が検出された。円形土坑である場合は南側半分がトレンチ外に位置することになる。土坑中央部が最深部となり、同地点は検出面から約0.6m下がっている。埋土上層は砂質土であるが、下層部分は暗灰色粘質土が堆積する。上層下部から中世土器・瓦等の遺物の出土をみた。

10)第10トレンチ 調査対象地の東南端部の水田に設けたトレンチである。トレンチの全長は14.5mを測る。トレンチ西端部では遺構面が地表下0.3mにあり、東端部では標高31.8mにあたる地表下1.3mにあり、東に向かって次第に下る。遺構面上の遺物包含層はトレンチ西端部には存在せず、中央部から東側にかけて厚みを増し、瓦器塚等の土器を含んでいる。遺構面の削平を受けたトレンチ西部から柱穴・土坑の検出をみた。柱穴の検出状況からみて、総柱建物跡と想定する掘立柱建物跡SB55が1棟存在する可能性が高い。掘立柱建物跡SB55は北から東に約16°振



第18図 下馬遺跡トレンチ実測図3

り、柱穴内から瓦質羽釜が出土した。

11)第11トレンチ 第10トレンチの北側に位置する。トレンチの全長は15mを測る。ここでは、掘立柱建物跡1棟(SB56)・溝2条(SD27・SD28)・井戸1基(SE32)・土坑4基(SK30・SK34・SK39・SK40)など、特に多くの遺構の集中がみられた。掘立柱建物跡SB56の方位振り角は北から西に約15°を測り、東西2間・南北1間分を検出した。建物の全容が判明しない状況から、建物主軸は不明な点が多い。溝・井戸及び土坑の埋土中から土師器・瓦器等の遺物が出土した。遺物は概ね12世紀後半～13世紀の年代観を示している。

12)第12トレンチ 第11トレンチの北側、1段下がった水田に設けたトレンチである。耕作土直下には砂礫層が厚く堆積し、耕作関連の暗渠以外の遺構は確認できなかった。また、遺物も出土していない。当該地は後世に大きく削平を受けた可能性が高い。

13)第13トレンチ 第5トレンチの南西側2段下がった水田に設けたトレンチである。遺構面は緩やかに東方向に下り、10数個の柱穴を検出した。包含層から、8世紀後半～12世紀の遺物が出土した。

14) 第14トレンチ 第5・第13トレンチ間に位置する。トレンチの全長は約10.5mを測る。トレンチ西端では埋設送水管の攪乱がみられたが、トレンチ中央部から第13トレンチと同様に多くの柱穴を検出した。

15) 第15トレンチ 第14トレンチの北側に位置する。東に向かって下る安定地面を検出したが、顕著な遺構や遺物は検出できなかった。

16) 第16トレンチ 第15トレンチの北東に位置する。トレンチ中央部を西から東に下る自然流路S R16と橋脚とみられる柱穴S X57を検出した。自然流路S R16は幅約3m、深さ約1.2mの規模を測り、底面付近から8世紀後半の須恵器・土師器の出土をみた。自然流路S R16の両岸斜面から3ヶ所の柱穴を検出した。柱穴は直径約0.3mで深く掘り下げられている。柱穴の配列状況から、橋脚である可能性が高い。

17) 第17トレンチ 第16トレンチの西側上段に位置する。遺構面は東に下り、中央付近から方形と円形の掘形をもつ柱穴を検出した。このうち、方形掘形の柱穴で構成される柵S A58の柱間間隔は約2.1mを測り、その軸線は北から東に約20°振る。掘立柱建物跡もしくは柵の一部とみられる遺構である。

18) 第18トレンチ 第17トレンチの南に位置する。南壁付近から第16トレンチで検出したS R16の続きと考えられる自然流路の北岸部分を検出した。この北岸部は大きく蛇行する状況にある。トレンチ南東隅部の流路底面付近から、木製の盤が出土している。

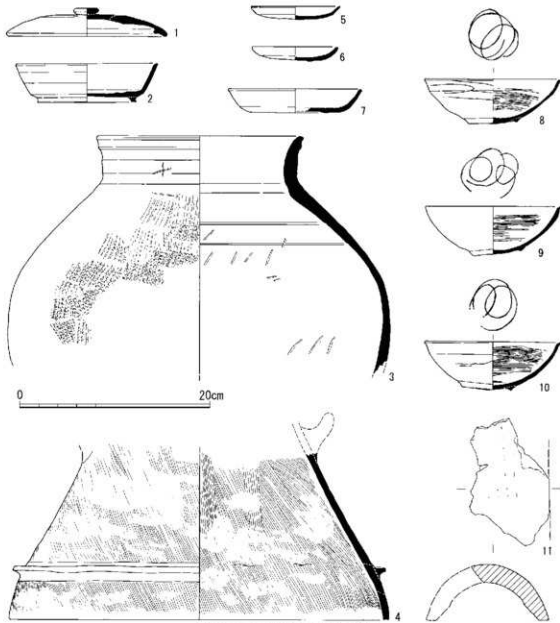
19) 第19トレンチ 第8・第17トレンチ間に設けたトレンチである。時期不明の素掘り溝と耕作関連溝を検出したが、遺物は出土していない。

20) 第20トレンチ 第7・第18トレンチ間に設けたトレンチである。南壁面付近から自然流路S R16と考えられる北岸部を検出した。遺物は出土しなかった。

21) 第21トレンチ 第11トレンチの西側上段の畑地に設けたトレンチである。遺構面は西から東に緩やかに下り、トレンチ中央から東端にかけて暗茶褐色の遺物包含層が存在した。トレンチの西部は遺構面が削平を受けたとみられ、柱穴の分布も疎らである。これに対しトレンチ東部では、掘立柱建物跡S B17や柵S A18・柵S A59・柱穴・土坑S K49などの遺構が集中する。土坑S K49は浅い楕円形土坑で、6世紀末から7世紀の土師質の移動式竈が破片で出土した。掘立柱建物跡S B17は比較的小規模な柱穴で構成され、建物軸線は北から東に約5°振る。方形掘形の柱穴が並ぶ柵S A18と柵S A59は建物跡もしくは柵とみられるが、それぞれ異なった遺構と判断される。柵S A18は柱間間隔が約2.4mで、軸線は北から東に約20°の振り角を示す。一方の柵S A59は柱間心々間隔が約1.5mで、軸線が北から東に約12°振っている。また、柵S A18は土坑S K49の埋土を切っている。

2. 出土遺物

今回調査では、飛鳥時代から室町時代にかけての遺物が出土している。各トレンチの出土遺物の時代的な傾向は以下のとおりである。第2・第7・第9トレンチを中心とした丘陵裾部では、



第19図 下馬遺跡出土遺物実測図

14～15世紀の瓦質土器・瓦類の出土が多い。また、第13・第14・第16トレンチでは8世紀後半の土器が出土している。一方、遺跡東部の緩傾斜地に設けた第10・第11トレンチでは、碗や皿などの瓦器・瓦質羽釜・土師皿等が出土しており、12世紀後半頃のものと同判断される。

第19図1は、第13トレンチ出土の須恵器蓋である。口縁内側に返りを有し、つまみが付く。口径17.1cm、器高2.9cm。2・3は、第16トレンチ自然流路SR16から出土した須恵器の杯Bと壺である。2の杯Bは口径15.0cm、器高4.2cmである。3の壺は、口縁部がやや外反気味に短く立ち上がり、端部外面がやや肥厚して面をもつ。体部外面は格子目タタキ、内面は青海波文がわずかに残る。口径21.9cm、体部径40.3cmである。4は、第21トレンチ土坑SK49出土の移動式竈である。体部は上方に向かって極端に窄まる形状で、下端部はやや内湾して終わる。体部外面には、下端の上方約5cmの位置に1本の貼り付け突帯を巡らす。また、下端面から上方約18cmの

位置には把手が付けられていたようである。胎土は良質で、内外面は丁寧にハケメ調整する。下端部の直径は40.1cm、把手下端部での直径は24.6cm、残存部の器高は約18cmを測る。内面には顕著な煤の付着は確認できない。5～11は第11トレンチ溝S D28から出土した。5～7は土師器皿で、8～10は瓦器椀である。土師器皿には小皿と大皿があり、口径9cmと14cmに大別される。瓦器椀は口径14.3cm、器高4.8cm前後で、底部に断面三角形の輪高台を貼り付ける。11は、第7トレンチ出土の丸瓦である。内側には布目痕が残り、外面は幅広い縦ミガキを施す。

3. まとめ

今回の調査は、下馬遺跡の性格と範囲確認が主目的として実施した。その結果、21か所のトレンチでは様々な調査成果を得ることができた。

遺跡北西部の丘陵裾部と南東部の扇状地先端付近に、多くの遺構・遺物が集中する状況が確認できた。一方、調査対象地の中央付近は遺構・遺物の分布が少ない傾向にある。これは第16・第18・第20トレンチで検出した自然流路S R16が中央付近を貫く環境から、土地利用が進まなかったとみられる。自然流路S R16では奈良時代後半の遺物が出土したが、後世の遺物を含まないことから、短期間で埋没したようである。丘陵裾部の第2・第9トレンチでは柱穴・土坑を検出しており、瓦も一定量出土しており、周辺部に瓦葺の建物跡が存在する可能性がある。出土遺物から室町時代の寺院関連施設である可能性が高いとみられる。東側下方の第10・第11・第21トレンチでは、平安時代後期の井戸・溝・土坑・掘立柱建物跡等の集落関連遺構を確認した。第21トレンチの土坑S K49や第13トレンチ包含層中から飛鳥時代の遺物が出土していることから、同時期の遺構が周辺部に存在する可能性がある。これらの遺構群は、周辺に所在する里廃寺や下粕庵寺と何らかの関連が予想される。下馬遺跡・片山遺跡では発掘調査を継続して実施しており、さらなる調査成果に期待が寄せられる。

(竹原一彦)

調査参加者は次のとおりである。

調査補助員：大谷博則・後藤愛弓・芝地夏美・永井里佳・原田昌浩・松崎健太・渡辺理気
 整理員：井上 聡・寺尾貴美子・羽根 舞・丸谷はま子・中島恵美子・荒川仁佳子・川村真由美・谷上真由美・山川幸乃・田中ゆかり・福島厚子

圖 版



(1) 調査地の状況(北東から)



(2) 調査地の状況(南東から)



(1) 第2次Bトレンチ全景完掘状況
(南から)



(2) 第2次Cトレンチ全景完掘状況
(南から)



(3) 第2次Aトレンチ南半部完掘状況
(南から)

(1) 第2次AトレンチS X01内出土
土器(東から)



(2) 第2次AトレンチS X01内出土
銭貨など(東から)



(3) 第2次Aトレンチ南壁断面
(北から)





(1) 第3次調査前の状況(北西から)



(2) 第3次調査前の状況(北東から)



(3) 第3次1区設定状況(南西から)

(1) 第3次溝S D27完掘状況
(北西から)



(2) 第3次溝S D27完掘状況
(南東から)



(3) 第3次溝S D27堆積状況
(南東から)





(1) 第3次土坑S K42堆積状況
(東から)



(2) 第3次土坑S K42完掘状況
(南西から)



(3) 第3次土坑S K29堆積状況
(北東から)

(1) 第3次土坑S K29完掘状況
(南東から)



(2) 第3次土坑S K40堆積状況
(北西から)



(3) 第3次土坑S K36完掘状況
(南東から)





(1) 第3次土坑S K36完掘状況
(東から)



(2) 第3次2区全景(北西から)



(3) 第3次2区土坑S K03礎廃棄状
況(南から)



(1) 第3次2区全景(北西から)



(2) 第3次2区全景(南西から)



(3) 第3次1区下層調査状況(北西から)



(1) 第3次作業状況(南西から)



(2) 第3次下層谷部堆積状況
(南東から)



(3) 第3次谷部堆積状況近景
(東から)

(1) 第3次1区下層谷部堆積状況
(北西から)

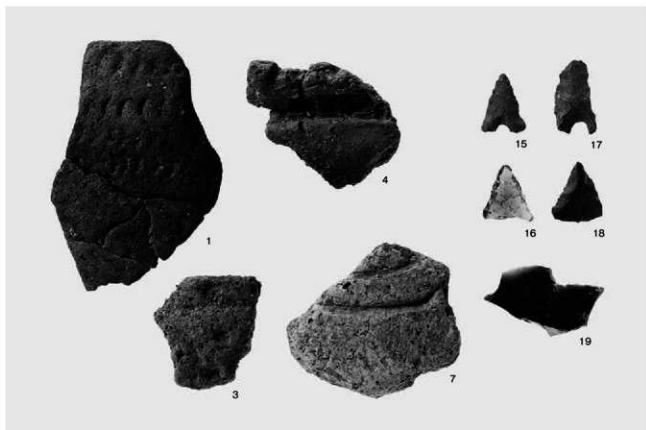


(2) 第3次1区下層谷部堆積状況
(南西から)

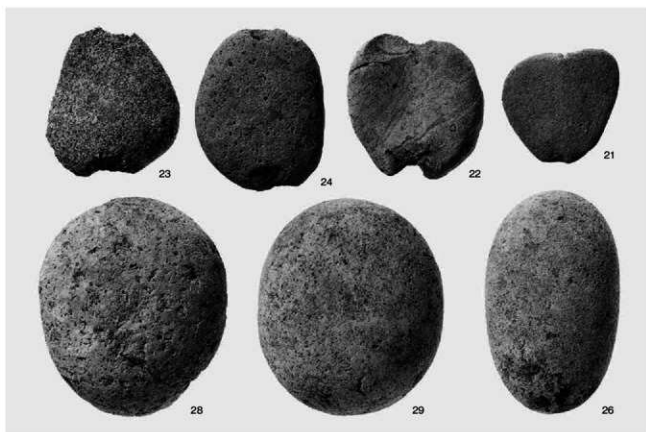


(3) 第3次磨石出土状況(南西から)

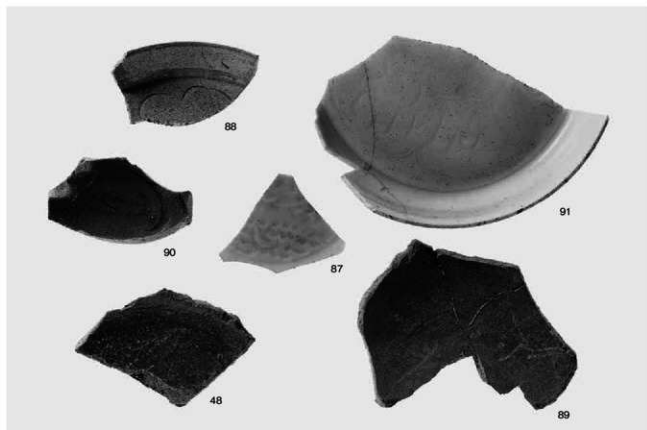




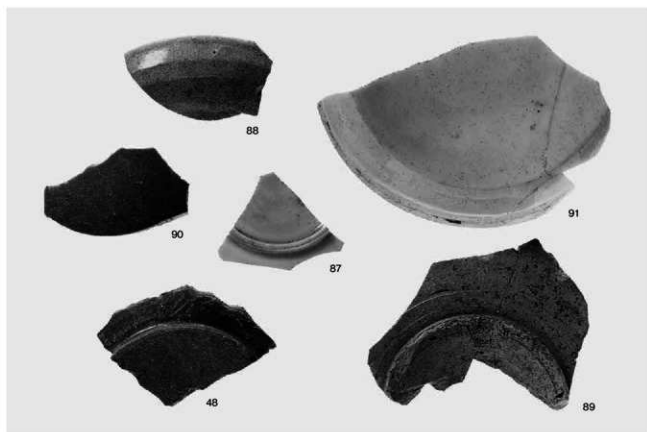
(1) 第3次出土遺物1 (番号は実測図に対応する)



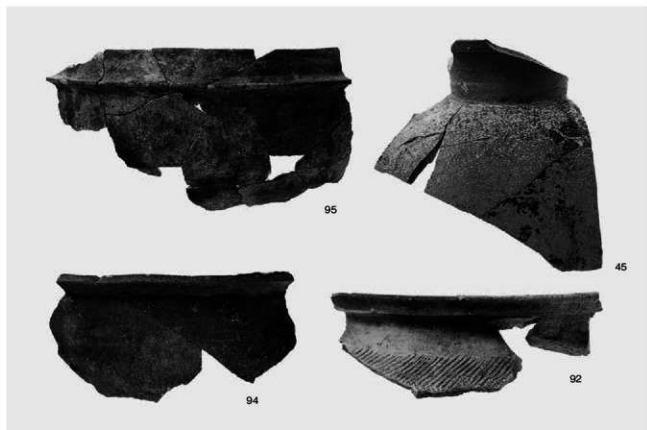
(2) 第3次出土遺物2 (番号は実測図に対応する)



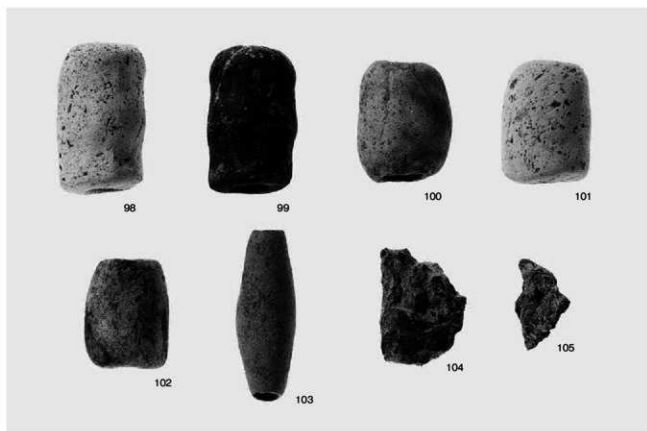
(1) 第3次出土遺物3 (番号は実測図に対応する)



(2) 第3次出土遺物4 (番号は実測図に対応する)



(1) 第3次出土遺物5 (番号は実測図に対応する)



(2) 第3次出土遺物6 (番号は実測図に対応する)



(1) 1トレンチ南半全景(北東から)



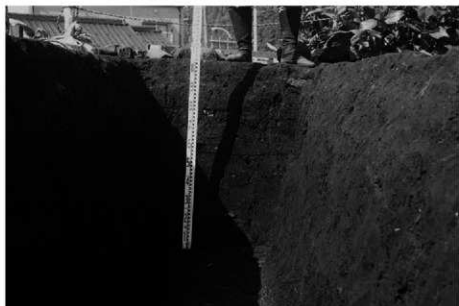
(2) 1トレンチ北半全景(南西から)



(3) 1トレンチ土層断面(南西から)



(1) 2区作業風景(南西から)



(2) 2-1トレンチ北端土層断面
(南西から)



(3) 2-1トレンチ上層全景
(北東から)



(1) 2-1 トレンチ全景(南西から)



(2) 2-2 トレンチ南端土層断面
(北東から)



(3) 2-2 トレンチ中央部土層断面
(南西から)



(1) 2-2トレンチ中央部全景
(南西から)



(2) 2-2トレンチ南半部全景
(西から)



(3) 2-2トレンチ北半部全景
(南西から)

(1) 2-3 トレンチ土層断面
(南西から)



(2) 2-3 トレンチ全景(北東から)



(3) 2-4 トレンチ土層断面
(南西から)





(1) 2-4トレンチ下層全景
(南西から)



(2) 2-4トレンチ下層北端部全景
(北東から)



(3) 2-4トレンチ下層
土坑S K21全景(南東から)

(1) 2-4トレンチ下層 溝SD32
全景(東から)



(2) 2-5トレンチ全景(南西から)



(3) 3-2トレンチ作業風景
(北から)





(1) 3-1 トレンチ全景(北東から)



(2) 3-1 トレンチ北半部全景
(南西から)



(3) 3-1 トレンチ土層断面
(南西から)

(1) 3-2トレンチ上層遺構面全景
(北東から)

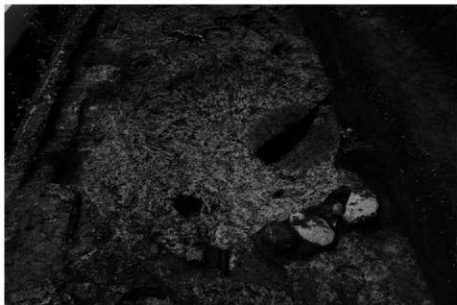


(2) 3-2トレンチ上層遺構面全景
(南西から)



(3) 3-2トレンチ下層遺構面全景
(南西から)





(1) 3-2トレンチ土坑SK28全景
(北東から)



(2) 3-2トレンチ土坑SK29
完掘状況(北から)



(3) 4-1トレンチ全景(北から)



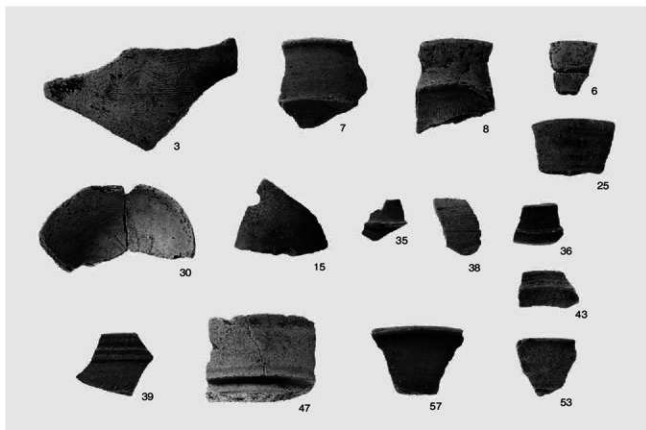
(1) 4-2 トレンチ全景(南西から)



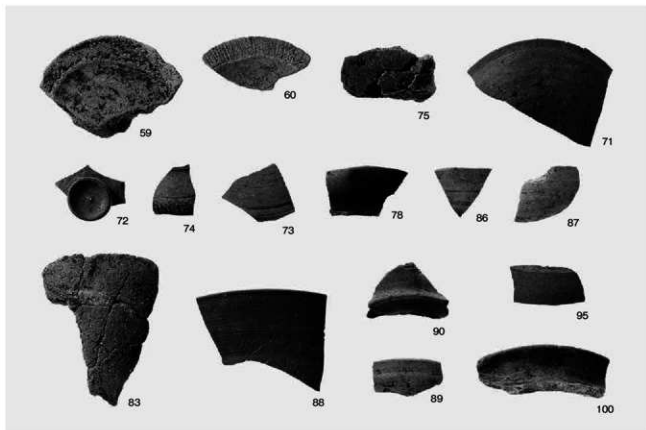
(2) 4-3 トレンチ全景(北東から)



(3) 4-4 トレンチ全景(北東から)



(1) 出土遺物 1



(2) 出土遺物 2

(1) 調査地北側遠景(南西から)



(2) 調査地全景(西から)



(3) 調査地南側(北西から)





(1) 1地区掘削状況(南から)



(2) 1地区全景(西から)



(3) 1地区北東部(西から)

(1) 2地区掘削状況(西から)



(2) 2地区南壁断面
(拡張前、北西から)



(3) 2地区溝S D 1断面(北から)





(1) 2地区溝SD1(南から)



(2) 2地区溝SD1(北から)



(3) 2地区溝SD1断面
(拡張部西壁、北東から)

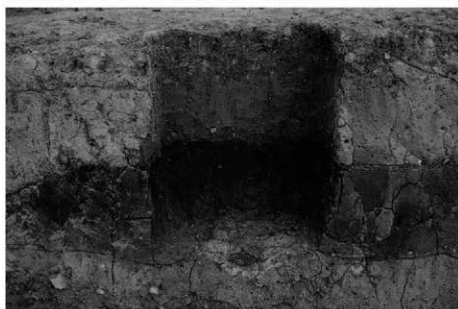
(1) 3地区全景(西から)



(2) 3地区杭跡掘削状況(北西から)



(3) 3地区杭跡(北から)



丁谷古墓



(1) 調査前、右側に墓碑(南東から)



(2) 調査前、手前に墓碑(北東から)



(3) 南西部、溝 S D01 検出状況
(北西から)

丁谷古墓

(1) 南西部、横断アゼ断面と北東部の掘削作業(南西から)



(2) 南西部、縦断アゼ断面(西から)



(3) 北東部、アゼ断面(南西から)



丁谷古墓

(1) 土坑 S K 02 (礎混入) 検出状況
(東から)



(2) 土坑 S K 02 完掘状況 (東から)



(3) 調査地全景、完掘状況
(北東から)





(1) 1トレンチ調査前全景(東から)



(2) 1トレンチ全体(西から)



(3) 1トレンチ溝SD03、土坑SK01完掘状況(南から)



(1) 1トレンチ溝SD03
土層堆積状況(西から)



(2) 1トレンチ溝SD03
土器出土状況(南西から)

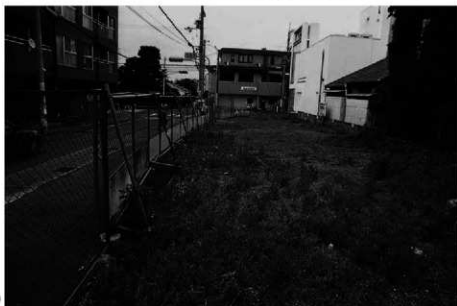


(3) 1トレンチ土坑SK01
検出状況(南から)

(1) 1 トレンチ土坑 S K01 石製品
(題目塔、北から)



(2) 2 トレンチ調査前風景(西から)



(3) 2 トレンチ全体(東から)





(1) 2トレンチ溝 S D07 全体
(東から)



(2) 2トレンチ溝 S D07
土層堆積状況 (東から)



(3) 2トレンチ井戸 S E05 完掘状況
(西から)

(1) 2 トレンチ井戸 S E 05
土層堆積状況(東から)

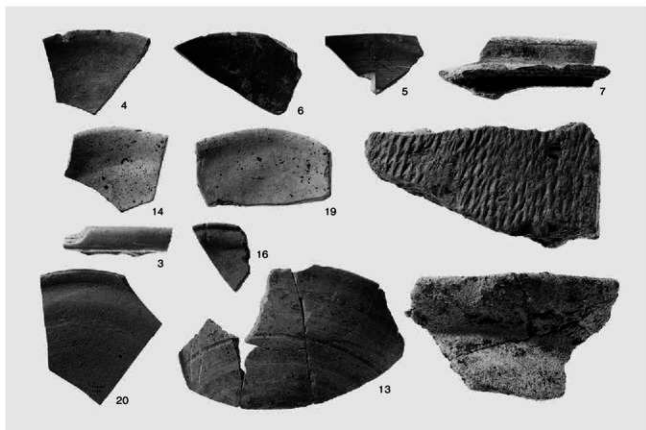


(2) 2 トレンチ P 3 検出状況
(上が北)



(3) 2 トレンチ P 3 土層堆積状況
(南から)





(1) 出土遺物 1



(2) 出土遺物 2

(1) 調査前の状況(北から)



(2) 調査トレンチ全景(北から)



(3) 調査トレンチ中央部流路跡
S D02・04(北から)





(1) 流路跡 S D01(西から)



(2) 流路跡 S D01(北から)



(3) 流路跡 S D01東壁断面(西から)

(1) 流路跡 S D02(東から)



(2) 調査トレンチ北部東壁断面
(南西から)



(3) 調査トレンチ南部東壁断面
(西から)

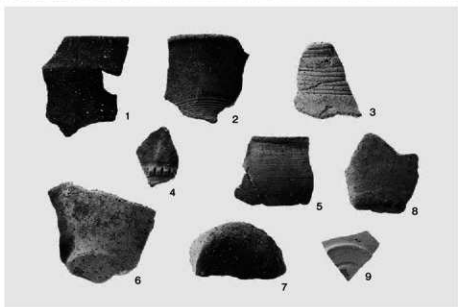




(1) 調査トレンチ全景(南から)



(2) 南壁断面(北から)



(3) 出土遺物



(1) C地区調査前の状況(北東から)



(2) C地区1トレンチ全景(東から)



(3) C地区2トレンチ全景(東から)



(1) C地区3トレンチ全景(西から)



(2) C地区2トレンチ南壁断面
(北西から)

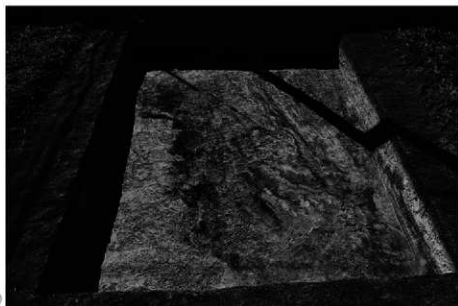


(3) C地区4トレンチ南壁断面
(北から)

(1) C地区2トレンチ西壁断面
(北東から)



(2) C地区4トレンチ全景(北から)



(3) C地区4トレンチ深掘り状況
(東から)





(1) F地区全景(北から)



(2) F地区東壁断面(北西から)



(3) B2地区全景(北西から)

(1) D地区全景(西から)



(2) D地区重機深掘り状況(北から)



(3) A地区全景(北西から)





(1) A地区深掘り状況(南東から)



(2) A地区南壁断面(北東から)



(3) A地区東西調査区西半部(東から)

(1) A地区東西調査区東半部
(西から)



(2) 区画整理前、木樋出土状況
(北から)



(3) A地区中央部断ち割り断面
(南西から)





(1) A地区重機断ち割り状況
(南西から)



(2) G地区掘削状況(北西から)



(3) A地区作業状況(北東から)

八幡木津線関係遺跡 図版第 1

鞍岡山 2 号墳



(1) 鞍岡山 2 号墳調査前全景(北西から)



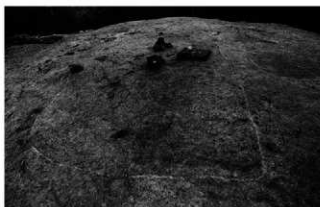
(2) 2 号墳表土除去後墳丘全景(北西から)



(3) 墳丘北斜面畦畔土層断面(北西から)



(4) 墳丘西裾周溝部畦畔土層断面(北から)



(5) 埋葬施設 S X 03 検出状況(北東から)



(6) 埋葬施設 S X 03 調査状況(南西から)



(7) 埋葬施設 S X 03 木棺設置坑検出状況(南西から)



(8) 埋葬施設 S X 03 畦畔 b-b' 土層断面(南西から)



(1) 鞍岡山2号墳全景(北西から)



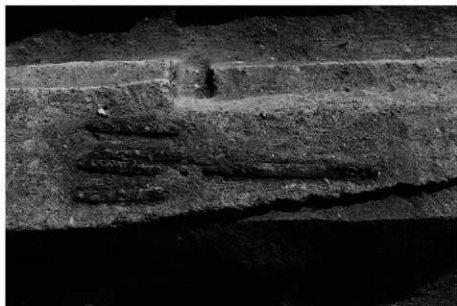
(2) 鞍岡山2号墳全景(左上が北)



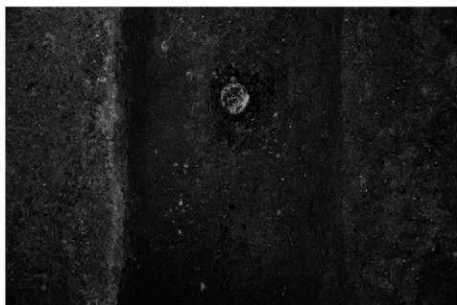
鞍岡山2号墳埋葬施設S X03全景(南西から)

八幡木津線関係遺跡 図版第4

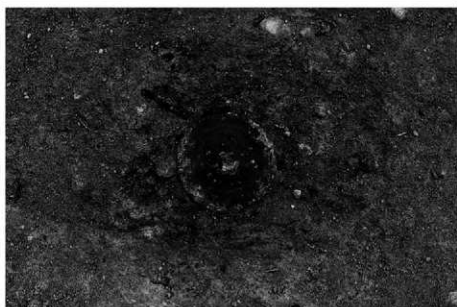
鞍岡山2号墳



(1)埋葬施設S X03西棺外鉄製品
出土状況(北西から)

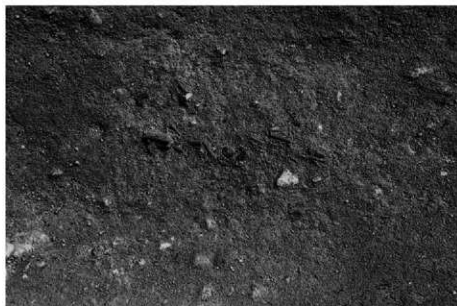


(2)埋葬施設S X03東棺内副葬品
(四獣形鏡・玉類)出土状況
(南西から)



(3)四獣形鏡出土状況(北西から)

(1) 東棺棺内玉類出土状況
(北西から)



(2) 東棺棺外玉類(北群)出土状況
(北から)



(3) 東棺棺外玉類(南群)出土状況
(北西から)





(1)土器棺検出状況(北東から)



(2)土器棺上部土器片除去後(北東から)



(3)土壙墓S X01～02検出状況(北東から)



(4)土壙墓S X01須恵器杯身出土状況(北西から)



(5)土壙墓S X01～03全景(北から)



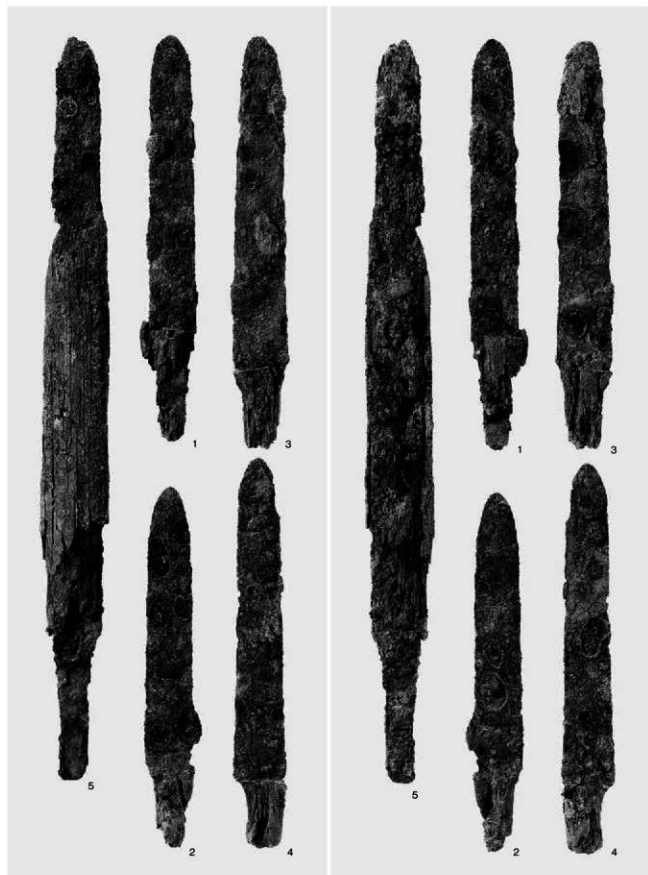
(6)土壙墓S X01～03全景(北東から)



(7)2号墳墳丘部土器出土状況



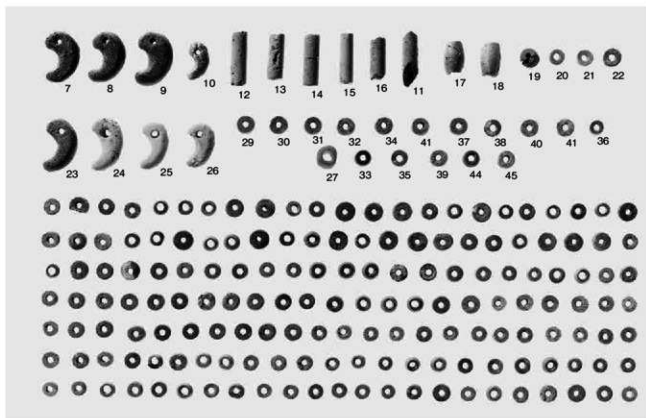
(8)2号墳墳丘部高杯出土状況



埋葬施設 S X 03出土金属製品(槍・剣)

八幡木津線関係遺跡 図版第 8

鞍岡山 2 号墳



八幡木津線関係遺跡 図版第9

片山遺跡・下馬遺跡



(1)片山遺跡・下馬遺跡遠望(南東から)



(2)調査地遠景(北西から)



(3)片山遺跡第1トレンチ全景(南東から)



(4)片山遺跡第2トレンチ全景(北東から)



(5)下馬遺跡第1トレンチ全景(西から)



(6)下馬遺跡第2トレンチ全景(西から)



(7)下馬遺跡第2トレンチ東部遺構検出状況(南東から)



(8)下馬遺跡第3トレンチ全景(東から)



(1) 第4トレンチ全景(北西から)



(2) 第5トレンチ全景(北西から)



(3) 第6トレンチ全景(北西から)



(4) 第7トレンチ全景(北西から)



(5) 第8トレンチ全景(北西から)



(6) 第9トレンチ全景(北西から)



(7) 第10トレンチ全景(西から)



(8) 第12トレンチ全景(西から)

下馬遺跡

(1) 第11トレンチ全景(西から)



(2) 第11トレンチ溝 S D28、
土坑 S K34(北から)



(3) 第11トレンチ S K34
遺物出土状況(北西から)



下馬遺跡



(1) 第11トレンチ東部下層面(東から)



(2) 第13トレンチ全景(南東から)



(3) 第14トレンチ全景(北から)



(4) 第15トレンチ全景(北西から)



(5) 第18トレンチ全景調査状況(北東から)



(6) 第18トレンチ自然流路S R 16木製品出土状況(北から)



(7) 第19トレンチ全景(北西から)



(8) 第20トレンチ(北西から)

下馬遺跡



(1) 第16トレンチ全景(北西から)



(2) 第16トレンチ柱穴 S X57
(北西から)



(3) 第16トレンチ自然流路 S R16
遺物出土状況 1 (北西から)

下馬遺跡



(1) 第16トレンチ自然流路S R16
遺物出土状況2(北西から)



(2) 第17トレンチ全景(北西から)



(3) 第17トレンチ構S A58
(北東から)

下馬遺跡



(1) 第21トレンチ全景(北西から)

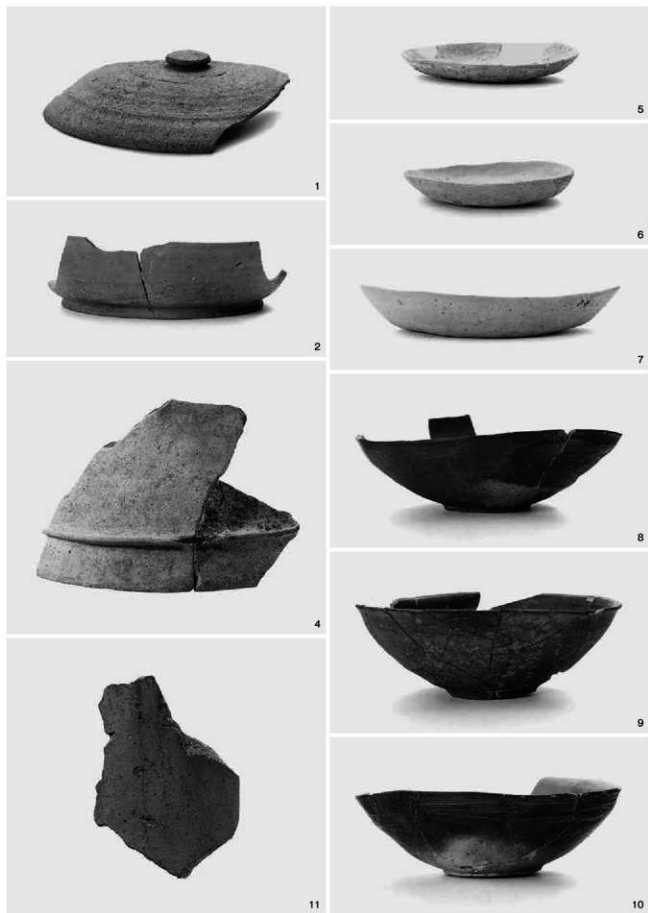


(2) 第21トレンチ土坑 S K 49
(南東から)



(3) 第21トレンチ構 S A 18・59
(南東から)

下馬遺跡



下馬遺跡主要出土遺物

報告書抄録

ふりがな	
書名	
副書名	
巻次	
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第140冊
編著者名	
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 Tel.075 (933) 3877
発行年月日	西暦2010年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
なかのだんいせきだいに・さんじ	ふくちやましおおえちようきたありじちない				20081112 ～ 20081219 20090623 ～ 20090828	700	道路建設
仲ノ段遺跡第2・3次	福知山市大江町北有路地内	26201 47	35° 23' 51"	135° 10' 56"			
あまたうちいせきだいにじ	ふくちやましおおえちようあまたちない				20090421 ～ 20090612	350	道路建設
天田内遺跡第2次	福知山市大江町天田内地内	26201 12	35° 24' 07"	135° 08' 58"			
たんばあやべどうろかんけいいせきふかしのこふんぐん	ふないぐんきょうたんばちようそね				20090508 ～ 20090706	500	道路建設
丹波綾部道路関係遺跡 深志野古墳群	船井郡京丹波町曾根	26407 11	35° 09' 17"	135° 25' 06"			
たんばあやべどうろかんけいいせきちょうたにこほ	ふないぐんきょうたんばちよういわき				20090803 ～ 20090918	200	道路建設
丹波綾部道路関係遺跡 丁谷古墓	船井郡京丹波町井脇丁谷	26407 3	35° 11' 20"	135° 21' 34"			
ながおかきゆうせきだいいんひやくななじゅうさんじ・みなみかきうちいせき	むこうしてらどちようみなみかきうちごじゅうろくのいち				20090707 ～ 20090728	60	道路建設
長岡宮跡第473次・南垣内遺跡	向日市寺戸町南垣内56-1	26208 24・61	34° 57' 05"	135° 42' 00"			
ながおかきょうあとうきょうだいきゅうひやくはちじゅうろくじ・かみさといせき	ながおかきょうしいのうちたまのうえごのいち				20091020 ～ 20091203	360	道路建設
長岡京跡右京第986次・上里遺跡	長岡京市井ノ内玉ノ上5-1	26209 7・107	34° 56' 33"	135° 41' 30"			

しんでんいせきだいな なじ	やわたしうちざと あらば・ふかだち ない								
新田遺跡第7次	八幡市内里荒場・ 深田地内	26210	38	34° 51' 02"	135° 43' 31"	20091020 ～ 20091203	360	道路建設	
やわたきづせんかんけ いいせきくらかおやま にごうふん	そうらくぐんせい かちょうおおあざ しもこまこあざだ いふくじ・ながし ば								
八幡木津線関係遺跡鞍 岡山2号墳	相楽郡精華町大字 下粕小字大福寺・ 長芝	26364	4.2	34° 46' 31"	135° 47' 05"	20081111 ～ 20090309	1,000	道路建設	
やわたきづせんかんけ いいせきかたやまいせ き	そうらくぐんせい かちょうおおあざ しもこまこあざか たやま								
八幡木津線関係遺跡片 山遺跡	相楽郡精華町大字 下粕小字片山	26364	29	34° 46' 21"	135° 47' 17"	20081111 ～ 20090309	120	道路建設	
やわたきづせんかんけ いいせきげばいせき	そうらくぐんせい かちょうおおあざ しもこまこあざげ ば・かたやま								
八幡木津線関係遺跡下 馬遺跡	相楽郡精華町大字 下粕小字下馬・片 山	26364	30	34° 46' 27"	135° 47' 13"	20081111 ～ 20090309	880	道路建設	

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仲ノ段遺跡第 2・3次	集落跡	縄文	(包含層)	縄文土器・石鏃・石斧・ 石錘・剃片 土師器・須恵器 須恵器・黒色土器・緑軸 陶器 土師器・瓦器・中国製磁器・ 貨銭 肥前系磁器	
	集落跡	古墳	(包含層)		
	集落跡	奈良・平 安	(包含層)		
	集落跡	中世	土坑・溝		
	集落跡	近世	ピット・土坑		
天田内遺跡第2 次	集落跡	弥生	(包含層)	弥生土器 土師器・須恵器 土師器	
	集落跡	古墳	溝・土坑		
	集落跡	中世	土坑		
丹波渡部道路関 係遺跡深志野古 墳群	集落跡	平安	土坑	須恵器 瓦器・中国製陶磁器・丹 波焼	
	集落跡	中世	(包含層)		

丹波畿部道路関係遺跡丁谷古墓	古墓か	不明	溝・土坑		
長岡宮跡第473次・南垣内遺跡	集落跡 集落 集落跡	古墳 平安 中世	溝・土坑 溝・土坑 土坑	土師器・須恵器 土師器・須恵器・瓦・埴 土師器・瓦器・中国製陶 磁器・石塔	
長岡京跡右京第986次・上里遺跡	集落跡 集落跡 集落跡	縄文 弥生 弥生～古 墳	流路 流路	縄文土器 弥生土器 土師器	
新田遺跡第7次	生産跡	近世	溝(護岸施設)・流路跡		
八幡木津線関係遺跡鞍岡山2号墳	古墳	古墳	東棺 西棺 土器棺 土壟墓	四獣形鏡1・管玉・勾玉・ 白玉200余点 鉄槍・鉄剣5 直口壺2 須恵器	
八幡木津線関係遺跡片山遺跡	集落跡	中世 不明	溝 水田	土師器	
八幡木津線関係遺跡下馬遺跡	集落跡	飛鳥 奈良 平安	(包含層) 土坑・柱穴・流路 掘立柱建物跡・井戸・溝・土坑	須恵器・土師器 須恵器・土師器・瓦 須恵器・土師器・瓦器	

所収遺跡名	要 約
仲ノ段遺跡第2・3次	遺構としては中世の土坑・溝、近世の土坑などを検出したにとどまったが、縄文時代前期・中期・後期の土器や石器、古墳時代後期の須恵器、奈良・平安時代の須恵器、土師器、黒色土器などの遺物が出土し、周辺にそれらの時代の集落が存在していることが明らかとなった。
天田内遺跡第2次	古墳時代の溝・土坑、中世の土坑などを検出するとともに、弥生時代後期～古墳時代後期にかけての遺物が多量に出土した。周辺に当該期の集落が広がっていることが明らかとなった。
丹波畿部道路関係遺跡深志野古墳群	深志野古墳群の最南端を調査したが、古墳の形跡とみられる遺構・遺物は検出されなかった。中世以前の溝や平安時代の土坑、包含層中から縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器などが出土したことから、周辺の谷部や丘陵裾部に当該期の集落や墓域が存在している可能性がある。
丹波畿部道路関係遺跡丁谷古墓	直径約7.0m、比高差約0.8mのマウンド上に石碑が置かれており、古墓と考えられていた。石碑が置かれていた地点の下層で、礫が詰まった隅丸方形の土坑を検出したが、出土遺物もなく、墓穴である確証は得られなかった。
長岡宮跡第473次・南垣内遺跡	宝善提院庵寺と関連する可能性のある平安時代前期の溝・土坑を検出した。また、中世以降の可能性が高い土坑・柱穴を検出し、物集家街道沿いの集落の一端を明らかにした。
長岡京跡右京第986次・上里遺跡	弥生時代～古墳時代の流路跡2か所と弥生時代の流路跡を確認した。流路内からは縄文時代晩期深鉢と弥生時代前期壺類が比較的まとまって出土したことから、当該期の集落は今回の調査地の北西部にあるものと推測される。

新田遺跡第7次	調査地は、八幡市美濃山丘陵の段丘直下に位置する。近世後期の農業用水路などを検出したが、砂層や砂利層の基盤層では明確な遺構・遺物は検出できなかった。
八幡木津線関係遺跡鞍岡山2号墳	丘陵頂部に所在する直径25～30m、墳高3.5mの円墳である。墳頂部に全長7.4m、幅3.5m、深さ0.8mの墓壇を設けている。墓壇底部で、同時に埋葬された木棺を2基検出した。東棺は全長5m、幅0.45mを測り、四獣形鏡1面、管玉、勾玉、白玉が200余点出土した。西棺は全長6m、幅0.6mを測り、鉄棺や鉄剣が5振出土した。副葬遺物から、男女が同時に埋葬されたと考えられる。5世紀前半の築造である。
八幡木津線関係遺跡片山遺跡	下馬遺跡の南東方に広がる集落遺跡である。近世の耕作溝などを検出したが、砂層を基盤層としており、他に明確な遺構、遺物は検出できなかった。
八幡木津線関係遺跡下馬遺跡	鞍岡山古墳群が所在する丘陵東方に広がる緩斜面上に位置する集落遺跡である。奈良時代と平安時代後期の掘立柱建物跡や溝などを検出した。周辺に所在する里麻寺や下粕麻寺との関連が想起される。

京都府遺跡調査報告集 第 140 冊

平成22年3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141